

主論文（本篇1）

専門用語の一般化に関する計量的研究

真田 治子

主論文（本篇1）

専門用語の一般化に関する計量的研究

真田 治子

専門用語の一般化に関する計量的研究

目次

第1章 論文の目的と背景	5
1.1.論文の目的	6
1.2.近代から現代までの社会的変化と日本語	7
1.2.a.西欧文化の受容	7
1.2.b.近代の語彙の特徴	10
1.3.語彙の史的変化の諸説	14
1.4.研究資料と分析方法	19
第2章 『哲学字彙』の学術漢語について	26
2.1.西周の語彙	27
2.2.『哲学字彙』と井上哲次郎	29
2.3.漢語表の作成手順	31
2.4.『哲学字彙』の語彙	32
2.4.a.版による訳語数の変動	32
2.4.b.訳語の変動の様相	35
第3章 外国語辞書にみられる学術漢語	45
3.1.調査の概要	46
3.2.宮島の研究とPiotrowskiカーブ	46

3.2.a.宮島の研究	46
3.2.b.Piotrowskiカーブの性格	48
3.2.c.Piotrowskiカーブによる「宮島データ」の分析	51
3.3.『哲学字彙』採録漢語と外国語辞書との比較	52
3.3.a.研究資料の性格	52
3.3.b.外国語辞書に採用された「学術漢語」	56
3.3.c.外国語辞書における「学術漢語」の類似度	58
3.3.d.Piotrowskiカーブによる「学術漢語」の分析	58
3.3.e.「学術漢語」と外国語辞書	69
第4章 学術漢語と各種語彙表採録単語との対照研究	76
4.1.調査の概要	77
4.2.現代語の語彙調査との対照	78
4.2.a.「雑誌九十種」の語彙調査との対照	78
4.2.b.「新聞」の語彙調査との対照	80
4.2.c.「テレビ」の語彙調査との対照	82
4.2.d.現代メディアの中の学術漢語	84
(付)郵便報知新聞の使用語彙の場合	88
4.3.「中央公論」用語表との対照	90
4.3.a.「中央公論」における学術漢語の量的構造	91
4.3.b.「中央公論」における学術漢語の類似度	93
4.4.小説の語彙との対照	96
4.4.a.「小説」における学術漢語の量的構造	97
4.4.b.「小説」における学術漢語の類似度	100
4.4.c.Piotrowskiカーブによる「小説」データの分析	101
4.5.結果の考察	104

第5章 学術漢語語彙と各種語彙表の採録語彙との比較研究	108
5.1. 調査の概要	109
5.2. 語彙表との比較、その他の調査手順	110
5.3. 現代国語辞典における採録学術漢語	112
5.3.a. 使用率に基づくグループ分け	112
5.3.b. 各グループの特徴	114
5.3.c. 用語変化の統計的多重分析	117
5.4. 現代国語辞典非採録の学術漢語	122
5.5. 近代における学術漢語の生態	125
第6章 シナジェティック（協同的）言語学理論による学術漢語の分析	129
6.1. 調査の概要	130
6.2. 調査の対象	134
6.2.a. 語の長さ（拍）	134
6.2.b. 語の長さ（画数）	135
6.2.c. 語の古さ	135
6.2.d. 多義性	138
6.2.e. 雑誌における使用率	139
6.2.f. 新聞における使用率	139
6.3. 各要素間の関係と回帰分析	140
6.4. シナジェティック（協同的）言語学理論の適用	146
6.5. 近代学術漢語の量的性格	149
第7章 各種基本語彙表における学術漢語の採用	155
7.1. 調査の概要	156

7.2.教育基本語彙における学術漢語 156
7.3.日本語教育のための基本語彙における学術漢語 159
7.4.現代語彙における学術漢語の基本度 161
第8章 結論 164
8.1.分析結果のまとめ 165
8.1.a.『哲学字彙』各版の比較 165
8.1.b. 外国語辞書の調査 165
8.1.c. 各種語彙表採録単語との対照 166
8.1.d. 各種語彙表採録語彙との比較 168
8.1.e. シナジェティック言語学理論による分析結果 168
8.1.f. 基本語彙と学術漢語 169
8.2.学術漢語研究の課題 170
注記 および 謝辞 174
参考文献 176
図表一覧 194
欧文目次 および 欧文抄録 200
・英語版 200
・仏語版 218
・独語版 236

第1章 論文の目的と背景

第1章 論文の目的と背景

1.1. 論文の目的

この研究は、日本語における「語彙の史的変化」を俯瞰的かつ計量的にとらえたいという動機からまとめた論考である。

語彙の史的変化の中からここでは特に、今私達が使用している現代日本語のできあがっていき過程として現在までの約150年の日本語の変化を考察したいと考えた。この間の日本というのは、明治維新という変革のあと二度の世界大戦を経験し、さらに高度経済成長を経て、国際社会で先進国の仲間入りをはたすまで、特に西欧との交流という意味で社会的に非常に大きな変化があり、日本語も多くの影響を受けている。その約150年の日本語の語彙変化の中でも、ここでは筆者は特にその近代国家が形成される基盤となった明治初期に着目した。この明治初期という時代は、幕末のいくつかの外国との交流と開国を経て、西欧からそれまで一般の日本人が全く知らなかった（或は学者など一部の日本人しか知らなかった）文物が大量に導入され、近代国家としての日本が形成されていった時代である。そして、これらの文物の輸入に伴って、新しい言葉が様々な方法で盛んに造られたり古い語に新しい意味を付与したりしたことで語彙が急速に膨張した時代でもある。

筆者は、この新しい概念を表わす語、特に専門用語の中でも学術関係の用語が明治初期に導入されてから現在に至るまでの過程でどのようにして定着、一般化していったか、または定着できずに消失していったか、という語彙の消長に着目し、その全体像を主に計量的手法によって明らかにしたいと考えた。ここでは「専門用語」を各分野で「特別な定義が付与され、一定の使い分けが要求される」、「独特な語」や「特有用法」〔Tanaka-1978〕と考え、なかでも「学術的な専門用語」〔Tanaka-1999〕を「学術用語」と考えて、それが一般社会に広まっていく様相を雑誌・新聞・小説・外国語辞書などでの語の使用を通してみていくことにした。

従来、明治時代の語、特に幕末から明治にかけて、西欧の文物を新しく漢語の形で導入した、翻訳語としての和製漢語や「新漢語」〔Nihongo-1988〕の研究では、語誌の研究が多かった。このような個別の語の研究も非常に重要であるが、一方でより広い視点からそ

の時代の言語全体の動向をみることも必要であると思い、それには単に事例をあげるだけでなく語彙の計量的分析も効果的であろうと考えた。また、明治時代から現代までの間を調査するのであれば、洋装本という形態も導入され、それ以前の時期に比して印刷物・出版物などの記録もより確実に残っている可能性も高いので、なるべく多くの資料を網羅的に扱い、全体的な動向を見るという研究方法には向いていると考えられる。

そこで、明治初期に西欧の新しい概念を漢語の形で導入した学術用語を中心に、その時代から現代までの変化、特に語の一般化や使用の盛衰を様々な辞書や語彙表を複合的に調査することで全体的な傾向を分析することにした。

以下、この論文では、明治維新（1868）から第二次世界大戦の終結（1945）までを「近代」、それ以後現在までを「現代」と記述する。

調査した漢語の字体については、おおむね現在一般に使われているものを書き改めた。

また、この論文ではJIS規格第一水準・第二水準にない漢字を表記する時は部首を分解して、<O+O>の形で記した。例えば「語」という字を「<言+吾>」とするような表記法である。日本語のローマ字表記の時の長音記号は「o^ー」というような形で表記した。ラテン語の符号についても同様にした。また独語・仏語のアクセント記号については「o:([˘])」「e/([˘])」「e[˘]」「a[˘]」「i:[˘]」などと表記した。

図表については各章ごとに通し番号をつけ、「資料篇」にまとめた。

直接に参照した文献、注は各章の終わりにまとめ、さらにその他に参考にした文献も含めて巻末に「参考文献」としてあげた。

1.2.近代から現代までの社会的変化と日本語

1.2.a. 西欧文化の受容

近代の語彙の特徴は「和製漢語が多く作られたことと、外来語が多く日常に取り入れられ」〔Nihongo-1988〕たことであるという。この時代の和製漢語は西欧の事物や概念を翻訳したものが主体で、「直訳と意識の方法」〔Nihongo-1988〕があった。この他、既に当

時あった語に新しい意味を付与したり（例「社中」）、古語・廃語であったものを新しい意味に転用したり（例「観念」）、語を縮めるなどして変形したり（例「経済」）、中国で先に作られた訳語を借用したり（例「数学」）するなどの取り入れ方があった〔Nihongo-1988〕。

この時代の語彙の特徴を前後の時代も含め、西欧文化の受容と外来語、という観点からみると次のようにまとめられるという〔Yonekawa-1996〕。

・江戸時代後半

鎖国政策によりオランダとのみ貿易をしていたため、ヨーロッパの文物をオランダ語で取り入れた。衣食語彙や器具名、医学、植物学（本草学）、天文学、暦学、地理学などの用語に主にみられる。

・幕末から明治10年代（1855～1885年頃）

鎖国が解かれると西欧の文化が大量に移入された。特に科学・社会関係の語は、中国の漢籍の知識を持った学者によって漢語に翻訳されて移植されたが、物の名はそのまま取り入れられ外来語の増加につながっていった。また、1872年から中学で英語教育が始まった。この時期の外来語は英語よりもオランダ語の方が優勢であった。

・明治20年代から第一次大戦（1885～1914年頃）

この時期は、中学校の増加や英語教育の普及、外来スポーツの普及などが外来語の一層の増加に作用した。オランダ語から英語に外来語の交替も多くみられた。

・第一次大戦から関東大震災（1914～1923年頃）

この時期は好況と工業化、教育の普及が背景にある。労働運動用語をロシア語、ドイツ語から、また美術用語をフランス語から主に取り入れた。中等・高等教育の普及・拡大が文化の大衆化・インテリ層の拡大につながり、活字を通じて外来語が広く大衆に入っていた。

・関東大震災から昭和10年頃（1914～1935年頃）

ヨーロッパから受け入れた文化・経済・社会システムが震災により破壊され、復興に際してアメリカ文明を手本としたため、英語からの外来語が急増した。

この後、第二次大戦への参戦とともに政府によって敵性語使用が禁止され、外来語は一時的に漢語や和語に置き換えられた。しかし敗戦によって再びアメリカ文化を受容し、ふたたび外来語最盛期ともいえる時代に入っていく。

近代初期の西欧の文物の受容について『国語学研究事典』[Satok-1977]では次のように述べられている。

西欧の文物の日本化のためにとられた第一の方法は、西欧語を漢語をもって国語の中に移すことであった。（中略）そして、蘭学の受容によって生まれた漢語をそのまま取り入れたり、明治以後、新しく作ったり、または従来漢語に新しい意味を付与したりして、膨大な西欧の学術用語・文化用語が漢語を通して国語の中に定着するようになった。（中略）明治期はこのような漢語が盛んに作り出された時期であるが、大正期に入ると、変動が少なく、安定に向かったとみられる。[Satok-1977]

また、『東京語成立史の研究』[Hida-1992]では「訳語は、明治20年前後に定着し、表記の安定したものが多い。（中略）漢語は、明治期とくに前期において変動が大きかったようで、明治の末から大正にかけて安定してきたようである。」とされている。

特に医学・自然科学用語は、既に江戸時代からオランダ語文献などを通して受容が始まっていて、『日本翻訳語史の研究』[Sugimoto-1983]では「翻訳を通しての西欧科学の摂取には江戸と明治の境もなく、およそ明治二十年ごろまで、江戸の翻訳はつづいていくのである。」と述べている。

明治から大正にかけての訳語や外来語の消長を『国語語彙論』[Tanaka-1978]では次のように評価している。

このような（筆者注・漢語の形による訳語の成立）、先人の工夫と努力のおかげで、学術研究が日本語で進められ、西欧の文化が、ことばの壁にわずらわされることなく、一般に普及されていった。しかし、大正期以降、次第に、そうした熱意が薄れ、なまの外国語が、そのままとり入れられる傾向が強くなってきた。それは、一つには、外国語教育の普及と向上の結果であるが、明治期の西欧文明摂取のさいの真剣味と慎重さが稀薄になり、この時期に高まってきた、軽薄な西欧崇拜熱のせいでもある。（中略）もちろん、こうした訳語の中には、単にあきられてしまったものばかりでなく、翻訳が不適切だったものや、あるいは、新しい概念がつけ加わったり、概念が分化したために、使用にたえられなくなったものもある。〔Tanaka-1978〕

ここでは、上記のような西欧文化、特に学術用語の受容が漢語という形を通して行なわれた後、それらが学術分野にとどまらず、例えば一般の日本人が読む雑誌や小説などの「国語の中に定着」〔Satok-1977〕、あるいは消失していく様相を計量的に分析していきたいと考える。

1.2.b. 近代の語彙の特徴

前述のように、近代初期は様々な形で西欧の文物を受容している。ここではそのような受容の結果生まれた語を漢語を中心に、音訳した字音語や外来語なども広く取り上げて、以下に用例とその特徴をみていく。この項〔1.2.b〕の用例は、特にことわりのない場合は『明治のことば辞典』〔Sogo/Hida-1986〕から採集したものである。この辞典は、約1,300語の「明治時代の特徴的な文物を表していると思われる語」〔同〕を収録しているという。

・由来の多様さ

近代の西欧の文物の受容の際に、日本語の語彙はかなり膨張したと考えられる。それら

の新しい語彙はさまざまなところから、新しい文物を表わすために取り込まれてきた。このような由来の多様さもこの時期に増えた語彙の特徴の一つではないかと考えられる。陳力衛氏によれば、「新しい事物・概念に応じて造語された」「明治漢語」は、その由来によって「漢籍語、白話小説語、新造語、訳語など」に分類できるという〔Chen-1997〕〔注1.1.〕。

実際の用例をみると、その成り立ちはかなり多様であることがわかる。

中国の漢籍語に由来する語としては例えば『論語』から採った「義務」がある〔Kurishima-1991〕。

日本人による造語の例としては、西周の造語とされる「哲学」などがある〔Kurishima-1991〕。

訳語の方法には、主に「直訳と意識」があるとされている〔Nihongo-1988〕。直訳とは、例えば「manhole」を man=人、hole=穴、と考え「人穴」と訳す方法である。意識とは、例えば「enterprise」を「事業を企てる」と解釈し、「企業」と訳す方法である。この他に「珈琲」など漢字を用いた音訳の例もある。

また、中国の訳語を借用した例もあり「paradise」の訳語の「楽園」などがあげられる。このような借用にあたっては各種の英華辞典の影響も指摘されている〔Nihongo-1988〕。

この他、日本で使われていた古語を転用した例として仏教用語の「理事（原義は「本体と現象」）」がある。これは広義の漢籍語とみることできる。

似た意味の語を訳語にあてる例として「passport」の訳語の「旅券」がある。「旅券」はもともと「国内の通行手形」を示していた。また同じ転用でも語形を縮めた語もある。例えば「経済」は、もともとは世を治め人を救うという意味の「経世済民」を縮約した語である。

なかには、西欧の文物の理解が不十分だったためにおこった造語もある。「wine」の訳語として「ボルドー」が使われていた例がその一つである。フランスのワイン産地 Bordeaux を「ワイン」そのものの意味に誤解したことによる。

・表記・語形の多様さ

新しい文物はその定着までに表記や語形にゆれが生じ、多様な形がみられた。

「自動車／自働車」や「選挙／撰挙」は同じ語形で複数の表記がみられる語の例である。また逆に「運輸」と表記して「ウンユ／ウンシュ」と読むという、表記は一つでも語形が複数存在する語もある。呉音と漢音の交替も多くみられた [Hida-1992]。

そして、表記も語形も複数みられる例もある。「coffee」は「骨喜／架非／加非／珈琲」などと表記し、「コーヒー／コッヒー」などと読まれた。ほかに、漢語の表記に外来語の読みをあてたものもある。「piano」は「百音琴／洋琴」と表記し、「ピヤノ／ピアノ」と読まれた。また「肉叉／肉差／肉刺」のように、原語をもとにした読みと表記に基づく読みとが混在して「フォーク／ニクサ／ニクサシ／ニクサジ」などと読まれた語もあった。

外来語の場合も発音を日本式にするため「マルガリン／マーガリン」のような語形のゆれもみられた。

さらに単に表記や語形のゆれの範囲にとどまらず、用字の順序が逆になる例もこの時期に多くみられた [注1.2.]。「印刷／刷印」「簿記／記簿」などの語である。

・新しい語形への交替

新しい文物を表す語は、定着までにいろいろな語形に交替することがあった。

表記の交替の例では、たとえば「連想」は古くは「聯想」と書かれることが多かった。同じ音の漢字との交替である。

また、用字の一部を差し替えた語として「洋習」から「洋風」にした例もある。

語種の交替では、当初は漢語や和語の形で受容されたが、後に外来語に交替した語もある。「自鳴琴（ジメイキン）」から「オルゴール」へ、「赤茄（アカナス）」から「トマト」へ、という場合である。逆に「ボード」から「黒板」へと、外来語から漢語に交替して定着した語もある。また、同じ外来語でも「ポオトル（boter）」から「バター（butter）」へと、オランダ語から英語に交替した例もある。「打毬」と表記して「ベースボール」と読まれていたスポーツは漢語に交替し「野球」となった。「便乗（ビンノリ）」から字音による「便乗（ビンジョウ）」に交替した例は、和製漢語の典型であろう。

他に、「活動写真」が縮約して「活動」になり、さらに「映画」に交替する、という段階を経たものもある。「活動写真」は「cinematoscope」の訳語であったが、後に「vistacope」の訳語となった。一方「映画」はもとは「写真」「幻燈」の意味で使用され

ていたという [Hirota-1969]。

・意味変化

新しい文物に語形をあてて日本語になじむようにと凶るうちに、定着がすすみ、原語から離れて新しい意味が付加されたり、全く新しい意味に交替してしまったり、といった意味変化もみられた。「流通」は「水や空気の流れ通ること」が原義であるが、「百般のことに通じること」「貨幣の流通」といった意味が付加されていった。「夜学」は「lucubration (夜に学問すること)」の訳語であったが、のちに「night school (夜学校)」の意味へと転じた。外来語の場合の例もある。「マドロス」はオランダ語「matroos」から水夫の意味であるが、「まどろい」からの類推で「気のきかない者」の意で使われたこともあるという。専門用語が一般化して意味が拡大する例もある。「未知数 (ミチスウ / ビチスウ)」は数学用語で「unknown number」の意味であったが、比喩的に「将来の予想がつかない意」で使用されている。

意味の交替と語形の交替が複合的に起こる例もある。「combination」の訳語は「抱合」であったが、「化合」と交替した。「抱合」は「抱き合うこと」という意味で残存している。「megaphone」の訳語は「補聴器」であったが、「メガホン・拡声器」と交替した。「補聴器」は「難聴を補う機器」として今は使用されている。

さらに、訳語に新しい意味が付与されて、それが契機となって新しい語形を生み出す例もある。「高襟・ハイカラ (high collar)」は襟だけでなく「洋装」全般を意味したが、これがさらに「西洋風にしゃれること」を意味するようになり、「ハイカル」という動詞形を生み出した。また、反意語「蛮襟 / 蛮カラ (バンカラ)」も作られて、現在では「ハイカラ」同様に定着している。

これまで述べたような変化の特徴が最も複合的にみられる例の一つが「station」であろう。日本に鉄道が開通して「station」も作られた。これは「停車場」と表記され、「テイシャバ / テイシャジョウ / ステーション」などと呼ばれた。「所 (しょ)」からの類推で「ステンショ」と呼ばれたこともある。一方、古代に用いられた「駅 (エキ)」は既に「旅人が泊まる所」として「宿 (シュク)」にとってかわられていたが、この「station」の訳語に転用され、「停車場」と交替して現在に至っている [Sogo/Hida-1986]

[Nihongo-1988]。

明治期の西欧の文物受容に伴う語の発生には、このように

- ・由来の多様さ
- ・表記・語形の多様さ
- ・新しい語形への交替
- ・意味変化

などの現象が、長い年月をかけてではなく、明治の一時期に集中しておこっている点に特徴がみられる。この論考では、明治初期に人文・社会・自然科学といった学術分野で、漢語の形で導入された学術用語の、現在に至る過程を各種の資料で追跡調査することで、これらの特徴のうち、特に表記・語形の多様さや、用語の定着・一般化または交替に伴う語の消失といった観点を中心に調査を行ない、日本語の史的变化の一端をとらえようと試みた。

1.3. 語彙の史的变化の諸説

前節にみられるように、これまでの先行研究では明治初期の西欧の文物受容とことばに関するものは、多くは幕末・明治・大正という特定の時代における、特定の語の翻訳・造語の歴史、あるいは語の交替の歴史、外来語の歴史として研究されており、語誌研究としての性格が強い。

一方、理論として、この論考が扱う主題—大きくとらえれば「語彙の史的变化」とでもいう問題が、従来の国語学・言語学でどのように位置づけられているかを先行研究に求めた。

「語彙の変遷」[Maeda-1977]では、「現段階においては、語彙の変遷を述べてゆく方法は確立して」おらず、これまでの語形変化・語義変化の「個別の語史研究を積み重ねれば語彙の変遷が明らかになるとはいいがたい。」とし、研究視点の一つとして「語彙の量的変化」をあげている。また、その場合の第一の問題点として方法と目的—「これまでの

研究は個々の作品やあるジャンルの作品を考えるためのものという傾向が強く、国語史の中で語彙の変遷を考える方向にはかならずしも向かっていない」こと、統計的な処理の方法や語の単位の問題などをあげ、第二の問題点としてこれまでの多くの研究では「調査の範囲が限定されすぎて」いることが多く、全体的な見直しをつける研究が必要、としている。

『国語語彙論』〔Tanaka-1978〕では、「語彙の変化」を「地域的変容」と「史的変遷」ととらえ、特に後者の量的変化の研究事例として、国立国語研究所が行なった「浜萩」の荘内語彙の残存率の調査〔Kokken-1953〕、大野晋氏の「基本古語」残存についての研究〔Ono-1958〕、林大氏・宮島達夫氏の現代の雑誌における高頻度語が時代的にどこまでさかのぼれるかという研究〔Kokken-1955〕〔Miyajima-1967〕などをあげている。また、語彙変化の要因については、語彙を構成している単語の語形や語義が変化する内的要因と、外来文化との接触による借用語の流入などの外的要因をあげている。内的変化についてはその要因別に用例とともに以下のように分類されている。

- ・ 語形の変化

- ・ 音のみの変化

- 音の脱落・音の交替・音の融合・音質の変化・音の転倒

- ・ 意味・文法と関連のある変化

- 意味の混同・語源意識から・文法変化に伴って・同音衝突によって

- ・ 語義の変化

- ・ 意味の幅の変化

- 意味の拡大・意味の縮小・意味の分化

- ・ 意味の価値の変化

- 意味の下落・意味の向上

- ・ 意味の転換

- 比喩的転換・対義的転換・連鎖的転換

（〔Tanaka-1978〕より）

この分類にはさらに〔Tanaka-1981〕で、同著者により「意味のつながりのない同一語形」という項目が補足されている。また、外的要因については、〔Tanaka-1978〕では「

交通の発達に伴う文物の交流」「外国語との接触」「人々の集団的な移動」「人口の都市集中」などがあげられている。

しかし、国語学の分野では「語彙の変化」「語彙の史的変遷」をひとつの論題として立項させて論じている先行研究は少ない。言語学の学説を用いて日本語の用例を中心に論じた研究でも、多くは「言語変化」という論題で「音韻変化」「意味変化」「文法的変化」などが用例と共に論じられており、計量的な視点の研究もあまり多いとはいえない。以下の論考は、日本語を主な用例として言語変化について述べたものである。

『現代言語学辞典』[Seibido-1988]では「lexical change (語彙変化)」は「言語変化の一つ。音韻変化 (PHONOLOGICAL CHANGE)・文法変化 (GRAMMATICAL CHANGE)・意味変化 (SEMANTIC CHANGE) に対する。」とあり、新語創造・古語・廃語などが「語彙変化の主な種類」とされているが、特定の論文・学説は紹介されていない。

「言語変化の要因と過程」[Shibata-1958]でも言語変化の要因として「言語内の要因」「言語外の要因」の二つがあげられている。特に前者については「注意すべきものは合理の力である。」としてサピア (Sapir) の「drift 理論」を引用している。また、前述の「浜萩」の荘内語彙の残存率の調査 [Kokken-1953] とスワディッシュ (Swadesh) の「言語年代学」の比較を行なっている。

「言語は変化する」[Satok-1975]でも「言語変化」の要因には内的要因・外的要因があって、「変化を促す力」と「変化を防ぐ力」の均衡が破られると言語変化が発生しているとしているが、語彙の量的な研究は示されていない。

「数理的にみた言語の変化」[Asai-1980]では、言語変化の計量的研究について「ことばの変化の数量化がなかなかうまくいかない」と述べられている。言語間の類似性などいくつかの研究手法が示されているが、語彙の分野ではスワディッシュ (Swadesh) の「言語年代学」の手法が紹介されている。

『日本語はなぜ変化するか』[Komatsu-1999]では日本語の変化の要因として「社会環境への適応」「運用効率」などがあげられ、主に音韻変化、文法的変化の用例が示されている。

言語学の分野では、このような語彙の史的変遷と計量的分析という論題は、文献によっ

て位置づけがやや異なっている。

Paul の『Prinzipien der Sprachgeschichte』 [Paul-1880] では、言語の史的変遷が音韻の変遷、語義の変遷、文法的な変化、表現の節約や混用、方言などの面から豊富な用例とともに多角的に検討されているが、「語彙」という独立した項目はない。

Sapir の『Language』 [Sapir-1921] では、「個人的変異と方言的変異」に対して「時間的変異、すなわち偏流」（安藤貞雄氏の訳による）をあげて、英語やドイツ語の用例を中心に格や音韻についての史的变化を説明している。また、文化の接触による言語の変化についても主に音韻や形態などの面から述べられている。

Bloomfield の『Language』 [Bloomfield-1933] では、音韻論と意味論を対比し、意味論は「文法 (grammar) と辞彙 (lexicon)」（三宅鴻氏・日野資純氏の訳による）から成ると位置づけている。また「意味的变化における動揺 (筆者注・fluctuation) は、文法的変換 <<grammatical displacements>> でなく辞彙的変換となって結果し、その故に、大体は言語学者に把握されない。」 [Bloomfield-1933] としている。「文化的借用」については多くの用例が示されているが、音韻と文法についての分析が主体となっている。最後に「文化的借用から、一つの国民が他の国民に何を教えたかがわかる。」と、国による借用語彙の分野を「フランスからの最近の借用は主として婦人服、化粧品、贅沢品」、ドイツ語からは「粗末な方の食料品」と「いくつかの思想的・科学的の用語」などとあげているが、その史的变化や定着の様相については言及されていない。

Weinreich の『Language in contact』 [Weinreich-1953] では、より社会言語学的な立場から二国語併用における「音声干渉 (phonetic interference)」「文法上の干渉 (grammatical interference)」「語詞の干渉 (lexical interference)」が説明されている。「語詞の干渉」は、単純語では「語転移」と「意味拡張」、複合語や句では「転移」「再生産 (あるいは借入翻訳)」「要素の転移と再生産」といった現象が起こると説明されている。また、これらの干渉が起こることによる既存の語彙への影響も考察されている。また、このような変化の内的要因の主なものは「使用度の低さ (low frequency)」と「同音異義語 (homonymy) 間の衝突を解消する」こと、「情緒語が表現力を失う」ことなどによるとされ、例えば第三の理由では婉曲表現のために新しい語を借用する場合などをあげている。

Weinreich・Labov・Herzog の論文「Empirical Foundations for a Theory of

Language Change」[Weinreich/Labov/Herzog-1968]でも、音韻と文法構造が議論の中心となっている。また、方言地理学や諸言語の接触といった社会言語学的な視点もあるが、それらが語彙全体、あるいは特定分野の語彙の史的变化に与える問題については論じられていない。

Bynon の『Historical Linguistics』[Bynon-1977]では、前半で Paul を始めとする少壮文法学派の理論、構造言語学理論、生成文法理論を紹介し、後半は「Language Contact」と題して、方言地理学や Labov の社会言語学的研究、諸言語の接触の問題がとりあげられている。このうち、特に接触の問題の中で「lexical borrowing」という一節を設けて、ヨーロッパの言語間の借用語 (loan-words) や借用翻訳 (loan translations)、借用に際しての意味の拡大 (semantic extension)、語彙的借用の構造的効果 (Structural effects of lexical borrowing) について解説している。概ねが用例に基づいたもので、「構造的効果」の一節は英語の例をあげて「English now possesses side by side two totally different derivational systems, one inherited and largely confined to the lexical resources of Germanic origin, the other the result of borrowing from Romance and largely confined to the Romance-derived sector of the lexicon.」[Bynon-1977]という実例分析の結論で終わっている。

このように、言語の史的变化に関するものは音韻と文法を扱ったものが多く、語彙の変化は、社会言語学の中の「諸言語の接触」や「借用」という分野で扱われることが多い。しかし、最近の研究の中には「language change」を標題にかかげるものも出てきた。

Aitchison の『Language change: progress or decay? (Second edition)』[Aitchison-1991]はその表題通り「言語変化」についての著作であるが、上述の文献にあるような実例の分析だけでなく、理論的な分析を加えている点、事例として Labov 等の調査をあげているが、従来の社会言語学的な立場からの変化の外的要因の分析だけでなく、内的要因の分析も行なっている点がそれまでの文献と異なっている。本書では「言語変化の起源と伝播は、最近まで大多数の言語学者にとっては、はっきりと解明されていなかった。」と、言語変化という問題の扱い方の難しさを述べている。音韻変化と統語上の変化が分析の中心であるが、音韻変化の事例から「ある変化が(中略)特に重要な一群の語集団の中に足場を得ると、その変化は語彙全体に移動し始める」と語彙拡散 (lexical

diffusion) についてわずかに言及している。

上述の Labov の最近の著作には『Principles of Linguistic Change: Volume 1: Internal Factors』[Labov-1994]がある[注1.3.]。この著作は音韻面での言語変化と社会言語学的な調査の結果について論じており、音韻変化が語彙拡散に与える影響についても言及しているが、主に地域的変容が扱われていて史的变化の視点からではない。

上記のような言語変化に論点をしぼった研究も見られるが、対象の主体はやはり音韻と文法である。

Marfberg

言語変化を計量的な視点から論じたものに『Zur linguistischen Synergetik: Struktur und Dynamik der Lexik』[Koehler-1986]がある。この著書では「Synergetic Linguistics」と名付けられた、言語の自己調節能力や言語変化を計量的にとらえる試みが理論としてまとめられている。史的な研究ではないが、扱われている分野も音韻、語彙、語義などにわたっている。

言語変化についての主な先行研究を参照したが、「語彙の史的变化と計量的分析」という先行研究は非常に少ない。これは、用例収集の労力が特定の語誌に比べ格段に大きいことや、音韻・文法と違って語彙の調査範囲が漠然としがちで全体をくまなく網羅しにくい研究対象であることなどによるかと思われる。「語彙の史的变化」という立場で事例と理論の両面から総括されているのは『国語語彙論』[Tanaka-1978]、「言語変化の計量化」という立場から事例と公式がまとめられているのは『Zur linguistischen Synergetik』[Koehler-1986]であった。筆者の論考では、この二つの著書を特に参考にしながら、近代から現代にかけての学術用語の受容と消長の変遷を計量的に分析しようとする。

1.4. 研究資料と分析方法

この論考では、近代初期に西欧の新しい概念を漢語の形で導入した学術用語を中心に、その時代から現代までの変化、特に語の一般化や使用の盛衰を様々な辞書や語彙表を複合

的に調査することで全体的な傾向を分析しようと考えた。

具体的に扱った資料と分析手法をここに列挙する。各資料と分析手法の詳細は次章以下の該当部分を参照されたい。

「学術漢語」を採集した主な資料は、1881年に出版された『哲学字彙』[Inouet-1881]という学術用語集で、この他『哲学字彙』の二版・三版、西周の訳語などを参考にした。

「学術漢語」の使用の有無を調査した主な資料は、

- ・幕末から現代までの各種の外国語辞書
- ・森嶋外・夏目漱石・志賀直哉・芥川龍之介・太宰治などの小説
- ・近代から現代にかけての新聞・雑誌・テレビといった各種メディアの語彙表

などである。

資料相互の年代的な関係が一覧できるよう、大まかに[図1.1 主な資料の年代]にまとめた。

また、計量的分析手法については、基本的な回帰分析（線形回帰、曲線回帰、単回帰、重回帰）や2 x 2分割表による χ^2 （カイ二乗）検定などのほかに、「探索的データ解析」という比較的新しい統計手法や、回帰分析の一種でPiotrowskiカーブと呼ばれる曲線への回帰、物理学のシナジェティックス理論から近年着想されたシナジェティック（協同的）言語学の理論などを、実験的に使用した。

次章以下では、下記のように分析を進めていく。

- ・第2章 『哲学字彙』の学術漢語について

「学術漢語」の資料として用いた『哲学字彙』や参考資料の西周の訳語の性格について検討する。

- ・第3章 外国語辞書にみられる学術漢語について

先行研究を参考に、幕末から現代まで各種の外国語辞書にみられる「学術漢語」を検討する。

- ・第4章 各種語彙表の採録単語との対照

近代から現代までの新聞・雑誌・テレビといったメディアの語彙表や小説の語彙に使用されている「学術漢語」を検討する。

・第5章 各種語彙表の採録語彙との比較

各種語彙表に採録された「学術漢語」について、第4章で検討した対照結果を複合的に解析することによってさらに分析を行なう。

・第6章 シナジェティック（協同的）言語学の理論による学術漢語の分析

近年開発されたシナジェティック（協同的）言語学の理論を「学術漢語」に実験的に適用して分析を試みる。

・第7章 各種基本語彙表における学術漢語の採用について

現代の語彙として完全に定着し、基本語彙となった「学術漢語」について考察する。

・第8章 結論

また、この論文と関連のある、筆者の学会発表・学会誌掲載論文は以下の通りである。関連のある章をあわせて示した。特に、シナジェティック（協同的）言語学の理論は、日本ではまだあまり知られておらず、日本語をデータとした解析は、以下の論文が初めてのものと思われる。

・「Study of word alternation in mainly the Meiji Era」

（学会発表）『Trierer Kolloquium on Quantitative Linguistics 1996』

1996年 於Trier University（ドイツ）（第1章の一部）

・「明治期漢訳語の流れ——哲学字彙と各種語彙表との比較調査」

（学会発表）『近代語研究会 第142回研究発表会』 1997年2月 於鶴見大学

（第4章の一部）

・「New Kango (Chinese-character words) of the early Meiji era: their survival and disappearance from Meiji to the present」

（論文集掲載論文）叢書『Quantitative Linguistics (Glottmetrika 18)』

（出版社 WVT Wissenschaftlicher Verlag Trier ドイツ）（印刷中）

（第5章の一部）

- ・「Analysis of Japanese vocabulary by the theory of Synergetic Linguistics」
(学会発表)『QUALICO-97 (Third International Conference on Quantitative Linguistics)』 1997年 於Helsinki University (フィンランド) (第6章の一部)
- ・「Analysis of Japanese vocabulary by the theory of Synergetic Linguistics」
(学会誌掲載論文)『Journal of Quantitative Linguistics 6-3』 1999年
(第6章の一部) (上記の学会発表に加筆したもの)

章末注

- [注1.1.] 「白話小説」とは「中国で、口語体によって書かれた小説」 [Kajiwara-1998] をさす。今回の調査では、日本における白話小説語自体の受容についての研究文献はあったが、白話小説語を直接に西欧語の翻訳語として使用した用例はみられなかった。ただし間接的な影響を受けた可能性も否定はできない。
- [注1.2.] 字順の交替に関する研究は [Hida-1973] [Matsui-1983] [Satot-1980] [Suzuki-1986] [Tajima-1998] などがある。
- [注1.3.] インターネット上の書店 (<http://www.amazon.com>) の目録では、同著者で『Volume2: External Factors』が2000年出版予定とあった。筆者未見。

参照文献

- [Aitchison-1991] Aitchison, J. 『Language change: progress or decay? (Second edition)』 1991年 Cambridge University Press (Cambridge) ?
(=ジーン・エイチソン 著・若月剛 訳 『言語変化 進歩か、それとも後退か』 1994年 リーベル出版)

- [Asai-1980] 浅井亨 「数理的にみた言語の数量化」 (『講座言語 第2巻 言語の変化』 1980年 大修館書店 pp.261-296 所収)
- [Bloomfield-1933] Bloomfield, L. 『Language』 1933年 Holt (New York)
(=L. ブルームフィールド 著・三宅鴻・日野資純 訳 『言語(新装版)』 1971年 大修館書店)
- [Bynon-1977] Bynon, T. 『Historical Linguistics』 1977年 Cambridge University Press (Cambridge)
- [Chen-1997] 陳力衛 「近代の辞書で調べる—漢語を中心に」 (『日本語学 1997年11月号』 1997年 明治書院 pp.13-21 所収)
- [Hida-1973] 飛田良文 「現代漢語の源流」 (『言語生活259号』 1973年 筑摩書房 pp.70-79 所収)
- [Hida-1992] 飛田良文 『東京語成立史の研究』 1992年 東京堂出版
- [Hirota-1969] 広田栄太郎 『近代訳語考』 1969年 東京堂出版
- [Inouet-1881] 井上哲次郎 『哲学字彙』(初版) 1980年 名著普及会 (1881年 東京大学三学部刊の復刻)
- [Kajiwara-1998] 梶原滉太郎 「近代漢語の変遷」 (『日本語学 1998年5月号』 1998年 明治書院 pp.22-28 所収)
- [Koehler-1986] Koehler, R. 『Zur linguistischen Synergetik: Struktur und Dynamik der Lexik』 (Quantitative Linguistics Vol.31) 1986年 Studienverlag Dr. N. Brockmeyer (Bochum)
- [Kokken-1953] 国立国語研究所 『地域社会の言語生活』 1953年 秀英出版
- [Kokken-1955] 国立国語研究所 「総合雑誌の語彙調査」 (『国立国語研究所年報6』 1955年 pp.23-59 所収)
- [Komatsu-1999] 小松秀雄 『日本語はなぜ変化するか』 1999年 笠間書院
- [Kurishima-1991] 栗島紀子 「西周の訳語」 (森岡健二 編著 『改訂 近代語の成立語彙編』 1991年 明治書院 pp.138-161 所収、『東京女子大学日本文学 第27号』 1966年 初出)
- [Labov-1994] Labov, W. 『Principles of Linguistic Change: Volume 1: Internal Factors』 1994年 Blackwell (Oxford)
- [Maeda-1977] 前田富祺 「語彙の変遷」 (『岩波講座 日本語 第9巻 語彙と意味』 1977

- 年 岩波書店 pp.133-172 所収)
- [Matsui-1983] 松井利彦 「近代日本漢語と漢訳書の漢語」 (『広島女子大学文学部紀要第18号』 1983年 pp.35-51 所収)
- [Miyajima-1967] 宮島達夫 「現代語いの形成」 (国立国語研究所 『国立国語研究所論集3 ことばの研究』 1967年 秀英出版 pp.1-50 所収)
- [Nihongo-1988] 金田一春彦・林大・柴田武 編 『日本語百科大事典』 1988年 大修館書店
- [Ono-1958] 大野晋 「日本語の古さ」 (『講座 現代国語学3 ことばの変化』 1958年 筑摩書房 pp.83-104 所収)
- [Paul-1880] Paul, H. 『Prinzipien der Sprachgeschichte』 1880年 (Tuebingen)
(=ヘルマン・パウル 著・福本喜之助 訳 『新装版 言語史原理』 1993年 講談社原書第5版・第6版の邦訳)
- [Sapir-1921] Sapir, E. 『Language. An Introduction to the Study of Speech』
1921年 Harcourt Brace & Company (Florida)
(=エドワード・サピア 著・泉井久之助 訳 『言語 ことばの研究』 1957年 紀伊國屋書店)
(=エドワード・サピア 著・安藤貞雄 訳 『言語』 1998年 岩波書店)
- [Satok-1975] 佐藤喜代治 「言語は変化する」 (『新・日本語講座4 日本語の歴史』 1975年 汐文社 pp.1-24 所収)
- [Satok-1977] 佐藤喜代治 編 『国語学研究事典』 1977年 明治書院
- [Satot-1980] 佐藤享 『近世語彙の歴史的研究』 1980年 桜楓社
- [Seibido-1988] 田中春美 他編 『現代言語学辞典』 1988年 成美堂
- [Shibata-1958] 柴田武 「言語変化の要因と過程」 (『講座 現代国語学3 ことばの変化』 1958年 筑摩書房 pp.209-232 所収)
- [Sogo/Hida-1986] 惣郷正明・飛田良文 編 『明治のことば辞典』 1986年 東京堂出版
- [Sugimoto-1983] 杉本つとむ 『日本翻訳語史の研究』 1983年 八坂書房
- [Suzuki-1986] 鈴木丹士郎 「二字漢語の字順についての問題」 (『国語論究第1集・語彙の研究』 1986年 明治書院 pp.278-306 所収)
- [Tajima-1998] 田島優 『近代漢字表記語の研究』 1998年 和泉書院
- [Tanaka-1978] 田中章夫 『国語語彙論』 (再版) 1978年 明治書院

- [Tanaka-1981] 田中章夫 「語彙－語の変化」 (『言語事項事典－国語資料図解－』
1981年 全教図 pp.88-89 所収)
- [Tanaka-1999] 田中章夫 『日本語の位相と位相差』 1999年 明治書院
- [Weinreich-1953] Weinreich, U. 『Language in contact』 1953年 (New York)
(=U. ワインライヒ 著・神鳥武彦 訳 『言語間の接触』 1976年 岩波書店)
- [Weinreich/Labov/Herzog-1968] Weinreich, U.・Labov, W.・Herzog, M. 『Empirical
Foundations for a Theory of Language Change』 (Lehmann, W.P.・Malkiel, Y. 編
『Directions for Historical Linguistics: A Symposium』 1968年 University of
Texas Press pp.95-188 所収)
(=U. ワインライク・W. ラボヴ・M. ハーゾグ 著・山口秀夫 編訳 『言語史要理』
1982年 大修館書店)
- [Yonekawa-1996] 米川明彦 「外国文化の移入と外来語」 (『国文学 解釈と教材の研究 第41巻11号』 1996年 学燈社 pp.87-91 所収)

第2章 『哲学字彙』の学術漢語について

第2章 『哲学字彙』の学術漢語について

2.1. 西周の語彙

明治初期の西欧の専門用語、特に学術用語といえば、西周の造語である「概念」や「哲学」という語が知られている。西周は「哲学者、啓蒙思想家」〔Odagiri-1977〕であるが言語に関する論文もあり、また西周の著作は「訳語・新語の宝庫で、西自身の発明になり後に一般に受け入れられたものが多い。」〔Satok-1977〕という。

そこでまず西周の著作や翻訳から、片仮名もしくはアルファベットで原語のルビがふら
れている語を抽出した。

した→する

西周の公刊された書物としての著作や翻訳には次のものがあり、以下の所蔵本を調査した。このうち『心理學』という翻訳書は、原書の最初の部分だけを翻訳したのが和装本〔Nishi-1875〕で、その部分の訳文に全く手を加えずそのまま含めた形で原書全体を翻訳したものが洋装本〔Nishi-1878〕である。

- ・西周訳 『畢洒林氏説 万国公法』 1868年 官版〔Nishi-1960〕
- ・西周 『百一新論』 1874年 山本覚馬刊（国会図書館蔵）〔Nishi-1874a〕
- ・西周 『致知啓蒙（上・下）』 1874年 瑞穂屋卯三郎刊（和装 学習院大学蔵）〔Nishi-1874b〕
- ・約瑟奚般(ヘブン)著・西周訳 『心理學（上・中・下）』 1875-1876年 文部省版（和装 学習院大学蔵）〔Nishi-1875〕
- ・約翰・士低瓦的・弥留(ミル)著・西周訳 『利學（上・下）』 1877年 島村利助刊（和装 東京大学蔵）〔Nishi-1877〕
- ・奚般著・西周訳 『心理學（上・下）』 1878-1879年 文部省版（洋装 国立国会図書館蔵）〔Nishi-1878〕

この他『明六雑誌』などに多数の寄稿があり、これについては次にあげる『明六雑誌』

の復刻版と2種の全集で調査した。また公刊されていない文章は書簡以外のものを全集で調査した。『西周全集』は最初1945年に第1巻が刊行されたが、戦争のために中断した。その後、全集は出版社をかえて「第1巻」から新たに刊行されたので、「旧第1巻」と後の「第1巻」は収録内容が一部異なっている。また「第4巻」に収録されている『百学連環』は、正確には西の講義のためのメモ『百学連環 覚書』と門人永見裕の筆録本2種であって、西周自身が記述したまとまった文章はない。[注2.1.]

- ・大久保利謙監修 『復刻版明六雑誌（第1巻・第2巻・第3巻）』 1976年 立体社
[Meiroku-1976]
- ・大久保利謙編 『西周全集（旧第1巻）』 1945年 日本評論社 [Nishi-1945]
- ・大久保利謙編 『西周全集（第1巻・第2巻・第3巻）』 1960年 宗高書房
[Nishi-1960]
- ・大久保利謙編 『西周全集（第4巻）』 1981年 宗高書房 [Nishi-1981]

これらの資料から調査した専門用語の訳語を公刊・未公刊の2種に分けて、[表2.1. 公刊された著書・雑誌論文における西周の訳語]と[表2.2. 未公刊文書における西周の訳語]の語彙表を作成した。「未公刊」語彙には「公刊」語彙以外のものだけをあげてある。2種に分けたのは、「未公刊」語彙は西周の著述時期が推定でしか特定できないためである。

調査の結果、「公刊」された訳語は延べ 538語、「未公刊」の訳語は重複を除き 1,826語収集できた。これらの訳語の中には、現代日本において抽象概念を表現するのに不可欠であるような、漢語の形での訳語・造語が含まれる一方、例えば「通ヘル名 (common name とルビ)」「専ラニスル名 (proper name とルビ)」[Nishi-1874]といった句の形での訳もかなりみられる。

この研究では、明治初期に専門用語・学術用語として西欧の文物を導入した語が、その後いかに一般に定着していくかという様相をみることを目的としている。そのような場合、比較の基本となる語は、(1) 出版年度などで翻訳の時期をある程度特定できるほうが望ましく、また(2) 語彙表や辞書との比較において、説明とも思える句の形での「表現」よりは「単語」での訳のほうが統計的処理などを行いやすい。

そのように考えると、西周の訳語は上記の2つの条件において、この研究に適した性格をもっているとはいいがたい。例えば、西周の『百学連環』は日本で初めてのエンサイクロペディアとして高い価値をもっていると思われるが、上記のように西の講義のための覚書と門人永見裕の筆録本しか残されておらず、その講義時期も推定でしかわからない。また、西周が句の形での訳を試みたのは、和語を使うことや多少とも説明的であればわかりやすいだろうという配慮があったかとも考えられる。このような訳語については、各種の辞書との比較や統計的処理よりもまた別な方法で分析をすべきであろう。

このような事情から、多くの学術用語を造語した西周の語彙を参考にしつつ、同じく明治初期の文献でこの研究の目的により合致した資料として、井上哲次郎の『哲学字彙』[Inouet-1881]を調査対象として選定した。

2.2. 『哲学字彙』と井上哲次郎

『哲学字彙』[Inouet-1881]は井上哲次郎編、1881年東京大学三学部印行の用語集である。その緒言から William Fleming の『The Vocabulary of Philosophy, Mental, Moral, and Metaphysical, with Quotations and References; For the Use of Students』を底本とし、和田垣謙三・国府寺新作・有賀長雄の援助を得て訳語を決定したことがわかる。このため、Fleming の原題に従って「哲学」と題されているが、井上が実際に Fleming のどの版を参照したかは正確には確定できていない [Hida-1980]。また、単なる翻訳ではなく、井上哲次郎が法律、経済、物理などの用語を独自に半数以上補っていると推定され [Hida-1980]、人文・社会・自然科学と広い範囲にわたる学術用語集となっている。従来の研究でも、「幕末から明治初期にかけて現れた抽象語を集大成したもの」「本書から当時の一般辞書に採用されたものも少なくない」[Satok-1977]と評価されている。

この『哲学字彙』には再版、三版がある。初版が売り切れたあと、井上と有賀が初版の訂正と若干の増補を行なったが、井上がドイツ留学したため、有賀長雄が1884年に東洋館から再版を出版した [Hida-1980]。書名は『改正増補 哲学字彙』となっている（以下「二版」）。三版は、井上の帰国後、元良勇次郎・中島力造との共著で、1912年に『英独

仏和『哲学字彙』という書名で丸善から出版された（以下「三版」）。見出し語は英独仏の三か国語とラテン語・ギリシャ語にわたり、初版の見出し語やその訳語を含みながらも数倍の分量の辞書になっていて「三版というより新版に近い」[Satok-1977]という印象をうける。また、この三版は全く同じ体裁・内容でさらに1921年に「三版の再版」が出版されている[注2.2.]。初版が比較的早く売り切れて二版を出していること、三版がさらに版を重ねたことから、この辞書が当時の学术界において非常に好評であったこと、また各分野に大きな影響を与えた可能性があることがうかがえる。

各版の見出し語数は以下の通りである[Hida-1980]。

- ・ 初版 1,951語（大見出し 1,562語、小見出し 390語）
- ・ 二版 2,723語（大見出し 2,197語、小見出し 526語）
- ・ 三版 10,419語（大見出し 6,548語、小見出し 2,192語、
補遺大見出し 1,651語、補遺小見出し 28語）

『哲学字彙』（初版）の辞書としての体裁の主な特徴は、西欧語（主に英語）のABC順であること、大見出しとその下に複合語の小見出しがあること、見出し語の綴りの最初の文字は大文字で表記されていること、また、訳語は主に漢語や漢字を用いて音訳した字音語が1語以上あげられており、その訳語は時に他の見出し語の箇所にもみられる（重複がある）こと、訳語に読みがつけられていないこと、意味記述や品詞の記述がないこと、などである。また、訳語の選定根拠を漢文注記で示した語も一部にある。さらに一部の語には、以下の11種の学術分野の注記が付けられている。

- | | | |
|-------|-------|-------|
| ・ 倫理学 | ・ 宗教 | ・ 数学 |
| ・ 論法 | ・ 政理学 | ・ 理財学 |
| ・ 生物学 | ・ 心理学 | ・ 法理学 |
| ・ 物理学 | ・ 世態学 | |

[図2.3. 『哲学字彙』の頁の一例]を参考のために示す（原寸大）。出典は復刻版による。

2.3. 漢語表の作成手順

『哲学字彙』（初版）の訳語は〔Hida-1979〕の索引の部によれば 2,812語ある（異なる読みの重複見出しを含む）。まずこれらの語に五十音順に「T0001」から「T2812」まで通し番号をつけ、その上で以下の条件によって 1,847語の漢語を抽出した。

- ・大見出しのみを対象とする。
- ・和語・音訳語を除く。
- ・接尾語をとり除く。
（-的、-性、-学、-論、-力、-教、-党、-法、-病、-官、-語、-観、-心、-主義、等）
- ・「自然之理」などそのままでは辞書や語彙表の見出し語になりにくいものを除く。
- ・重複を整理する。

和語・漢語の区別は『新潮国語辞典』〔Shincho-1982〕によった。また、多くの辞書には接頭語がついた語形の見出し語があげられているため、後の調査を考慮して、「大-、小-、中-、不-」といった接頭語はそのままにした。また一部に「形而上」「円満幸福」など接尾語をとり除いたり語を分断した場合、西欧文物の受容という観点からあまり意味をなさなくなってしまう語があり、それはそのまま残した。

このようにして得られた 1,847語（以下『哲学字彙』の「学術漢語」と呼ぶ）が、次章以降の調査対象である。この語群にはほぼ五十音に「t0001」から「t1847」の通し番号を再度つけてある。この 1,847語と、重複のあった見出し語、原語の対照は〔表2.4. 『哲学字彙』の「学術漢語」一覧〕を参照されたい。

また、この作業の過程でいくつかの誤植と思われた点は〔表2.5. 『哲学字彙』および索引の誤植〕にまとめた。

さらに、中型の英和辞典『旺文社英和中辞典』〔Obunsha-1995〕（収録語数約10万語）に入っていない、一般にあまりみられない原語（主に英語）については〔表2.6. 『哲学字彙』の原語〕に英和辞典・英英辞典の語釈を一覧できるよう、引用した。派生語として語義が類推できるものも多いが、先の『旺文社英和中辞典』にない原語は、まず『研究社新

英和大辞典 第5版』[Shin'eiwa-1980]の語義を引用した。この『研究社新英和大辞典 第5版』にみられない語は、『The New Shorter Oxford English Dictionary』[Shorter-1993]を引用し、さらにこの辞典にみられないものは『The Oxford English Dictionary Second Edition』[Oed-1989]を引用した。それでもわずかではあるが、いくつかの語は語義不明、あるいは綴りの誤りと推測されたので、それらの語についてもこの[表2.6.]で触れておいた。

次章以下で記述する『哲学字彙』の「學術漢語」と辞書・語彙表との比較・対象にあたっては、原則として上記の「學術漢語」の語形を一部に含むものや異表記を広く認めることにした。また、多くの語彙表には意味分類を示すコードなどは付けられていないため、意味的な変遷についての詳細な考察は別の機会に行うこととし、今回は語形の調査を中心に行った。たとえば、「利益」を「りえき」と読むか「りやく」と読むか、「きりつ」を「規律」と書くか「紀律」と書くかなど、異表記や異なる読みについては『日本国語大辞典』[Nihon-1972]を典拠とした。また、『日本国語大辞典』に見出し語としてのせられていない「學術漢語」のうち『大漢和辞典 修訂第二版(第四刷)』[Morohashi-1996]にあるものは、参考のためにその語義を[表2.7.『日本国語大辞典』にない「學術漢語」]に引用した。また、『哲学字彙』や他の資料でどの原語にどの訳語があてられていたかという、原語と訳語の関係についても詳細な考察は別の機会にゆずった。これは、とりあげた「學術用語」の訳語としての変遷だけでなく、日本語として定着し、小説や雑誌など広く一般に用いられるようになる様を俯瞰的にとらえていくことに重きを置いたためである。

2.4.『哲学字彙』の語彙

2.4.a.版による訳語数の変動

上記で作成した「學術漢語表」を各種の辞書・語彙表と比較する前に、『哲学字彙』自体が版を重ねることで、訳語にどのような変化があったかを、次章以下の参考のために調査した。

上述の通り『哲学字彙』〔Inout-1881〕は1881年の初版発行のあと、1884年に『改正増補 哲学字彙』（二版）〔Inouet-1884〕、1912年に『英独仏和 哲学字彙』（三版）〔Inouet-1912〕が出版されている。二版はわずかな加筆・訂正であるが、三版は二版の約4倍の見出し語数になっており、かなり見出し語の補充が行なわれている。そこで、ここでは訳語を中心に、初版と二版の本文すべて、及び三版の、新たに補充された大見出し語とそれに付随する小見出し語を除いて、初版・二版と対応する箇所の大見出し語とそれに補充された小見出し語を対象にして、初版にあった訳語がどのように移り変わったかを比較・調査した。

以下は各版の調査対象とした見出し語数である。この数は、上述の「学術漢語表」作成の時に考慮した、「じょうしょ」と「じょうちょ」（情緒）のような異なる読みによる重複訳語の数を含んでいる。また、異なる見出し語に同じ訳語が対応させてある場合もその都度数えてある。

- ・ 初版 2,812語（以下図表中の通し番号は「T0001」より）
- ・ 二版 3,986語（以下図表中の通し番号は「X0001」より）
- ・ 三版 7,342語（以下図表中の通し番号は「Y0001」より）

「三版」にはこの他に、新規に増補された大見出し語とそれに付随する小見出し語があるが、ここでは対象としない。

初版 2,812語から二版 3,986語への変動の内訳は以下の通りである。

・ 初版からそのまま保持された訳語	2,756語
・ 初版にあった見出し語に追加された訳語	213語
・ 見出し語の追加(768語)に伴う新しい訳語	972語
・ 初版にあった見出し語または訳語に変更を加えた語	45語
	計 3,986語

・ 初版にあったが、二版で見出し語の削除に伴って

削除された訳語	2語
・初版にあったが、二版で同一の見出し語のうち一部の訳語が削除されたもの	17語

二版 3,986語から三版 7,342語への変動の内訳は以下の通りである。

・初版からそのまま保持された訳語	2,102語
・二版からそのまま保持された訳語	867語
・二版にあった見出し語に追加された訳語	2,810語
・小見出し語の追加(1,046語)に伴う新しい訳語	1,144語
・二版にあった見出し語または訳語に変更を加えた語	419語
計	7,342語

・二版にあったが、三版で見出し語の削除に伴って削除された訳語	116語
（うち初版からあった語は 56語）	
・二版にあったが、三版で同一の見出し語のすべての訳語が削除・差し替えられたもの	307語
（うち初版からあった語は 220語）	
・二版にあったが、三版で同一の見出し語のうち一部の訳語が削除されたもの	180語
（うち初版からあった語は 112語）	

ここでの「変更」とは次のような場合をさしている。

- ・見出し語の訂正・誤植
- ・見出し語の綴りの上での変更（アクセント符号の有無、ハイフンの有無など）
- ・見出し語の品詞の変更（動詞を名詞形にするなど）
- ・見出し語の分割・統合（「Right」を「公平、合理」と「権利」で2つの見出し語と

するかどうかなど)

- ・ 訳語の訂正・誤植
- ・ 訳語の字体の変更
- ・ 訳語の接頭語・接尾語の有無
- ・ 訳語の字順の変更
- ・ 訳語の漢字の一部を差し替えたもの

(上記2種は元の語を削除し新たに別語を採用したとも考えられるが、ここでは「変更」としてある)

- ・ 訳語の分割・統合

2.4.b. 訳語の変動の様相

初版から二版への訳語の変動は、主に新しい見出し語の追加や既にある見出し語への訳語の追加が中心である。

削除された語は19語であるが(〔表2.8. 『哲学字彙』二版で削除された訳語〕を参照)、二版で完全に姿を消したのは「繁雑」「学植」など8語で、残りの「撰撰」「全称命題」「産殖」など11語は他の見出し語に同じ訳語が存在している。それも初版からのもの、二版からのもの、三版で追加されたものにわたっていて、これらの11語が決して改版の時点で「廃語」となったのではないことがわかる。また「集合」と「叢会」は見出し語「Aggregate」の派生形で名詞形の「Aggregation」の訳語となっているので、訳語の移動・吸収とも解釈できる。また「作因」は同一の見出し語「Agent」の訳語として、三版で復活している。

また、何らかの変更が加えられた語については、見出し語の綴りのわずかな変更や訂正、訳語の字体の変更、字順の変更、接尾語の付与の有無などが目立つ(〔表2.9. 『哲学字彙』二版で変更された見出し語・訳語〕を参照)。全体に補充と訂正が主体となっており「正誤謬補不足」という二版の緒言〔Inouet-1884〕通りの変更となっている。

二版から三版での改版では、二版から 2,969語がそのまま引き継がれている。うち

2,102語は初版からそのまま保持されたものである。その他に 3,954語の訳語（三版で新規に補充された大見出し語とそれに付随する小見出し語を含まず）が増補されている。この他、以下に示す通り多少の変更が加えられた上で二版から引き継がれた語もある。

その一方で、603語の訳語（うち 388語は初版からのもの）が削除されている（〔表 2.10. 『哲学字彙』三版で削除された訳語〕を参照）。

「見出し語の削除に伴う訳語削除」では、削除の対象となった 116語の訳語のうち 39語は他の見出し語の訳語に出ていて三版まで保持されている。例えば「現実」「応用」「適合」など現代にも通用する訳語も削除対象となっているが、見出し語を削除した場合は対応する訳語そのものを術語として不適合としたわけではないので、このように他の見出し語の訳語として出現している場合も多い。

それに対し、見出し語は残されて訳語が削除・差し替えをされた場合には、「不信神教 (Atheism)」「有機体化醇論 (Phylogeny)」など、3字以上の比較的長い語が削除対象の訳語にみられる。これは、初版の時に簡潔な2字漢語の訳語がみつからず、原語のもつ概念を説明的に訳した後、改版時に別の訳語と差し替えることにしたのではないかと考えられる。また見出し語が残されて訳語が削除された語は、二版から三版の改版では計 487語あり、内訳は初版からの訳語が 332語、二版からの訳語が 155語である。さらに詳しくみると、このうち初版からの訳語 128語と二版からの訳語 14語は、接尾語の有無など多少語形に違いがあっても他の見出し語の訳語として三版まで保持されている。つまりこれらの語は、廃語にするわけではないが特定の見出し語に対応する訳語としては不適合、という観点から削除された可能性が高い。比率としては初版からの訳語が多く残され (38.5% =128/332)、二版からの訳語はあまり多く残されていない (9.0% =14/156) というのも特徴の一つである。「誤謬を正し、不足を補」ったはずの、二版から補充された訳語が多く削除されているのは、初版からの訳語がより残されていることと考えると、単に二版と三版の出版年代の差というより、三冊を通して編集した井上哲次郎が、二版の編集に大きく関与した有賀長雄の訳語をあまり適当と見なさなかったのではないかと考えられる。また、削除対象の訳語のうち残りの語は、他の見出し語の訳語にも残っていないが、単に訳語として不適合として削除されたか（この場合は、三版で大量に追加された大見出し語の訳語として、他の箇所に出ている可能性もある）、もしくは三版への改版時に廃語、古めかしい語などとみなされて削除されたのではないかと考えられる。

また、この他に二版から引き継いだ 417語に見出し語や訳語の変更がほどこされている

(〔表2.11. 『哲学字彙』三版で変更された見出し語・訳語〕を参照)。この「変更」は上述の通り、見出し語と訳語の表記・字体の変更、統合・分割、誤植・訂正などであるが、二版から三版では、そのような変更が同一の見出し語や対応する訳語に複合的になされている場合も多くみられ、かなり多岐にわたった変更がされたといえる。

上記のように、『哲学字彙』では初版から二版、二版から三版への改版時に、訳語の追加・変更・削除がなされており、それを個別に訳語に通し番号をつけて追跡調査した。

『哲学字彙』では類義の複数の見出し語に、同一もしくは同一の構成要素を含む訳語を対応させている場合も多いので、個別の訳語の変更・削除の追跡調査だけでなく、重複を整理して訳語としてどのようなものが三版まで保持されていたかをみることも必要と考えた。

そこで次にこれらの変更・削除・追加といった訳語の履歴を、前述の『哲学字彙』から作成した「学術漢語表」と対応させて、どのような学術漢語が(訳語の一部としてであっても語の中心的構成要素として)三版まで保持され、他方、変更・削除されたかを一覧できるように〔表2.12. 『哲学字彙』三版まで保持された訳語・削除された訳語〕にまとめた。1,847語の学術漢語は、次の8種類に分類できる。

- ・三版まで変更なく、ずっと同じ大見出し語または小見出し語の訳語として保持された語 ……1,475語
- ・二版または三版で削除されたが、初版の他の見出し語の訳語(の一部)にはあって、そちらが三版まで保持された語 …… 3語
- ・二版または三版で削除されたが、二版の他の見出し語の訳語(の一部)として追加され、そちらが三版まで保持された語 …… 7語
- ・二版または三版で削除されたが、三版の他の見出し語の訳語(の一部)として追加された語 …… 29語
- ・二版または三版の改版時に見出し語の削除に伴って、削除された訳語 …… 18語
- ・二版または三版の改版時に削除された訳語 …… 162語

- ・二版または三版の改版時に見出し語に変更が加えられて、訳語には
実質的に変更のなかった語 …… 51語
- ・二版または三版の改版時に変更された訳語 …… 102語

「改版時に変更された訳語」には、

- ・「検討（手偏から木偏）」「細包」から「細胞」「種属」から「種族」など字体や用字の変更
- ・「鬱憂」から「憂鬱」、「欲情」から「情欲」など字順の交替

などが多くみられる。また「Art」の訳語は初版では「術、技芸」であったが、二版では「術技、芸」と読点の位置が変わり、三版では「技術、芸術」となっている。この二版の読点の位置の変更が恣意的なものか、誤植によるものかは不明である。同様に「Congress」の訳語は二版では「民会国会」となっているが、三版では「民会、国会」と区切られていておそらくこちらが正しい形であろうと思われる。二版では、初版の誤植の多くを「緒言」の通り訂正しているが、一方で〔表2.5.〕に示したように新たな誤植もみられるので、「Art」の場合の読点の変更も全面的に訳語としての意図があるとはいいきれない。この他「Scientist」の訳語として初版では「学士」、二版では「理学士」、三版では「理学者」をあげているという事例もある。これは、接尾語「的」「論」の有無など語の中心的構成要素を保った他の多くの語にみられる変更方法とは違って、最終的に語形が変わる変更がなされていて特徴的であるといえる。

「改版時に削除された訳語」は 162語ある。これらの語の日本の文献での初出年代を『日本国語大辞典』〔Nihon-1972〕と『大漢和辞典』〔Morohashi-1996〕の用例にもとめた（〔表2.13.『哲学字彙』削除された訳語の初出年代〕を参照）。

「貧苦」「租税」など半分弱の 74語は、明治維新（1868年）以前の用例が初出としてあげられている。また「開進」「美妙」など 41語は、明治維新以後の用例が初出である。『日本国語大辞典』の初出例が、1881年出版の『哲学字彙』初版より新しい用例の場合は『哲学字彙』の方が古い用例であるといえる。このうち「軽快」「事物」など9語は『西国立志伝』（1871年）にあり、「軽信」「不公平」「憂国」の3語は『文明論之概略』（1875年）にあるという〔Nihon-1972〕。この他「価格」「廃老」など19語は『哲学字彙』初版（1881年）が初出用例ではないかと思われ、これは削除された 162語の1割以上にあたり、新しい形の訳語として収録したものの、定着しなかった語群といえる。

また、用例のないもの、用例の文献年代が正確に特定できなかったものが7語、「円満幸福」などおそらく複合語であったために独立した見出し語としてみられない語が6語あった。『日本国語大辞典』にみられない語のうち、「守法」「戦悸」など6語は『大漢和辞典』にはみられた。残りの28語は『日本国語大辞典』『大漢和辞典』のどちらにも見出し語にみられない語であった。

これらの「改版時に削除された訳語」162語のうち、初出の用例が明治維新以前と特定できる74語を除き、残りの88語を上述の〔2.1. 西周の語彙〕で作成した西周の訳語と対照させた。その結果以下の3語については西周の原語ルビ・注記付きの用例が確認できた。

・美妙（『哲学字彙』初版では「Aesthetics 美妙学」）

（訳語）	（ルビ・注記）	（推定される原語）	（所収文献）	（公刊年代）	（収録箇所）
美妙学	イツセクク	aesthetics	美妙学説	（稿本）	全集1巻p.477
美妙	エステック	aesthetics	訳利学説	1877	全集1巻p.162
美妙	ビ'ユチフウカ	beautiful	和装 心理学	1875-76	巻1-35オモテ
美妙論	エステ'チック	aesthetic	洋装 心理学	1878	上巻p.497

・下題（『哲学字彙』初版では「Data 下題」）

（訳語）	（ルビ・注記）	（推定される原語）	（所収文献）	（公刊年代）	（収録箇所）
下題	ダタ	data	和装 心理学	1875-76	巻1-8ウラ

・渾体（『哲学字彙』初版では「Sorities(マ・三版で訂正) 渾体」）

（訳語）	（ルビ・注記）	（推定される原語）	（所収文献）	（公刊年代）	（収録箇所）
渾体	sorites	----	致知啓蒙	1874	巻2-32ウラ

「美妙」は『日本国語大辞典』をみた限りでは『哲学字彙』初版（1881年）が最も古いかのようにあったが、西周の用例にはこのように1875年のものからみつかった〔注2.3.〕。また、「下題」と「渾体」の2語は『日本国語大辞典』『大漢和辞典』のいずれにも見出し語として収録されておらず、西周の造語を井上哲次郎が『哲学字彙』に引用した可能性が高い。『西周哲学著作集』〔Nishi-1933〕に井上哲次郎が序文を書いており、時期は明

確ではないものの「『哲学字彙』の草稿を氏（筆者注・西周）に送って其意見を問うた」と述べているところからも、井上哲次郎の用語における西周の影響がうかがわれる〔注2.4.〕この2語はその後、改版で削除されているところから、西周の造語を受け継いだものの、定着しなかった語の1例ではないかと考えられる。「西周の訳語」〔Kurishima-1991〕では西周の訳語のうち、「廃語となった語」の要因の一つとして未公刊著作に入っていたことをあげている。未公刊であることは確かに大きな要因であろうが、井上は個人的なつながりから西周の未公刊訳語を一部引き継いだようである。

井上哲次郎は『明治哲学界の回顧』〔Inouet-1932〕という著作の中で明治期の哲学者の業績を紹介している。この著作は「デアル体」で書かれており、一見先人たちの業績を客観的に評価・紹介しているかのようにみえるが、よく読んでいくと端々に知己のあった学者への個人的な思いが織りまぜられている。最初にあげられているのが西周で、これは上述の『西周著作集』〔Nishi-1933〕の序文にある通り、井上が意図したものである。おおむねは分野別、時代を追って並べられてはいるが、二番目が福澤諭吉であることは著作からの影響などを示唆してはいないだろうか。また、中村正直については「先生」「～ラレル」が使われており、「自分も帝国大学に於いては、先生の教授を受けた一人である。」と個人的なつながりが明示されている。『哲学字彙』の訳語の初出年代を『日本国語大辞典』に求めると、特に明治に入ってから文献では西周の著作、中村正直の『西国立志編』（1871年）、福澤諭吉の『文明論之概略』（1875年）が目立つ。『哲学字彙』の訳語は、これらの著作の訳語も引き継いでいる可能性が高いといえよう。

以上、西欧の学術書を幕末から明治初期にかけて数多く翻訳・解説した西周の用語を参考資料としながら、井上哲次郎が中心となって編集した『哲学字彙』の初版から三版へ至る訳語の変動を調査した。特に三版への改版では、先行研究で「新版に近い」〔Satok-1977〕と評されているが、これは多数の見出し語の増補や、書名に「英独仏和」と冠したように英語以外の西欧語を積極的に扱っていること、活字の縮小や版面の変更などが理由と考えられる。しかし、訳語という観点からみると初版に収録したものを、三版はかなり保持し続けており、場合によっては、有賀長雄が大きく関与したという二版の訳語を削除する一方で、二版で削られた初版の訳語を復活させている。また、（一部は見出し語の削除に伴って）訳語の削除も行なわれているが、この他に字体・用字や字順を変更する、接尾語を追加・削除するなど、極力初版の訳語を保ち、大幅な変更を避けようとした姿勢も

うかがえた。また、一部の訳語には、特に西周の造語からの影響も認められた。

章末注

[注2.1.] 西周の講義の時期は「明治3年11月以降」と推定されている [Nishi-1981]。 p. 28 大久保謙-193

筆録本である永見本『百学連環』は一部欠本。また欧文を中心に誤記がある。

[注2.2.] この『哲学字彙』二版・三版には、著者自筆の書き入れ本があるという [Chen-1998]。どちらも都立中央図書館所蔵本（和書ではないので館内の「井上文庫」（別置）ではなく、一般の書籍として所蔵されている）で、その二冊に押された印から陳氏は著者旧蔵本と判断され、三版の書き込みについては、井上が「これからの再版にそなえるものようで（中略）大正10年（1921年）の（三版の）再版本（中略）の後の作業と見てよかろう」と評価されている [Chen-1998]。

筆者の見聞では、二冊のうち特に三版はこの図書館で再装丁された際、頁の端を裁断して揃えたとみられ、「書き入れ」の一部はようやく判読可能な程度に欠けていた。ただし「井上文庫」と別置された和書類と異なり、図書館にこれらの本が所蔵された経緯は上記の論文中ではあきらかにされていない。そこで、今回の筆者の調査では、出版物としての『哲学字彙』を資料の範囲とすることにした。この調査では井上哲次郎自身の研究よりも、むしろ『哲学字彙』でとりあげられた用語がその後どのように一般に定着していったかという過程をみることに主眼をおいているので、このように調査範囲を限定することが妥当だと考えた。

[注2.3.] 稿本「美妙学説」の成立年代については、麻生義輝氏は明治5、6年頃、大久保利謙氏は明治11、12年頃と推定しているという [Nishi-1960]。

[注2.4.] この他、この序文の中で井上哲次郎は、明治17年春に井上のドイツ留学の送別会に西周が来会したこと、井上執筆の『明治哲学界の回顧』 [Inouet-1932] に「劈頭第一に」西周をとりあげたことを述べて「余は哲学上氏（筆者注・西周）と因縁の浅からざる者」とし、さらに西周と縁戚関係にある森鷗外とは「在独中以来親交ありし者」と、自らがいかに公私両面において西周と親交があった

かを語っている。

参照文献

- [Chen-1998] 陳力衛 「『哲学字彙』第三版をめぐって——著者の自筆稿本による改定・増補を中心に」 1998年 近代語研究会第157回研究会
- [Haven-1869] Haven, Joseph 『Mental philosophy: including the intellect, sensibilities, and will』 1869年 Gould and Lincoln (Boston) (東京大学蔵)
- [Hida-1979] 飛田良文 編 『哲学字彙 訳語総索引』 1979年 笠間書院
- [Hida-1980] 飛田良文 「『哲学字彙』の成立と改訂について」 (『英獨佛和哲学字彙 覆刻版』 1980年 名著普及会 pp.(1)-(16) 所収)
- [Inouet-1881] 井上哲次郎 『哲学字彙』(初版) 1980年 名著普及会 (1881年 東京大学三学部刊の復刻)
- [Inouet-1884] 井上哲次郎 『改正増補 哲学字彙』(二版) 1980年 名著普及会 (1884年 東京大学三学部刊の復刻)
- [Inouet-1912] 井上哲次郎 『英独仏和 哲学字彙』(三版) 1980年 名著普及会 (1912年 東京大学三学部刊の復刻)
- [Inouet-1932] 井上哲次郎 『明治哲学界の回顧』 1932年 岩波書店
- [Kurishima-1991] 栗島紀子 「西周の訳語」 (森岡健二 編著 『改訂 近代語の成立語彙編』 1991年 明治書院 pp.138-161 所収、『東京女子大学日本文学 第27号』 1966年 初出)
- [Lewes-1857] Lewes, George Henry 『Comte's Philosophy of the Science: being an Exposition of the Principles of the Cours de Philosophie Positive of Auguste Comte』 1857年 George Bell and Sons (London) (学習院大学蔵) (初版 1853年)
- [Lewes-1875] Lewes, George Henry 『The biographical history of philosophy』 1875年 Appleton (New York) (東京大学蔵) (初版 2vols, 1845-1846年)
- [Lewes-1893] Lewes, George Henry 『The biographical history of philosophy』 1893年 George Routledge and Sons (London) (学習院大学蔵) (初版 2vols, 1845-

1846年)

- [Meiroku-1976] 大久保監修 『復刻版明六雑誌 (第1巻・第2巻・第3巻)』 1976年
立体社 (1874-1875年 報知社出版の復刻)
- [Mill-1969] Mill, John Stuart 『Utilitarianism』 1969年 (Collected works of John
Stuart Mill. Vol.10.) University of Toronto Press (Toronto)
- [Morohashi-1996] 諸橋徹次 『大漢和辞典 修訂第二版 (第四刷)』 1996年 大修館書店
- [Nihon-1972] 日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』 1972年 小学館
- [Nishi-1874a] 西周 『百一新論』 1874年 山本覚馬刊 (国会図書館蔵)
- [Nishi-1874b] 西周 『致知啓蒙 (上・下)』 1874年 瑞穂屋卯三郎刊 (和装
学習院大学蔵)
- [Nishi-1875] 約瑟奚般(ヘブン) 著・西周 訳 『心理學 (上・中・下)』 1875-1876年
文部省版 (和装 学習院大学蔵)
- [Nishi-1877] 約翰・士低瓦的・弥留(ミル) 著・西周 訳 『利學 (上・下)』 1877年
島村利助刊 (和装 東京大学蔵)
- [Nishi-1878] 奚般 著・西周 訳 『心理學 (上・下)』 1878-1879年 文部省版 (洋装
国立国会図書館蔵)
- [Nishi-1933] 麻生義輝 編 『西周哲学著作集』 1933年 岩波書店
- [Nishi-1945] 大久保利謙 編 『西周全集 (旧第1巻)』 1945年 日本評論社
- [Nishi-1960] 大久保利謙 編 『西周全集 (第1巻・第2巻・第3巻)』 1960年 宗高書房
- [Nishi-1981] 大久保利謙 編 『西周全集 (第4巻)』 1981年 宗高書房
- [Obunsha-1995] 旺文社 編 『旺文社英和中辞典』 1995年 旺文社 (初版1975年)
- [Odagiri-1977] 日本近代文学館・小田切進 編 『日本近代文学大事典』 1977年 講談
社
- [Oed-1989] Simpson, J.A.・Weiner, E.S.C. 『The Oxford English Dictionary
Second Edition』 1989年 Oxford University Press (Oxford)
- [Satok-1977] 佐藤喜代治 編 『国語学研究事典』 1977年 明治書院
- [Shincho-1982] 久松潜一 監修 山田俊雄・築島裕・小林芳規 編 『新潮国語辞典一現
代語・古語一 新装改訂版』 1991年 新潮社
- [Shin'eiva-1980] 小稻義男他 編 『研究社新英和大辞典 第5版』 1980年 研究社
- [Shorter-1993] 『The New Shorter Oxford English Dictionary』 1993年 Oxford

University Press (Oxford) (First Edition 1933, Reprinted with Revised
Etymologies and Enlarged Addenda 1977)

第3章 外国語辞書にみられる学術漢語

第3章 外国語辞書にみられる学術漢語

3.1. 調査の概要

1881年に出版された『哲学字彙』[Inouet-1881]に含まれる「学術漢語」が、その後どのように一般の辞書の見出し語となり、広く定着するにいたったかを調査した。この調査にあたっては、現代の雑誌の語彙調査で使用度数最上位となった1,000語について、各種の外国語・国語辞書の見出し語に採用されているかどうかを調べた宮島達夫氏の「現代語いの形成」[Miyajima-1967]（以下「宮島データ」）を参考とした。ここでは「宮島データ」の結果を「Piotrowskiカーブ」にあてはめて考察した上で、筆者のおこなった「学術漢語」の調査結果とも比較を行なった。

3.2. 宮島の研究とPiotrowskiカーブ

3.2.a. 宮島の研究

今回、参考とした宮島達夫氏の「現代語いの形成」[Miyajima-1967]という研究は「現代語としてよく使われる単語がいつごろ現れたものかを、おもに和英辞典の見出し語によってしらべたもの」[同]であるという。

この調査では「現代語としてよく使われる単語」として、国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』[Kokken-1962a]（以下「雑誌90種」）の調査で、使用度数が上位であったものから、辞書の見出し語になりにくい220語を除いた1,000語を対象としている。

語種の観点からみると、この1,000語の内訳は

- ・和語 584語
- ・漢語 383語
- ・外来語 17語

・混種語 16語

となっている。

また、この1,000語を調べた辞書や資料として次のものがあげられている（括弧内は出版年）。外国語辞書に重きが置かれているのは「（特に明治時代は）一般に和英の方が（国語辞典より）敏感に語いの変化を反映するのではないか」という著者の考えによるものであるが、筆者もこの考えには同調できる。

・外国語辞書

日葡辞書（1603-04年）

和魯通言比考（1857年）

和英語林集成初版（1867年）

和英語林集成再版（1872年）

和独対訳字林（1877年）

和英語林集成三版（1886年）

漢英対照いろは辞典（1888年）

和英大辞典（プリングリー）（1896年）

和仏大辞典（ルマレシャル）（1904年）

新訳和英辞典（井上十吉）（1909年）

武信和英大辞典（武信由太郎）（1918年）

研究社新和英大辞典 1931年版

研究社新和英大辞典 1954年版

・国語辞典

言海（1989-91年）

帝国大辞典（1896年）

辞林（1907年）

大日本国語辞典（1915-19年）

広辞林（1925年）

・その他の資料

万葉集

源氏物語

布令新聞漢語必用 文明いろは字引 (1877年)

国立国語研究所の語彙調査 郵便報知新聞 (1877-78年)

国立国語研究所の語彙調査 朝日新聞 (1949年)

国立国語研究所の語彙調査 婦人雑誌2種 (1950年)

国立国語研究所の語彙調査 総合雑誌13種 (1953-54年)

くわしい考察は同論文を参照されたいが、主な結論として「明治時代は、その前後の時代よりも、語いの変化がはげしかったらしい。」「ふえた単語の多くは、明治時代には漢語であり、大正・昭和時代には外来語である。」[Miyajima-1967]という二点があげられている。

この研究は、現代の高頻度語がいつごろから一般に使用され始めたかをみるものであるが、筆者が行なっている「近代初期の学術漢語がどのように日本の近代・現代の一般社会に定着していったか」という主題と、「語の一般化」という点で共通するものがあると考え、参考にした。ただし、筆者の研究では語種でいえば漢語が主体となっており、それも『哲学字彙』[Inouet-1881]の出版当時には「新しい」意味や語形を持って社会に登場したものであることがうかがえるので、ここでは特に外国語辞書を中心に調査を行なった。

3.2.b.Piotrowskiカーブの性格

「宮島データ」における現代の高頻度語の辞書での採用の仕方を時系列的にみていくため、辞書ごとの見出し語の増加の仕方をPiotrowskiカーブにあてはめて回帰分析を行なった。

Piotrowskiカーブは、X軸に時間 (t) を、Y軸に出現する語の総数に対する比率 (p) をとった時、時間が下るに従って獲得される語数がえがくS字型カーブを数式化したものである。

一般的に言語変化の「普及の達成率」は「典型的な変化」では「『緩-急-急-緩』のパターンに当てはまる」[Aitchison-1991]とされている。「言語変化」は最初は徐々に進行し、ある程度浸透すると突然「飛翔点」[Aitchison-1991]とも言うべき急激な浸透が起こり、広範囲に影響をおよぼすとまたその速度は緩やかになる。この「緩-急-急-緩」の変化をX軸に時間(t)、Y軸に語彙の普及していく率(p)をとってグラフ化すると「S字型カーブ」になる。音韻変化や統語上の変化、外来語の浸透比率などが、このS字型カーブの例としてあげられている[Aitchison-1991][Altmann-1983a][Best-1983][Labov-1994]。

Piotrowskiカーブは、このS字型カーブを以下の数式[式3.1.]で表わしている[Piotrovskaya/Piotrovskij-1974][注3.1.]。時間(t)と変化の比率(p)の関係を示した方程式である。

$$p = 1 / \pi \arctan \mu (t - t_i) + 0.5 \quad \text{[式3.1.]}$$

しかしこの式[式3.1.]は線形回帰に変形させるのが難しいため、[Altmann-1983b]ではカーブの形状が上記の式と似た、ロジスティック曲線[式3.2.]を提案している。

$$p = c / \{ 1 + a e^{-k t} \} \quad \text{[式3.2.]}$$

さらに、増加の最終到達点が100%に満たないとあらかじめわかっている場合には、その(0より大きく1より小さい)目標値(率)を係数「c」として[式3.2.]を用いるが、増加の最終到達点は100%(1)である場合は「c=1」として[式3.3.]を用いるという[Altmann-1983a]。

$$p = 1 / \{ 1 + a e^{-k t} \} \quad \text{[式3.3.]}$$

このうち、a、kは係数で、eは自然対数、tは時間、pは変化の比率を示す。tには処理上は実際の時系列データ(暦年)などをあてはめる。この数式[式3.3.]による回帰分析も他の直線・曲線の回帰分析の場合と同様に、データを元に最小二乗法を用いて一番

適合する係数を求めて回帰方程式を完成させ、さらにその理論値と実数との差を検証するという手順をとる。

上記の式〔式3.3.〕は、両辺に対数をとることにより、次の手順で線形に変形できる。

$$\ln(c/p - 1) = \ln(a) - k t \quad [\text{式3.4.}]$$

ここで、 $\ln(c/p - 1) = Y$ 、 $\ln(a) = A$ 、とおくと、

$$Y = -k t + A \quad [\text{式3.5.}]$$

というYとtの関係を示した線形関数となる。これを最小二乗法を使って解くことによりデータに最も適合した回帰直線が得られる。さらに先の代入したYとAを使って式を〔式3.3〕の形にもどすことにより、直線は回帰曲線に変換できる。

実際の計算は以下の式によってAとkを求める。

$$A = \{ \Sigma(t^2) \Sigma(Y) - \Sigma(t) \Sigma(tY) \} / \{ n \Sigma(t^2) - (\Sigma t)^2 \}$$

$$-k = \{ n \Sigma(tY) - \Sigma(t) \Sigma(Y) \} / \{ n \Sigma(t^2) - (\Sigma t)^2 \}$$

この方程式〔式3.3.〕の妥当性は、式による理論値（ p' ）と実測値（ p ）の差（決定係数： R^2 ）がどのくらいであるかを以下の式で算出する。式中の「M」は p （実測値）の平均値である。この指標「決定係数（ R^2 ）」の絶対値が経験的に「0.85」を上回れば、方程式は比較的良好にデータに適合しているという〔注3.2.〕。

$$\text{決定係数 } R^2 = 1 - \{ \Sigma(p - p')^2 / \Sigma(p - M)^2 \}$$

この Piotrowskiカーブ〔式3.3〕を用いて、「宮島データ」が示す現代高頻度語の辞書における採用の増加の様子や、『哲学字彙』の「学術漢語」が明治から昭和の外国語辞書

で採用されていった様子を分析する。

3.2.c. Piotrowskiカーブによる宮島データの分析

「宮島データ」の語数がどのような形で時系列的に増加していくのかを、Piotrowskiカーブによる回帰分析で調査した。「宮島データ」は、国立国語研究所の雑誌90種の語彙調査〔Kokken-1962a, Kokken-1962b〕で使用度数最上位の1,000語が、各種の外国語・国語辞書の見出し語に採用されているかどうかを調べたものである。外国語辞書は13種類が対象になっているが、これらの辞書のうち最も古い『日葡辞書』（1603年）は次の『和魯通言比考』（1857年）との間が時間的に大きくあいており、他の12の辞書とは時代的にやや異なるので、この辞書のデータを除いた12の外国語辞書を用いて調査した。国語辞書は、外国語辞書に比べて調査した種類が少ない上、時系列的な間隔や系統が異なるので、この回帰分析では対象としなかった。

実際の回帰曲線の算出手順は以下のようなになる。

まず辞書の出版年順に、見出し語のにおける「雑誌90種の上位1,000語」の採用語数を並べる。辞書の中には出版が複数年にわたったものがあるが、便宜上最も古い年を時間（ t ）の目安とした。次に各年の採用語数を「雑誌90種の上位」総数1,000語で除し、その比率を p とする。また、時間（ t ）は、各辞書の出版年をそのまま用いてもよいが、計算が煩雑になるので1800を減じて小さい数にした。また係数 c は、語数の比率 p の最大値が1に近い場合は1でよいので、今回は $c = 1$ とおく。この p と t を用いて、 Y 、 A 、 a 、 $-k$ の順に係数を求めていくと、「 $p = c / \{ (1 + a e)^{-k t} \}$ 」という回帰曲線の方程式を得ることができる。

「宮島データ」の計算過程と結果については〔表3.1. 「宮島データ」のPiotrowskiカーブによる分析 —計算過程と結果—〕にまとめた。また、このデータの実測値（ p ）と理論値（ p' ）を比較したグラフは〔図3.2. 「宮島データ」とPiotrowskiカーブの比較〕を参照されたい。

以下に得られた回帰方程式とデータへの適合度を示す決定係数（ R^2 ）の値をあげる。

$$\text{宮島データ } p = 1 / \{ 1 + 7.7687 e^{-0.0454 t} \} \quad R^2 = 0.9701$$

決定係数 (R^2) は0から1の間の値をとるが、「宮島データ」の場合は「0.9701」と非常に高い値になっており、実測値がきれいなカーブをえがいて増加していくことが、グラフでも確認できる。[Miyajima-1967] では「1年あたりの増加率」を算出して「明治時代に急カーブで上昇した語数が、大正・昭和と次第にゆるやかな線にかわる」と述べているが、今回の Piotrowskiカーブを用いた回帰分析で、この増加がいわゆる「S字型カーブ」の一部分であることがわかる。

3.3. 『哲学字彙』採録漢語との比較

3.3.a. 研究資料の性格

「宮島データ」で使用された外国語辞書は13あるが、このうち、『和魯通言比考』[Goschikewitsch-1857]を除く12の辞書を用いて、近代初期の「学術漢語」がどの程度見出し語に採用されているかを調査した。『和魯通言比考』はロシア語の辞書で、他の辞書よりやや小さい辞書であることと、筆者がロシア語の知識に乏しく記述された意味の細かな差異を短時間に考察するのが難しいと判断したことから、今回は調査の対象外とした。さらに「宮島データ」で使用された『研究社新和英大辞典 1954年版』[Katsumata-1954]の改訂版『研究社新和英大辞典 1974年版』[Masuda-1974]を、調査資料に加えた。

ここにあげた13の辞書は、最初は主に来日した宣教師たちによるもので、後にはそれを参考にした日本人が編集した外国語辞書であって、同じ辞書が直接版を重ねたものではなくても『和英語林集成初版』以来、一定の流れがよみとれる点で継続的な資料群として扱えると考えた。

また、「幕末から明治初期へかけての訳語を見る上で」『和英語林集成初版』とともに「逸することができない」[Satok-1977]とされる『英和対訳袖珍辞書初版』[Hori-1862]の訳語も参照した。これは日本人が編集した英和辞典という点で他の資料と性格を

異にしているが、『哲学字彙』が出版された1881年以前の資料は、17世紀初めの『日葡辞書』とヘボンの辞書、およびそれに影響を受けたとされるレーマンの辞書のみであるので、ヘボンより前に編纂されたもので、相応の質と量を持ち、後世への影響も認められるという点からこれを資料に加え、計14冊の辞書を調べた。

以下に簡単に資料とした外国語辞書の性格と、語の記述形式の特徴などを説明する。なお、書名は角書きなどを含まない簡便な形で示した。

・『日葡辞書』（以下『日葡』）

編者はイエズス会の宣教師数名。本編は1603年、補遺は1604年刊。約32,800語を収録している。「ことばの性格を明示するとともに、その語義をポルトガル語でよく説明してあり、」「当時の口頭語を中心に方言・文書語・歌語・女房ことば」〔Satok-1977〕などが収録されている。「全般にきびしい規範的な態度で作られている」〔同〕という。また見出しの日本語がポルトガル式のローマ字で書かれていることから「発音資料としても有益」〔同〕とされている。

今回の調査では『邦訳 日葡辞書』〔Doi-1980〕を使用した。

・『英和对訳袖珍辞書』〔Hori-1862』（以下『堀』）

編者は堀達之助で、西周・千村五郎・竹原勇四郎・簗作麟祥らが協力した。初版は文久2年（1862年）刊。以後数回にわたり改版がなされ、また明治20年ごろまで俗に「薩摩辞書」と呼ばれた「改訂版」や類書が出されたという〔Morioka-1991〕。英語の見出し語数は約35,000語。それまでの蘭和辞書や英華辞典からの影響が認められ、訳語は比較的和語的な性格が強いという〔Satok-1977〕。

今回の調査では『江戸時代 翻訳日本語辞典』に収録されている、文久2年版の影印を使用した。

・『和英語林集成初版』〔Hepburn-1867』（以下『ヘボン初版』）

・『和英語林集成再版』〔Hepburn-1872』（以下『ヘボン再版』）

・『和英語林集成三版』〔Hepburn-1886』（以下『ヘボン三版』）

編者は平文（James Curtis Hepburn）。初版は1867年刊。ヘボンは1859年来日し、

キリスト教の「宣教事業の基礎となるものとして」『日葡辞書』や『英和和英語彙集』を参考に辞書の編纂を行なった。江戸末期の節用集や「読書の過程」、医師としてあらゆる階級の日本人の治療を行なった「過程」で日本語を収集したという。再版は1872年、三版は1886年に刊行され、前者は奥野昌綱が、後者は高橋五郎が協力した。「幕末から明治前期にかけての日本語を正確に記述している」という。三版までの和英の部の収録語数は

初版 20,772語

再版 22,949語

三版 35,618語

である。四版以降はヘボンが版權を丸善商社書店に譲渡し、若干の誤植訂正がみられるのみという。〔Satok-1977〕

記述の形式は、見出し語のローマ字表記、片仮名表記、漢字表記、品詞、英語による意味記述、ローマ字表記の例文（見出し語に「する」をつけた複合サ変動詞形を含む）とその英語訳、同義語、などとなっている。三版までのローマ字表記の規則は各版によって若干異なっている。

・『和独対訳字林』〔Lehmann-1877〕（以下『レーマン』）

齊田訥於・那波大吉・国司平六著述。律多留富勒曼（Rudolf Lehmann）校定。1877年刊。日本で最初の和独辞典で、ヘボンの『和英語林集成』を参考につくられたものという。この辞書は『和英語林集成』再版と三版との間に刊行されており、構成も同じという点で「明治初期の語彙変遷を知る上で貴重な資料」〔Satok-1977〕と位置づけられる。

記述の形式は、見出し語のローマ字表記、片仮名表記、漢字表記、品詞、独語による意味記述、ローマ字表記の例文（見出し語に「する」をつけた複合サ変動詞形を含む）とその独語訳、同義語、などとなっている。

・『漢英対照いろは辞典』〔Takahashi-1888〕（以下『高橋』）

編者は『和英語林集成三版』の刊行に協力したとされる高橋五郎。1888年刊。「語彙も多く、英文も当時としては正確であり図版も多い。」〔Sogo-1977〕とされる。

記述の形式は、見出し語の平仮名表記、品詞、漢字表記、日本語による意味記述、英

語による意味記述、などとなっている。

- ・『和英大辞典（ブリンクリー）』[Brinkley-1896]（以下『ブリンクリー』）

編者は Francis Brinkley と南条文雄、岩崎行親。1896年刊。「明治30～40年代に広く用いられた」辞書で、動物学・植物学・数学など「収録語の範囲が広く、百科辞典的性格をもっている」。和英の部分は 1,687ページある。記述形式が「ヘボンの『和英語林集成』に近似している」[Satok-1977] という。

記述の形式は、見出し語のローマ字表記、平仮名表記、漢字表記、品詞、英語による意味記述、ローマ字表記と漢字・片仮名表記の例文（見出し語に「する」をつけた複合サ変動詞形を含む）とその英語訳、同義語、などとなっている。

- ・『和仏大辞典（ルマレシャル）』[Lemarechal-1904]（以下『ルマレシャル』）

編者は J. M. Lemarechal。1904年刊。ヘボンやブリンクリーの辞書、『ことばの泉』『言海』『日本大辞林』を参照し、「新しい時代にふさわしい和仏辞書を作ろうとしたもの」という。約 55,000語を収録している。「明治時代後半の国語研究や政治・学術・軍事などの用語の研究」[Satok-1977] に有益とされている。

記述の形式は、見出し語のローマ字表記、漢字表記、品詞、仏語による意味記述、ローマ字表記の例文（見出し語に「する」をつけた複合サ変動詞形を含む）とその仏語訳、同義語、などとなっている。

- ・『新訳和英辞典（井上十吉）』[Inouej-1909]（以下『井上』）

編者は井上十吉。1909年刊。上記のブリンクリーの『和英大辞典』が 1907年まで毎年のように版を重ねていたが、この『新訳和英辞典』に「押され」たというほど、影響のあった辞書である。[Satok-1977] ブリンクリーの『和英大辞典』に比して見出し語・用例が「現代的かつ日常文的」[Okimori-1996] とされている。

- ・『和英大辞典（武信由太郎）』[Takenobu-1918]（以下『研究社初版』）

- ・『研究社新和英大辞典 1931年版』[Takenobu-1931]（以下『研究社二版』）

- ・『研究社新和英大辞典 1954年版』[Katsumata-1954]（以下『研究社三版』）

- ・『研究社新和英大辞典 1974年版』[Masuda-1974]（以下『研究社四版』）

『和英大辞典』は武信由太郎編。1918年刊。『研究社新和英大辞典 1931年版』〔注3.3.〕は同じ編者による改題で、同辞典は1954年の第3版（勝俣銓吉郎編）、1974年の第4版（増田綱編）〔Masuda-1974〕の改訂で現在に至る。「現存する和英辞典としては最長の歴史をもつ」〔Okimori-1996〕という辞典である。また、初版の序言には「冗長なる因襲訳を一掃して、代ふるに簡潔なる適訳」とした、とある。さらに、第4版の特色の一つとして「日常広く用いられる日本語の姿を現在の時点で捉えた。」と序文にあり、単なる英語学習のためだけの辞書ではないことが示されている。

この調査では、第二次世界大戦以前に出版された辞書のうち、次のものは各所蔵本を参照した。それ以外は複製本などを使用した。

- ・『和英語林集成再版』〔Hepburn-1872〕....学習院大学所蔵本
- ・『漢英対照いろは辞典』〔Takahashi-1888〕....学習院大学所蔵本
- ・『和英大辞典』〔Brinkley-1896〕....学習院大学所蔵本の1903年版（9版）
（Zの項の最後の頁のみ学習院本は欠落していたため、国立国会図書館蔵の1896年版（初版）を参照）
- ・『和仏大辞典』〔Lemarechal-1904〕....学習院大学所蔵本
- ・『新訳和英辞典』〔Inoue-1909〕....国立国会図書館所蔵本
- ・『和英大辞典』〔Takenobu-1918〕....学習院大学所蔵本の1923年版（訂正第40版）
- ・『研究社新和英大辞典』（再版）〔Takenobu-1931〕....国立国会図書館所蔵本

3.3.b. 外国語辞書に採用された「学術漢語」

『哲学字彙』〔Inouet-1881〕に基づいて抽出した「学術漢語」を、上記の14の辞書で調査するにあたって、異なる用字、異なる読みの語を同語か別語か判別する規範を『日本国語大辞典』〔Nihon-1972〕に求めた。その一覧を〔表3.3. 同語の判別表〕にまとめた。この他、『日本国語大辞典』では全く別語とされていて細かな語義は異なるが、調査した外国語辞書では混用されている、という場合は広く認めることにした。以下にその語を示す。

厭棄≒厭忌	器能≒機能	修整≒修正	政治≒政事
化成≒化生	罪過≒罪科	需用≒需要	生長≒成長
管理≒幹理	詐偽≒詐欺	照憑≒証憑	融会≒融解
機運≒氣運	肢体≒四体	心髓≒真髓	容止≒容姿

これらの判別の手がかりとして『哲学字彙』にあげられていて原語を重視した。例えば「需用」の原語は「Demand」であり、現在の訳語としては「需要」の方が適当であろう。また逆に原語から推測して別語とした例もある。「気象」は「Character」の訳語であるので「Meteorology」の意のものは除いた。また『日本国語大辞典』では「徳」の語義の一部に「得、もうけ」を表すものがあると記述されているが、『哲学字彙』の原語は「Virtue」であるので「もうけ」を表す「得」は除いた。

各外国語辞書と「学術漢語」の一致語数は次のようになった。また、対照結果は以下の各表に記載した。この表には、見出し語の表記や語義の記述などで注意を要するものや、同語判別の手がかりとした記述なども注記した。

- ・『日葡』……………325語 [表3.4. 学術漢語と『日葡辞書』の対照表]
- ・『堀』……………416語 [表3.5. 学術漢語と『英和对訳袖珍辞書』の対照表]
- ・『ヘボン初版』……………341語 [表3.6. 学術漢語と『和英語林集成初版』の対照表]
- ・『ヘボン再版』……………464語 [表3.7. 学術漢語と『和英語林集成再版』の対照表]
- ・『レーマン』……………424語 [表3.8. 学術漢語と『和独対訳字林』の対照表]
- ・『ヘボン三版』……………877語 [表3.9. 学術漢語と『和英語林集成三版』の対照表]
- ・『高橋』……………1,010語 [表3.10. 学術漢語と『漢英対照いろは辞典』の対照表]
- ・『プリンクリー』……989語
[表3.11. 学術漢語と『和英大辞典（プリンクリー）』の対照表]
- ・『ルマレシャル』…1,036語
[表3.12. 学術漢語と『和仏大辞典（ルマレシャル）』の対照表]
- ・『井上』……………1,031語
[表3.13. 学術漢語と『新訳和英辞典（井上十吉）』の対照表]

・『研究社初版』……1,233語

[表3.14. 学術漢語と『和英大辞典（武信由太郎）』の対照表]

・『研究社二版』……1,270語

[表3.15. 学術漢語と『研究社新和英大辞典 1931年版』の対照表]

・『研究社三版』……1,294語

[表3.16. 学術漢語と『研究社新和英大辞典 1954年版』の対照表]

・『研究社四版』……1,250語

[表3.17. 学術漢語と『研究社新和英大辞典 1974年版』の対照表]

また、14の辞書との対照結果を一つの表にまとめたものを〔表3.18. 学術漢語と外国語辞書との対照表〕に記載した。『日本国語大辞典』〔Nihon-1972〕・『大漢和辞典』〔Morohashi-1996〕への採用状況もこの表に付した。

一致語数は全体的に増加傾向にあり、特に『レーマン』の424語から『ヘボン三版』の877語への急激な増加が特徴的である。また、『研究社三版』から『研究社四版』では44語の減少が見られるが、三版から四版への改訂では最近はあまり使用されない漢語が整理されたように思われる。

次節以下で、この結果をさらに検討する。

3.3.c. 外国語辞書における「学術漢語」の類似度

『日葡』から『研究社四版』まで14の辞書における「学術漢語」の採用語数は、上記の通り全体的には増加傾向が認められる。

ここでは、多少年代の離れているものもあるが、14の辞書を出版年順に並べた時の隣り合った2つの辞書における「学術漢語」の採用の類似性を検討した。分析手法としては、 2×2 の分割表を作成し、 X^2 （カイ二乗）検定を用いて独立性の有意差検定を行ない、連関性があるかどうか、さらにあるとすればその類似度はどの程度のものかを相関係数PHI（ファイ）の値を算出して比較した。

年代順に隣り合った2つの辞書を2変数とすると、帰無仮説は「2変数は独立しており

無関係である」となる。両者に「存在する」語を「o」、「存在しない」語を「x」として検定を行ない、その計算と結果の値を「表3.19. 外国語辞書における「学術漢語」の独立性の検定 - 計算過程と結果 -」にまとめた。14本の標本のいずれかと一致した「学術漢語」は1,465語であったので、これを総語数として検定した。また、14の辞書のうち『ヘボン初版』と一致した「学術漢語」は341語で、『ヘボン初版』と『ヘボン二版』に共通して採用された「学術漢語」の語数も341語であった。これは『ヘボン初版』にあった341語の「学術漢語」がすべて『ヘボン二版』にも採用され、内包された形になっていることを意味する。このような場合はたとえ2x2の分割表を作成しても「0」の欄ができず、 X^2 (カイ二乗) 検定はできない。このようなデータには直接確率法を用いて検定をすることもできるが、最終的には相関係数 PHI (ファイ) を求めてその類似性を考えることが望ましいので『ヘボン初版』は検定の対象からはずし、『堀』と『ヘボン二版』との関係を検定した。また、語数が5以下の欄を含むデータにはイェーツ (Yates) の修正を行なった [Iwai-1985]。

13の辞書の、隣り合った12通りの組み合わせの検定結果は、いずれも X^2 (カイ二乗) 統計量は3.84を上回った。自由度1、有意水準5%に対応する X^2 分布のパーセント点は3.84であるので、 X^2 統計量がこれを上回る時は有意水準5%で帰無仮説を棄却する。従って、12通りの組み合わせのいずれの場合も、出現した「学術漢語」の間には連関が認められ、隣り合った2つの辞書における「学術漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。

さらに、その連関性の強さがどの程度であるかを相関係数 PHI (ファイ) の値を算出して比較した。PHI (ファイ) は、以下のように X^2 (カイ二乗) 統計量から算出する。式中の「n」はデータの総数で、ここでは $n = 1465$ となる。

$$PHI = \sqrt{X^2 / n}$$

以下に算出した PHI (ファイ) の値の一覧を示す。また、この値と、各辞書間に共通の語数を合成グラフにして「図3.20. 外国語辞書における「学術漢語」の類似度」に示した。

	PHI
・『日葡』 と『堀』	0.356

・『堀』	と『ヘボン再版』	0.466
・『ヘボン再版』	と『レーマン』	0.824
・『レーマン』	と『ヘボン三版』	0.500
・『ヘボン三版』	と『高橋』	0.519
・『高橋』	と『プリンクリー』	0.643
・『プリンクリー』	と『ルマレシャル』	0.773
・『ルマレシャル』	と『井上』	0.414
・『井上』	と『研究社初版』	0.658
・『研究社初版』	と『研究社二版』	0.793
・『研究社二版』	と『研究社三版』	0.790
・『研究社三版』	と『研究社四版』	0.810

上記の PHI の値のうち、『ヘボン再版』と『レーマン』の「0.824」が最も高い数値で、この中では類似性が非常に高いことを示している。「学術漢語」の採用語数はそれほど多くないが、『レーマン』の辞書が『ヘボン』の辞書を参考に行っていることの一面が数値として表れていることがわかる。また、『ヘボン三版』と『高橋』は「0.519」で、辞書の編者が外国人か日本人かという違いはあるが、それほど類似性は低くはない。これは高橋五郎がヘボンの辞書編集に協力していたことから、『高橋』の辞書における語の採用の仕方が、ヘボンの辞書の流れを受け継いでいることを示すものではないかと考えられる。一方、同様に編者が各々外国人と日本人である『ルマレシャル』と『井上』の間では、それまで比較的増加傾向にあった PHI の値が「0.414」に落ちている。そしてその後、『井上』と研究社の辞書群はまた「0.700」前後の類似性を示すようになる。これは『井上』以後の辞書が、それまでの宣教師が編集した辞書群とはやや異なる流れであることを示すものではないかとも考えられる。

3.3.d.Piotrowskiカーブによる「学術漢語」の分析

・係数 c を使用した場合

「学術漢語」の、外国語辞書における採用語数の時系列的な増加を、Piotrowskiカーブを使った回帰分析で検証した。

「宮島データ」の場合と同様、最も古い『日葡』（1603年）は次の『堀』（1862年）との間が時間的に大きくあいており、他の12の辞書とは時代的にやや異なるので、『日葡』のデータを除いた12の外国語辞書を用いて調査した。

実際の回帰曲線の算出手順は「宮島データ」の場合と同様である。

まず辞書の出版年順に、「学術漢語」の採用語数を並べる。出版が複数年にわたったものは便宜上最も古い年を時間（ t ）の目安とした。次に各年の採用語数を「学術漢語」の総数1,847語で除し、その比率を p とする。また、時間（ t ）は、各辞書の出版年をそのまま用いてもよいが、計算が煩雑になるので1800を減じて小さい数にした。また係数 c は、語数の比率 p の最大値に近い値に設定した方がより精度の高い回帰曲線が得られるので、今回は $c=0.75$ とおいた。この p と t を用いて、最小二乗法により Y 、 A 、 a 、 $-k$ の順に係数を求めていくと、「 $p=c/\{(1+ae)^{-kt}\}$ 」という回帰曲線の方程式を得ることができる。

「学術漢語」の計算過程と結果については〔表3.21. 「学術漢語」のPiotrowskiカーブによる分析—計算過程と結果—〕にまとめた。また、このデータの実測値（ p ）と理論値（ p' ）を比較したグラフは〔図3.22. 「学術漢語」とPiotrowskiカーブの比較〕を参照されたい。

以下に得られた回帰方程式とデータへの適合度を示す決定係数（ R^2 ）の値をあげる。

$$\text{学術漢語 } p = 0.75 / \{1 + 16.5615 e^{(-0.0351 t)}\} \quad R^2 = 0.8549$$

決定係数（ R^2 ）は0から1の間の値をとる。「学術漢語」の場合は「宮島データ」の場合には及ばないが「0.85」をやや上回っており、回帰方程式がデータによく適合しているといえる。「学術漢語」の場合も、外国語辞書における語の採用の増加の仕方がいわゆる「S字型カーブ」の一部分をなしていることがわかる。

この「S字型カーブ」の回帰曲線を微分して極限値を求めることにより、急激に立ち上

がった曲線がなだらかになっていく点を算出した。これは「学術漢語」が外国語辞書に見出し語として採用された語数が急激に増加した時期を経て、採用の仕方がある程度の語数で落ち着いていく時期を意味している。この点を求めるためには、上記の方程式を3回微分して得られた式の値を「0」と置き、時間の変数（ t ）で解けばよい。計算の上では、極限值は2点存在し、1点は曲線が急激に立ち上がる地点、もう1点は立ち上がった曲線がなだらかになる地点であるが、今回の「学術漢語」のデータの範囲では後者の点のみが対象となる。曲線を微分した時の極限値の様子が視覚的にわかるように〔図3.23. 「学術漢語」の場合における Piotrowskiカーブを微分した図〕に示した。実際のデータは1862年から1974年の範囲であるが、「S字型カーブ」がよくわかるよう $-100 < t < 200$ の範囲、つまり1700年から2000年の範囲で示してある。

Piotrowskiカーブの式を微分すると、次の方程式が得られる。

$$\text{Piotrowskiカーブ } p = c / \{1 + ae^{(-kt)}\} \quad [\text{式3.6.}]$$

$$dp/dt = \{cak * e^{(-kt)}\} / \{1 + ae^{(-kt)}\}^2 \quad [\text{式3.7.}]$$

$$d^2 p/dt^2 = \{cak^2 * e^{(-kt)}\} * \{a * e^{(-kt)} - 1\} / \{1 + ae^{(-kt)}\}^3 \quad [\text{式3.8.}]$$

$$d^3 p/dt^3 = \{cak^3 * e^{(-kt)}\} * \{a^2 * e^{(-2kt)} + 1 - 4a * e^{(-kt)}\} / \{1 + ae^{(-kt)}\}^4 \quad [\text{式3.9.}]$$

Piotrowskiカーブの式〔式3.6.〕に3回微分を行なうと方程式〔式3.9.〕が得られる。これが「0」になるのは、

$$\{a^2 * e^{(-2kt)} + 1 - 4a * e^{(-kt)}\} = 0 \quad [\text{式3.10.}]$$

の時で、これを t について解くと、

$$t = (-1/k) * \text{Ln}\{ (2 \pm \sqrt{3})/a \} \quad [\text{式3.11.}]$$

となる。「学術漢語」の回帰曲線の場合は、

$$a = 16.5615 \quad k = 0.0351$$

であったので、これを「式3.12.」に代入して「t」を求める。「t」の値は

$$t = 42.4249 \quad t = 117.4144$$

の2つが得られるが、実測値から「t」の範囲は

$$62 < t < 174$$

なので、この範囲にある「t」の値を選ぶと、

$$t = 117.4144$$

となる。「t」はもともと西暦から1800を減じた数なので、該当の年代は

$$117.4144 + 1800 = 1917.4144$$

となる。このように、Piotrowskiカーブを使った回帰曲線から算出すると、採用語数の増加率がにぶり始めるのは1917年ごろと推定される。

・第3のPiotrowskiカーブの場合

さらにもう一つ、別なタイプの曲線による分析を試みる。

[Altmann-1983b]が提案しているPiotrowskiカーブの変形曲線は、3通りある。第1

のタイプは上記で扱った式のうち、 $c = 1$ とおいたもの、

$$\text{第1のタイプ } p = 1 / \{1 + a e^{-k t}\} \quad [\text{式3.12.}]$$

第2のタイプは、上記で使用した、 c をデータの最大値に近い任意の定数としたもの、

$$\text{第2のタイプ } p = c / \{1 + a e^{-k t}\} \quad [\text{式3.13.}]$$

そして、第3のタイプは、曲線が単にS字型を描くだけでなく、そのあと山を降りるよ
うにカーブが下に下るもの、

$$\text{第3のタイプ } p = 1 / \{1 + a e^{-b t + c t^2}\} \quad [\text{式3.14.}]$$

という3種類である。

今回の「学術漢語」と外国語辞書の対照データでは、最後の『研究社四版』の採用語数が『同三版』より減少しているので、カーブが完全に山を降りているとはいえないが、この第3のタイプの式による回帰分析も試みた。

おおよその解法手順は以下の通りである。

[式3.14.]の両辺に対数を取り、次の形に変形する。

$$\ln(1/p-1) = \ln(a) -bt + ct^2 \quad [\text{式3.15.}]$$

ここで、 $y = \ln(1/p-1)$ 、 $A = \ln(a)$ 、 $B = -b$ 、 $C = c$ とおき [式3.16.]を次のように変形する。

$$y = A + Bt + Ct^2 \quad [\text{式3.16.}]$$

これは、最小二乗法により以下のように解くことができる。「Ave」は平均を示す。

$$B = \frac{Myt * Mt^2 t^2 - Myt^2 * Mtt^2}{Mtt * Mt^2 t^2 - Mtt^2 * Mtt^2} \quad [\text{式3.17.}]$$

$$C = \frac{Mtt * Myt^2 - Mtt^2 * Myt}{Mtt * Mt^2 t^2 - Mtt^2 * Mtt^2} \quad [\text{式3.18.}]$$

$$A = Ave(y) - B * Ave(t) - C * Ave(t^2) \quad [\text{式3.19.}]$$

このとき、

$$Myt = \sum (ti - Ave(t))(yi - Ave(y)) = \sum (ti * yi) - \frac{\sum ti * \sum yi}{n} \quad [\text{式3.20.}]$$

$$Mtt = \sum (ti - Ave(t))^2 = \sum (ti^2) - \frac{(\sum ti)^2}{n} \quad [\text{式3.21.}]$$

$$Mtt^2 = \sum (ti - Ave(t))(ti^2 - Ave(t^2)) = \sum (ti^3) - \frac{\sum ti * \sum ti^2}{n} \quad [\text{式3.22.}]$$

$$M_t^2 - t^2 = \Sigma (t_i^2 - \text{Ave}(t^2))^2 = \Sigma (t_i^4) - \frac{(\Sigma t_i^2)^2}{n} \quad [\text{式3.23.}]$$

$$M_{yt}^2 = \Sigma (y_i - \text{Ave}(y))(t_i^2 - \text{Ave}(t_i^2)) = \Sigma (y_i t_i^2) - \frac{\Sigma y_i * \Sigma t_i^2}{n} \quad [\text{式3.24.}]$$

「學術漢語」の計算過程と結果については〔表3.24. 「學術漢語」の 第3の Piotrowskiカーブによる分析 —計算過程と結果—〕にまとめた。また、このデータの実測値（ p ）と理論値（ p' ）を比較したグラフは〔図3.25. 「學術漢語」と 第3の Piotrowskiカーブの比較〕を参照されたい。

以下に得られた回帰方程式とデータへの適合度を示す決定係数（ R^2 ）の値をあげる。

$$p = 1 / \{ 1 + 593.8086 e^{(-0.0993 t + 0.0003 t^2)} \} \quad R^2 = 0.9285$$

決定係数の値が、前のタイプの曲線に比べて大きく、この式がデータに非常によく適合していることがわかる。最後の『研究社四版』のデータは、単なる外れ値ではなく、採用語数が再び減少し始めている表れであるとみるべきであろう。『研究社四版』で削除された語については〔3.3.e.〕を参照されたい。

先ほどと同様に、得られた回帰方程式を微分して、採用語数の伸びが鈍り始める時期を推定してみる。曲線を微分した時の極限值の様子が視覚的にわかるように〔図3.26. 「學術漢語」の場合における第3の Piotrowskiカーブを微分した図〕に示した。実際のデータは1862年から1974年の範囲であるが、「S字型カーブ」がよくわかるよう $-100 < t < 200$ の範囲、つまり1700年から2000年の範囲で示してある。

$$\text{第3の Piotrowskiカーブ } p=1/\{1 + ae^{(-bt+ct^2)}\} \quad [\text{式3.25.}]$$

$$E' = e^{(-t*(-ct+b))} \quad [\text{式3.26.}]$$

$$E'' = e^{(-2t*(-ct+b))} \quad [\text{式3.27.}]$$

とおくと、

$$dp/dt = \{a(b-2ct)\} * E' / \{1+ aE'\}^2 \quad [\text{式3.28.}]$$

$$\begin{aligned} d^2 p/dt^2 = \{aE'\} * \{-2c -2acE' -(b^2) + (b^2)aE' +4bct -4bctaE' \\ -4(c^2)(t^2) +4(c^2)(t^2)aE'\} / \{1+ aE'\}^3 \quad [\text{式3.29.}] \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} d^3 p/dt^3 = \{aE'\} * \{ 6bc -12(c^2)t +24(b^2)aE'ct -48b(c^2)(t^2)aE' \\ +32(c^3)(t^3)aE' +(b^3) -8(c^3)(t^3) -4(b^3)aE' -6(b^2)ct \\ +12b(c^2)(t^2) +(b^3)(a^2)E'' -6bc(a^2)E'' -6(b^2)(a^2)E''ct \\ +12b(c^2)(t^2)(a^2)E'' +12(c^2)t(a^2)E'' -8(c^3)(t^3)(a^2)E''\} \\ / \{1+ aE'\}^4 \quad [\text{式3.30.}] \end{aligned}$$

となる。この回帰曲線の場合は、

$$a= 593.8086352491 \quad b=0.0993384536 \quad c=0.0003373234$$

であったので、これを [式3.30.] に代入して左辺を0とおき、「t」を求める。「t」の値は

$$t= 53.861 \quad t=105.218 \quad t=146.301 \quad t=189.712$$

の4つが得られるが、実測値から「t」の範囲は

$$62 < t < 174$$

なので、この範囲にある「t」の値を選ぶと、

$$t=105.218 \quad \text{または} \quad t=146.301$$

となる。1つ目の解は、カーブの上昇がにぶくなる場所、2つ目の解は、上昇して頂点の直前で傾きがわずかによじれるところを示す。ここでは特に、採用語数の伸びが鈍る時期を推定するので、1つ目の解を採用する。

「t」はもともと西暦から 1800 を減じた数なので、該当の年代は、

$$105.218 + 1800 = 1905.218$$

となる。第3の Piotrowskiカーブを使った回帰曲線から算出すると、採用語数の増加率がにぶり始めるのは 1905年ごろと推定される。この回帰曲線の方が先のものよりもデータへの適合度が高いので、こちらの推定年代の方が精度が高いと考えられる。

以上のように、回帰曲線から算出すると 1905年ごろが外国語辞書への採用語数が落ち着いてきた時期である、ということになる。これは、資料では『ルマレシャル』と『井上』の間の時期にあたる。『ルマレシャル』以前でも『高橋』には既に 1,000語前後の「学術漢語」が辞書に採用されているが、13の資料全体をみた場合にはこのあたりの時期が、遅くとも採用語数を固定し始めた時期であると考えられる。

また、3.2.b.節で述べたように、言語学ではその変化が「S字型カーブ」という形で説明されることがあるが、従来そのカーブそのものについての計量的な比較や分析はあまりなされてこなかった。今回のようにデータをS字型の方程式で回帰分析し、得られた式が十分にデータに適合していれば、得られた方程式を微分で加工することにより「緩－急－急－緩」の変化の時期をある程度推定することが可能であると考えられる。

3.3.e. 「学術漢語」と外国語辞書

各外国語辞書に採用された「学術漢語」の語数をみていくと、『研究社三版』（1954年）で1,294語あったものが『研究社四版』（1974年）では1,250語に減少している。これは55語の減少と11語の増加によるものである。

減少した55語と増加した11語を、それを最初に採用した辞書別にみていくと以下のようになる。

- ・『研究社三版』で採用され『研究社四版』で削除された語（55語）

最初に採用した辞書	語数	
『日葡』	3語	旨趣 尊崇 無辺
『堀』	2語	元由 星学
『ヘボン初版』	3語	諂諛 不行状 不虞
『ヘボン再版』	2語	隠伏 永存
『レーマン』	1語	面色
『ヘボン三版』	13語	隠士 奥<玄+少> 勸解 喜楽 降生 私益 照憑 処弁 比論 電勉 法王政治 無識 冷語
『高橋』	10語	隠府 允許 穎悟 儀範 苦楚 枯槁 産殖 章程 憑拋 離群
『プリンクラー』	3語	一義 工銀 更張
『ルマレシャル』	0語	
『井上』	1語	把住
『研究社初版』	6語	間歇遺伝 起首 驚駭 考試 消魂 聡敏
『研究社二版』	6語	異物同名 玄奥 小引 触接 心髓 物力
『研究社三版』	5語	応当 逆理 執意 主位 小反対

・『研究社三版』で採用されず『研究社四版』で採用された語（11語）

最初に採用した辞書 語数

最初に採用した辞書	語数
『日葡』	3語 寂静 門派 法式
『研究社四版』	8語 気習 帰無 純音 動学 不可測 平叙 無感 預察

「『研究社三版』で採用され『研究社四版』で削除された語」のうち、10語以上に及ぶものは、『ヘボン三版』と『高橋』である。「学術漢語」が外国語辞書に急激に採用され始めるのが『ヘボン三版』や『高橋』あたりからであり、これらの語は外国語辞書に採られてしばらくは残っていたが、近年はあまり使われないということで削除されたものであろう。逆にそれ以前の辞書に採用されていた「星学」などは、戦後 1954年の辞書まで採られ続けていたことが不思議に思われる。また『ルマレシャル』や『井上』からのものは極端に少なく、『研究社初版』以降に採用された 17語がそのあとに続く。これらは辞書の見出し語に採られたものの、比較的「短命」であった語といえる。

「『研究社四版』で削除された語」が比較的『ヘボン三版』や『高橋』あたりから登場するものが多いのに対して、「『研究社四版』で採用された語」は『研究社四版』が新たに採用した8語と、『日葡』にみられる3語に二分される。特に「門派」は『ヘボン初版』から、「法式」は『ヘボン三版』から、『ブリンクリー』『ルマレシャル』あたりまでずっと採用されてきた語である。

外国語辞書全体において「学術漢語」の採用のされ方と、それがいつまで保持されたかを見るために、それぞれの語において「最初に採用した辞書」と「最後に採用した辞書」を調べた。これを辞書ごとの語数にまとめたものが〔表3.27. 「学術漢語」を最初に採用した外国語辞書と最後に採用した辞書〕である。この中では『ルマレシャル』が最後に採用し、『井上』が採用しなかった 64語が目立つ。上述の『ルマレシャル』と『井上』の語の採用の仕方の違いと同様の傾向である。

さらに、年代の差はそれぞれ異なるが、隣り合った辞書の距離を便宜的に「2」、間に辞書を1つはさんだ関係を距離「3」として、最後に『研究社三版』に採用された語まで、

つまり『研究社四版』には残らなかった計 215語を調べた。「辞書の距離」と語数との関係は以下の通りになった。「距離」の数値が大きいほど、語はよく保持されていたことになる。

距離	語数	距離	語数
1	73	8	20
2	20	9	7
3	33	10	2
4	17	11	6
5	8	12	2
6	8	13	3
7	16		

「辞書の距離」が「1」というのはその辞書1つだけが採用した語で、これが 73語ある。「2」の場合は隣り合った辞書までは保持されたがそのあとは残らなかった、ということになり、これは 20語ある。「距離」が「4」くらいまでは2桁の語数が続き、そのあと距離が「7」「8」あたりで語数がまた増えている。これは上述の『ヘボン三版』と『高橋』で採用され『研究社三版』まで保持された 23語が影響している。そのあと「辞書の距離」が「9」以上になると語数は再び少なくなる。

このようにみていくと、外国語辞書における「学術漢語」の消長の特徴は、以下のように考えられる。『哲学字彙』に採用される以前から辞書に採用されていた語は、比較的消えにくい。『哲学字彙』で採用されたあと、『ヘボン三版』や『高橋』で新たに採用された語群の中には近年使われないものが出てきている。また、外国語辞書に採用されたが、比較的すぐ消えてしまった語群もある。

また、前節までの計量的分析からは、次のような特徴がみられる。

「学術漢語」の外国語辞書における一致語数は全体的に増加傾向にあり、特に『レーマン』から『ヘボン三版』への急激な増加が特徴的である。

各辞書の「学術漢語」の採用の仕方を類似度の観点からみると、『ヘボン再版』と『レーマン』、『ヘボン三版』と『高橋』の間に高い数値がみられる。これらは、『レーマン』の辞書が『ヘボン』の辞書を参考に行っていることや、高橋五郎がヘボンの辞書編集に協力していたことから、『高橋』の辞書における語の採用の仕方が、ヘボンの辞書の流れを受け継いでいることを示すものではないかと考えられる。一方、『ルマレシャル』と『井上』の間では類似度の数値はそれほど高くなく、『井上』以後の辞書が、それまでの宣教師が編集した辞書群とはやや異なる流れであることを示すものではないかとも考えられる。

Piotrowskiカーブを使った回帰分析では、「学術漢語」の場合も外国語辞書における語の採用の増加の仕方が、いわゆる「S字型カーブ」の一部分をなしていることがわかる。このカーブは単なるS字型ではなく、さらに再び山を降りるようなカーブである。さらに回帰曲線から、その増加の速度が特に鈍くなってきた時期を推定すると、1905年ごろが外国語辞書への採用語数が落ち着いてきた時期であると思われる。これは、資料では『ルマレシャル』と『井上』の間の時期にあたる。『ルマレシャル』以前でも1,000語前後の「学術漢語」が辞書に採用されているが、13の資料全体を考慮すると、このあたりの時期が遅くとも採用語数を固定し始めた時期であると考えられる。

章末注

[注3.1.] [Altmann-1983a] による。[Piotrovskaja/Piotrovskij-1974] は筆者未見。

[注3.2.] 1999年10月20日付 G. Altmann教授から筆者あての私信による。また [Altmann-1983a] では算出した回帰曲線の方程式を F-testで検定しているが、著者の G. Altmann教授によれば、式の検証は今では決定係数 (R^2) を用いる方が簡便であると考えているとのことであった。これは 1999年10月9日付 G. Altmann教授から筆者あての私信による。ここでは筆者も同様に考え、決定係数 (R^2) を用いることにした。

[注3.3.] 『研究社新和英大辞典』第2版の刊行年は、同1974年版(第4版)奥付には「1931年 第2版」とある。『日本辞書辞典』[Okimori-1996] には「1936(昭

和6)年」と書かれているが、おそらく1931年が正しいと思われる。

参照文献

- [Aitchison-1991] Aitchison, J. 『Language change: progress or decay? Second edition』 1991年 Cambridge University Press (Cambridge)
 (= ジーン・エイチソン 『言語変化 進歩か、それとも衰退か』 1994年 リーベル出版)
- [Altmann-1983a] Altmann, G. 「A Law of Change in Language」 (『Historical Linguistics (Quantitative Linguistics. Vol.18)』 1983年 Studienverlag Dr. N. Brockmeyer (Bochum) pp.104-115 所収)
- [Altmann-1983b] Altmann, G. 「Das Piotrowski-Gesetz und seine Verallgemeinerungen」 (『Exakte Sprachwandelforschung: Theoretische Beiträge, statistische Analysen und Arbeitsberichte』 1983年 Edition Herodot (Goettingen) pp.59-90 所収)
- [Best-1983] Best, K.-H.・Kohlhase, J. 「Der Wandel von ward zu wurde」 (『Exakte Sprachwandelforschung: Theoretische Beiträge, statistische Analysen und Arbeitsberichte』 1983年 Edition Herodot (Goettingen) pp.91-102 所収)
- [Brinkley-1896] Brinkley, F.・南条文雄・岩崎行親 『和英大辞典』 1896年(初版)
 三省堂 (学習院大学蔵本の1903年・9版を参照。Zの項の最後の頁のみ学習院本は欠落していたため、国立国会図書館蔵の1896年・初版を参照した。)
- [Doi-1980] 土井忠生・森田武・長南実 訳 『邦訳 日葡辞書』 1980年 岩波書店
 (『日葡辞書』 1603-4年 長崎学林刊 の全文日本語訳版)
- [Goschikewitsch-1857] Goschikewitsch, I. 『和魯通言比考』 1974年 天理大学出版部 (1857年の復刻版)
- [Hepburn-1867] Hepburn, J.C. 『和英語林集成』 (初版) 1966年 北辰 (1867年 American Presbyterian Mission Press (Shanghai) の復刻版)
- [Hepburn-1872] Hepburn, J.C. 『和英語林集成』 (再版) 1872年 American

- Presbyterian Mission Press (Shanghai) (学習院大学蔵)
- [Hepburn-1886] Hepburn, J.C. 『改正増補和英英和語林集成』(三版) 1980年
(講談社学術文庫) 講談社 (1886年 丸善商社 の復刻版)
- [Hori-1862] 堀達之助 「英和对訳袖珍辞書」(文久2年版)(杉本つとむ 編『江戸時代 翻訳日本語辞典』 1981年 早稲田大学出版 所収の影印(1862年 洋書調所刊))
- [Inoue-1909] 井上十吉 『新訳和英辞典』 1909年 三省堂 (国立国会図書館蔵)
- [Inouet-1881] 井上哲次郎 『哲学字彙』(初版) 1980年 名著普及会 (1881年 東京大学三学部刊の復刻)
- [Iwai-1985] 岩井勇児・鈴木真雄 『教師のための統計法入門 第2版』 1985年 福村出版
- [Katsumata-1954] 勝俣銓吉郎 『研究社新和英大辞典』(三版) 1954年 研究社
- [Kokken-1962a] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 一総記および語彙表一』 1962年 秀英出版
- [Kokken-1962b] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 一分析一』 1962年 秀英出版
- [Labov-1994] Labov, W. 『Principles of Linguistic Change. Volume 1: Internal Factors』 1994年 Blackwell Publishers (Oxford)
- [Lehmann-1877] 斉田訥於・那波大吉・国司平六 著述、Lehmann, R. 校定 『和独対訳字林』 1981年 三修社 (1877年の復刻版)
- [Lemarechal-1904] Lemarechal, J.M. 『和仏大辞典』 1904年 天主堂 (学習院大学蔵)
- [Masuda-1974] 増田綱 『研究社新和英大辞典』(四版) 1974年 研究社
- [Miyajima-1967] 宮島達夫 「現代語いの形成」(国立国語研究所 『国立国語研究所論集3 ことばの研究』 1967年 秀英出版 pp.1-50 所収)
- [Morioka-1991] 森岡健二 編著 『改訂 近代語の成立 語彙編』 1991年 明治書院
- [Morohashi-1996] 諸橋轍次 『大漢和辞典 修訂第二版(第四刷)』 1996年 大修館書店
- [Nihon-1972] 日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』 1972年 小学館
- [Okimori-1996] 沖森卓也・倉島節尚・加藤知己・牧野武則 編 『日本辞書辞典』 1996年 おうふう
- [Piotrovskaja/Piotrovskij-1974] Piotrovskaja, A.A.・Piotrovskij, R.G.

「Mathematiceskie mode i v diachronii i tekstoobrazovanii」 (『Statistika reci i avtomaticheskij analiz teksta』 1974年 Nauka (Leningrad) pp.361-400 所収) (筆者未見)

[Satok-1977] 佐藤喜代治 『国語学研究事典』 1977年 明治書院

[Sogo-1977] 惣郷正明・朝倉治彦 編 『辞書解題辞典』 1977年 東京堂出版

[Takahashi-1888] 高橋五郎 『漢英対照いろは辞典』 1888年 丸善 (学習院大学所蔵)

[Takenobu-1918] 武信由太郎 『和英大辞典』 1918年 研究社 (学習院大学蔵本の
1923年・訂正第40版を参照)

[Takenobu-1931] 武信由太郎 『研究社新和英大辞典』 (再版) 1931年 研究社 (国
立国会図書館蔵)

第4章 學術漢語と各種語彙表

採録単語との対照研究

第4章 学術漢語と各種語彙表採録単語との対照研究

4.1. 調査の概要

明治初期の学術漢語が現在の語彙の中でどのような位置を占めるか、また、明治から戦後にわたる語彙の変遷の中でどのような位置を占め、変化してきたかについて、各種語彙表と対照させることで調査を行なった。

前章と同様に、1881年に出版された『哲学字彙』[Inouet-1881]の訳語から漢語を抽出し(以下「学術漢語」)、これをいろいろな語彙表と対照させ、様々な統計的手法を用いて主に計量的見地から分析を行なった。現代の語彙を代表するものとして国立国語研究所の現代の雑誌・新聞・テレビといった現代メディアの語彙調査の結果を用いた。また、「学術漢語」の史的変遷を考える資料として、同じく国立国語研究所の1906年から1976年までの雑誌『中央公論』の語彙調査の結果や森鷗外・夏目漱石・志賀直哉・芥川龍之介・太宰治の小説の語彙を取り上げ、「学術漢語」と対照させた。

「学術漢語」と語彙表との対照にあたっては、調査単位や表記が必ずしも同一ではないので、以下のようにいくつかの点に考慮した。

「博士」を「はかせ」と読んだり「はくし」と読んだりする場合や、「総合」と「綜合」といった異なる表記の見出し語が別に存在する場合、また、「特別」という語のように名詞と副詞など複数回にわたって語彙表に出現する場合は、その各々の度数なり使用率なりを合計した。また、後述する、より「長い単位」の語彙表と対照させる場合も、その語形を含む語が出現するごとに度数を計上した。「気象」という語は、現在は一般的に天候などに関する語として使用されているが、『哲学字彙』では「Spirit」の訳語としてあげられており、現在の「気性」とほぼ同等であると考えられる。この調査では、使用された文脈や意味分野が明らかな場合に、「Spirit」の訳語として適当と思われる「気象」または「気性」の度数を計上した。「暗指」「容止」など、現在一般にあまり通用していない語形や表記の場合も同様に文脈や意味分野を確認しながら度数を計上した。

詳しくは[3.3.b.]を参照されたい。

4.2. 現代語の語彙調査との対照

4.2.a. 「雑誌九十種」の語彙調査との対照

現代の語の使用状況を表す語彙表として、国立国語研究所が調査した『現代雑誌九十種の用語用字』（1）（3）〔Kokken-1962a, Kokken-1962b〕（以下「雑誌九十種」）を取り上げ、これを先の『哲学字彙』から抽出した「学術漢語」と対照させた。

「雑誌九十種」〔Kokken-1962a, Kokken-1962b〕の語彙調査の概要は以下の通りである。

- 調査規模と方法

「評論・芸文」「庶民」「実用・通俗科学」「生活・婦人」「娯楽・趣味」の5部門にわたる90種の雑誌の、昭和31年分の本文全体から 1/227 の抽出比で抽出した標本調査。

- 単語分切

国立国語研究所の「 β 単位」（短単位）を採用。例えば、「短単位」の区切り方の例として、「国立／国語／研究／所／言語／計量／研究／部」（〔Hayashi-1982〕）があげられる。

- 標本全体の語数（短単位）

異なり語数 30,331語（助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く。）
 延べ語数 438,135語（助詞・助動詞を除く。記号・ローマ字、人名・地名を含む。）
 延べ語数 411,972語（助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く。）
 但しこの数字は「雑誌九十種表記表の統計」〔Miyajima-1997〕と『現代雑誌九十種の用語用字 全語彙・表記(FD版)』〔Kokken-1997b〕によって次のように訂正されており、この調査では訂正版のデータを用いる。

異なり語数 30,377語（助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く。）

延べ語数 412,306語（助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く。）

- 語彙表所収の語

標本使用度数7以上を語彙表に収める。

語彙表所収の異なり語数 7,232語（筆者計数。[Kokken-1962b]では7234語。理由不明。）

但し『現代雑誌九十種の用語用字 全語彙・表記(FD版)』[Kokken-1997b]には度数1から収録されている。

- 使用率

語彙表の使用率は、「記号・ローマ字、人名・地名を含む延べ語数」438,135語から算出されているが、後述する「新聞」の調査の結果との比較を容易にするため、「記号・ローマ字、人名・地名を除いた延べ語数」訂正版 412,306語で、新たに計算し直した。これを以下「修正使用率」とする。また、図表中の使用率の単位はいずれもパーセントである。

近代初期の「学術漢語」と「雑誌九十種」を対照させた結果を[表4.1. 学術漢語と「雑誌九十種」の対照表]にまとめた。

「雑誌九十種」と一致した「学術漢語」の、使用率上位20位までの語は、以下の通りである。

1. 問題	6. 関係	11. 部	16. 程度	20. 資本
2. 法	7. 時代	12. 社会	17. 政府	
3. 必要	8. 世界	13. 主義	18. 利益	
4. 時間	9. 人	14. 自由	19. 事実	
5. 人間	10. 現在	15. 数	20. 一般	

『現代雑誌九十種の用語用字』（3）[Kokken-1962b]では、語種による分析を度数に基づいた階級に分けて行なっている。これは、「度数1」から「度数65以上」までの2のべき乗（ 2^x ）を使った7階級の分類と、使用率の上位1,220語（度数50以上）を約300語ずつに分けた4階級の分類の2種類である。

ここでは、この度数に基づく階級分けを参考に、後述の「新聞」のデータとも対比できるように、度数を使用率に換算して、階級分けを行なった。使用率の上位約1,800語を300語ずつ6階級に分け、残りの語を1,000語強になるように4段階に分けた。各階級に属する語数は筆者が計数した。この10階級における漢語の語数と「学術漢語」の語数を示したのが、[表4.2. 「雑誌九十種」の使用率の階級別 漢語・「学術漢語」の語数]である。「雑誌九十種」の度数7以上の語6,552語のうち、412語が「学術漢語」と一致している。

この階級別のデータをさらに、比率によってグラフ化したものが、[図4.3. 「雑誌九十種」の使用率の階級別 漢語・「学術漢語」の比率]である。上位300語ずつの6階級では、漢語自身の比率が階級が下がるにつれてカーブを描くように増加しているが、「学術漢語」の比率は上から3～4階級目がピークになっていて、その下の2階級ではやや比率は下がっている。また、1,000語強ずつの下位の4階級では、漢語の比率はそれほど変化していないが、「学術漢語」の比率はやや下がっている。雑誌における漢語の比率と「学術漢語」の比率は、このように使用率の階級のピークがややずれているといえる。使用率の最上位の階級は和語の占める比率が高いと考えられ、使用率が下がるに従って漢語の比率が増加し、ある一定の比率に達するとその後は比較的安定している。それに対し、「学術漢語」の場合は最上位はピークではないものの、比較的上位の階級にピークが出現し、漢語の中でもより高い頻度で使用される語群であると考えられる。明治初期の「学術漢語」の一部が、現代において一般によく定着した様相を示しているといえる。

4.2.b. 「新聞」の語彙調査との対照

現代語の語彙表として、同じく国立国語研究所の『電子計算機による新聞の語彙調査』(I)(II)[Kokken-1970, Kokken-1971](以下「新聞」)を取り上げ、同様に『哲学字彙』の「学術漢語」と対照させた。

「新聞」[Kokken-1970, Kokken-1971]の語彙調査の概要は以下の通りである。

- 調査規模と方法

朝日、毎日、読売三紙の昭和41年1年分の1/60を標本とし、さらにその1/3（1紙分）を調査したものである。

- 単語分切

国立国語研究所の「短単位」と「長単位」（「ほぼ分節から助詞・助動詞をはずしたもの」[Mizutani-1977]）を採用している。

- 標本全体の1/3の語数（短単位の場合）

異なり語数 29,822語

延べ語数 431,186語（助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く。）

- 語彙表所収の語

標本使用度数5以上（短単位）を語彙表に収める。

異なり語数 9,643語（筆者計数。助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除く。）

近代初期の「学術漢語」と「雑誌九十種」を対照させた結果を「表4.4. 学術漢語と「新聞」の対照表」にまとめた。

「新聞」と一致した「学術漢語」の、使用率上位20位までの語は、以下の通りである。

「部」「問題」「政府」「時間」「社会」「世界」「数」「関係」「現在」「必要」「法」「主義」の12語は、「雑誌九十種」の対照結果の上位20語にも入っていた。

1. 部	6. 時間	11. 不動	16. 必要
2. 名	7. 社会	12. 教育	17. 自動
3. 経験	8. 世界	13. 工業	18. 法
4. 問題	9. 数	14. 政治	19. 電気
5. 政府	10. 関係	15. 現在	20. 主義

「新聞」の場合も、前述の「雑誌九十種」の場合と同様、度数を使用率に換算して、階級分けを行なった。各階級の使用率がなるべく「雑誌九十種」の場合と近くなるように配慮した。その結果、上位の約2,000語を6階級に、次の約5,600語を4階級に、残りを1階級に、計11階級にまとめた。この11階級における漢語の語数と「学術漢語」の語数を示し

たのが、[表4.5. 「新聞」の使用率の階級別 漢語・「学術漢語」の語数]である。「新聞」の度数5以上の語 9,643語のうち、434語が「学術漢語」と一致している。

この階級別のデータをさらに、比率によってグラフ化したものが、[図4.6. 「新聞」の使用率の階級別 漢語・「学術漢語」の比率]である。漢語自身の比率は、「雑誌九十種」の場合と異なり、上位の階級から7階級目まではずっと60%以上を維持している。一方、「学術漢語」の比率は「雑誌九十種」の場合ほどの増減はないものの、やはり上から3階級目がピークになっている。また下位5階級における比率は低い。「漢語」の使用比率は全般的に「雑誌九十種」の場合より高く、増減はあるがどの階級でもよく使用されている。これは「新聞」の報道活動を主体とする堅い文体によるものであろう。また、「雑誌九十種」の場合と同様に、「新聞」における「学術漢語」は最上位がピークではないが、比較的上位の階級にピークがあり使用頻度が比較的高い語群であると考えられる。

4.2.c. 「テレビ」の語彙調査との対照

現代メディアの語彙表として、同じく国立国語研究所の『テレビ放送の語彙調査』（I）（II）[Kokken-1995, Kokken-1997a]（以下「テレビ」）を取り上げ、同様に『哲学字彙』の「学術漢語」と対照させた。

「テレビ」[Kokken-1995, Kokken-1997a]の語彙調査の概要は以下の通りである。

- 調査規模と方法

1989年4～6月のキー局7チャンネルの放送から、5分間標本を計30時間20分、抽出し、その本編とCMの語彙をそれぞれ「音声」と「画面」（に表示される文字）について調査したものである。抽出比は 1/504。

- 単語分切

基本的に国立国語研究所の「長単位」を採用している。

- 標本全体の語数（長単位）

異なり語数	本編・音声	17,647語	CM・音声	3,455語
-------	-------	---------	-------	--------

	本編・画面	7,970語	CM・画面	3,591語
延べ語数	本編・音声	103,081語	CM・音声	9,235語
	本編・画面	20,246語	CM・画面	9,413語

(記号・ローマ字、人名・地名を含む。)

- 語彙表所収の語

標本の語をすべて語彙表に収める。

「テレビ」の調査では本編・CMの語彙表のうち、今回は本編のみを対象としている。これは「CMは本編とはかなり異なった語彙の量的特性を示す」[Kokken-1995]ため、調査にあたっては両者を区分すべきと考えた。さらに「テレビ」の語彙のうちでも放送の主体である本編を中心に調査をすすめる方がよいと思われたからである。また、「雑誌九十種」「新聞」との対照となるべく条件をそろえるために、題名、企業名、地名、人名など固有名とその混種語を除いた。

近代初期の「学術漢語」と「雑誌九十種」を対照させた結果を[表4.7. 学術漢語と「テレビ」の対照表]にまとめた。

「テレビ」の本編と一致した「学術漢語」の、使用度数(音声と画面の合計)上位20位までの語は、以下の通りである。「問題」「政治」「世界」「時間」「人間」「関係」「現在」「時代」「政府」「必要」「教育」「社会」の12語は、「雑誌九十種」ないしは「新聞」との対照結果の上位20語に入っていた語である。

1. 問題	6. 時間	11. 時代	15. 必要
2. 政治	7. 人間	12. 状態	15. 普通
3. 結構	8. 元気	13. 絶対	18. 教育
3. 世界	9. 関係	14. 政府	19. 社会
5. 最後	10. 現在	15. 動物	20. 選挙

また、使用度数別の「学術漢語」の語数を[図4.8. 「テレビ」の度数別「学術漢語」の語数]にまとめた。調査単位が異なるため、「テレビ」の異なり語数を分母とした「学

術漢語」の比率は算出できないが、404語が一致した。上記の上位10語までが使用度数50以上、上位20位まででは使用度数33以上となっている。

4.2.d. 現代メディアの中の学術漢語

雑誌・新聞・テレビという現代メディアの中で、近代初期の「学術漢語」がどのように使用されているか、その量的な構造を調査してきた。「雑誌九十種」では度数7以上の語彙表で412語、「新聞」では度数5以上の語彙表で427語、「テレビ」では404語の「学術漢語」が一致した。

この3メディアでは、このようにいずれも400語強の語が「学術漢語」表と一致したが、それらはどの程度、重なりがあり、どの程度傾向が似ているものであるかを、2x2分割表を作成し、 X^2 （カイ二乗）検定を使って分析した。2x2分割表の検定については等質性の検定、無相関（独立性）の検定などがあるが、ここでは「雑誌九十種」と「新聞」「テレビ」のうちから二つずつを組み合わせて2変数とし、無相関検定を行なうので、帰無仮説は「2変数は独立しており無関係である」となる。

「学術漢語」は1,847語あるが、そのうち3メディアのいずれか一つとでも一致した語は、557語であった。そこで、ここでは557語を総語数として以下のように検定した。各メディアに「存在する」語を「o」、「存在しない」語を「x」として、「雑誌九十種」と「新聞」、「新聞」と「テレビ」、「テレビ」と「雑誌九十種」の、計3通りの組み合わせを次のようにまとめた。

- 「雑誌九十種」と「新聞」

X^2 （カイ二乗）統計量は88.50で、自由度1、有意水準5%に対応する X^2 分布のパーセント点は3.84であるので、 $X^2 = |88.50| > 3.84$ より、有意水準5%で帰無仮説を棄却する。従って2変数「雑誌九十種」と「新聞」に出現した「学術漢語」の間には連関が認められ、両者の「学術漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。これ

は両者が共に採用した語と共に採用しなかった語の割合が総語数に比して多いことによる。

		新聞		計			新聞		計
		o	x				o	x	
雑	o	357	55	412	雑	o	315.8	96.2	412
誌	x	70	75	145	誌	x	111.2	33.8	145
計		427	130	557	計		427	130	557

$$X^2 = \{(357-315.8)^2 / 315.8\} + \{(55-96.2)^2 / 96.2\} \\ + \{(70-111.2)^2 / 111.2\} + \{(75-33.8)^2 / 33.8\} = 88.50$$

- 「新聞」と「テレビ」

X^2 (カイ二乗) 統計量は 0.02 で、自由度 1、有意水準 5% に対応する X^2 分布のパーセント点は 3.84 であるので、 $X^2 = |0.02| < 3.84$ より、有意水準 5% で帰無仮説を採択する。従って 2 変数「新聞」と「テレビ」に出現した「学術漢語」の間には連関が認められず、両者の「学術漢語」の採用の仕方は独立であるといえる。

		テレビ		計			テレビ		計
		o	x				o	x	
新	o	309	118	427	新	o	309.7	117.3	427
聞	x	95	35	130	聞	x	94.3	35.7	130
計		404	153	557	計		404	153	557

$$X^2 = \{(309-309.7)^2 / 309.7\} + \{(118-117.3)^2 / 117.3\} \\ + \{(95-94.3)^2 / 94.3\} + \{(35-35.7)^2 / 35.7\} = 0.02$$

- 「テレビ」と「雑誌九十種」

X^2 (カイ二乗) 統計量は、0.83 で、自由度 1、有意水準 5% に対応する X^2 分布のパーセント点は 3.84 であるので、 $X^2 = |0.83| < 3.84$ より、有意水準 5% で帰無仮説を採択する。従って 2 変数「テレビ」と「雑誌九十種」に出現した「学術漢語」の間には連関が認められず、両者の「学術漢語」の採用の仕方は独立であるといえる。

	雑誌		計		雑誌		計
	o	x			o	x	
テ o	303	101	404	テ o	298.8	105.2	404
レ x	109	44	153	レ x	113.2	39.8	153
ビ				ビ			
計	412	145	557	計	412	145	557

$$X^2 = \{(303-298.8)^2 / 298.8\} + \{(101-105.2)^2 / 105.2\} \\ + \{(109-113.2)^2 / 113.2\} + \{(44-39.8)^2 / 39.8\} = 0.83$$

「雑誌九十種」「新聞」「テレビ」に出現した「学術漢語」を上記の検定の結果を用いて考察すると、「雑誌九十種」と「新聞」の場合は両者に出現する語は似た傾向が認められる。しかし、「テレビ」と「新聞」、「テレビ」と「雑誌九十種」では同傾向とはいえない。これは、3つの現代メディアのうち、「テレビ」の場合だけが「学術漢語」の出現

の仕方が違っていることを示している。「テレビ」の語彙の総体は、異なり語数の場合で「本編・音声 17,647語」「本編・画面 7,970語」と、音声による語彙量と表記による語彙量の比率が 2.2:1 という比較的音声に偏った構造をしている。おそらくこの点が他の2つのメディアの語彙構造と異なる特徴を持つ要因ではないかと考えられる。

3つのメディアの中で「学術漢語」が「テレビ」に出現する語は 404語ある。このうち、「テレビ」にしか出現しないのは 75語で（〔表4.9. 「テレビ」にのみ出現する学術漢語〕参照）、残りの 329語は「雑誌九十種」ないしは「新聞」にも用例がある。この内訳をさらに細かくみると以下ようになる。

	音声のみ	音声と画面	画面のみ
- テレビのみ (75語)	61語	8語	6語
- 他にも用例あり (329語)	253語	119語	12語

「テレビ」における「学術漢語」の用例は、「画面のみ」はどちらも少ないが、「音声のみ」と「音声と画面」の2項目を比較すると、特に「テレビ」だけに出現する語は「音声のみ」に偏りがちである点に特徴があろう。これは、一般的に現代の話し言葉に定着した「学術漢語」が、書き言葉に定着したものとはやや異なっている可能性を示唆している。

一方で「テレビ」にしか出現しない「学術漢語」は、度数の低いものが多く、度数順位で上位68位までは「雑誌九十種」や「新聞」にも用例がある。このことから、「テレビ」に出現する「学術漢語」は度数が多いものは他のメディアとも共通する語が多く、特殊とはいえないが、度数の低い語には「音声のみ」に出現する特徴的な語を含む構造であると考えられる。

『哲学字彙』で学術漢語として採用され、現在のメディアに使用がみられる語のうち、特に雑誌・新聞・テレビにおいて高い頻度で使用されている語は比較的共通しており、最も高い使用率の階級にはそれほど多くはないものの、次のランクの比較的高い使用率の階級を支えていると考えられる。また、同じメディアにおいての使用でも、書き言葉と話し言葉への定着は若干異なると考えられる。『哲学字彙』の学術漢語は、出版当時は抽象性の高い専門用語として紹介されたが、今回のメディアの語彙との対照調査から、現代の抽象概念を表現する語として一般の生活に不可欠な、語彙の中核に存在するものと思われる。

(付) 郵便報知新聞の使用語彙の場合

現代のメディアではないが、参考のために国立国語研究所が行なった明治初期の郵便報知新聞の語彙調査の結果（『明治初期の新聞の用語』[Kokken-1959]）（以下「郵便報知」）と『哲学字彙』の「学術漢語」を対照させた。

「郵便報知」[Kokken-1959]の語彙調査の概要は以下の通りである。

- 調査規模と方法

明治10年（1877年）11月から翌年10月までの1年間の標本調査（抽出比 約1/12）。

- 単語分切

国立国語研究所の「 α 単位」（長単位）を採用。

- 標本全体の語数

本調査 異なり語数 22,272語

延べ語数 87,315語

（物価欄・広告欄を除く。助詞・助動詞、人名・地名・数詞を除く）

異なり語補充調査 異なり語数 8,616語

（物価欄・広告欄を含む。助詞・助動詞、人名・地名・数詞を除く）

- 語彙表所収の語

A表 本調査の標本使用度数10以上の語（度数付き）

（異なり語数 1,421語。人名・地名・数詞を含む）

B表 本調査の標本使用度数9以下の語（度数なし）

（異なり語数 20,992語。人名・地名・数詞を除く）

C表 異なり語数補充調査の語（度数なし）

（異なり語数 8,616語。人名・地名・数詞を除く）

今回の調査では、A表「度数10以上」、B表「度数1～9」、C表「追加」の三つの語

彙表を調べたが、「度数1～9」と「追加」の語彙表は統計上の配慮から度数が明らかにされていない。そのため例えば「裁判」という語は単独の見出し語の他に「度数1～9」「追加」の表に「大坂裁判所」「陸軍裁判所」などと「裁判」という語を一部に含む50種の用例が見つかったが、各用例の度数はわからないので合計の度数は（10を越えると推測できる場合であっても）明らかではない。

近代初期の「学術漢語」と「郵便報知」を対照させた結果を〔表4.10. 学術漢語と「郵便報知」の対照表〕にまとめた。716語の「学術漢語」が一致し、このうち78語は「度数10以上」の表にみられた。

「郵便報知」の「度数10以上」の表にある「学術漢語」の、使用度数上位20位までの語は、以下の通りである。

- | | | | |
|-------|--------|--------|--------|
| 1. 人民 | 6. 類 | 11. 自由 | 15. 貿易 |
| 2. 政府 | 7. 規則 | 12. 国家 | 17. 費用 |
| 3. 裁判 | 8. 法 | 13. 方法 | 17. 保護 |
| 4. 説 | 9. 次第 | 13. 法律 | 19. 意見 |
| 5. 一般 | 10. 利益 | 15. 性質 | 19. 資本 |
| | | | 19. 総計 |

明治初期の大新聞である「郵便報知」に出現する「学術漢語」716語と、現代の「新聞」に出現する「学術漢語」427語を比較したところ、310語は共通していた。「郵便報知」にあって「新聞」の結果には出てこない語は406語あり、ほとんどは「度数1～9」か「追加」の語彙表に出ているものであるが、「度数10以上」も9語あった。「総計」「順序」「便宜」「一箇」「道理」「各自」「事物」「明白」「通貨」で、この中には特に現代日本語として特殊なものはみられない。このうち「一箇」は調査単位の違いから不一致になった可能性が高い。

「郵便報知」の結果と前述の「新聞」の傾向に連関性があるかどうかを、2 x 2分割表を作成し、 X^2 （カイ二乗）検定を使って分析した。「郵便報知」と「新聞」を2変数とし無相関検定を行なうので、帰無仮説は「2変数は独立しており無関係である」となる。

両者に「存在する」語を「o」、「存在しない」語を「x」として、次のように検定を行った。

- 「郵便報知」と「新聞」

χ^2 (カイ二乗) 統計量は 267.96 で、自由度 1、有意水準 5% に対応する χ^2 分布のパーセント点は 3.84 であるので、 $\chi^2 = |267.96| > 3.84$ より、有意水準 5% で帰無仮説を棄却する。従って 2 変数「郵便報知」と現代の「新聞」に出現した「学术漢語」の間には連関が認められ、両者の「学术漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。統計的には、明治初期の大新聞における「学术漢語」の出現傾向と、現代の「新聞」における出現傾向は連関性があるという結果になった。

(実数)

		新聞		計
		o	x	
郵便 o		310	406	716
報知 x		117	1014	1131
	計	427	1420	1847

(期待値)

		新聞		計
		o	x	
郵便 o		165.5	550.5	716
報知 x		261.5	869.5	1131
	計	427	1420	1847

$$\chi^2 = \{(310-165.5)^2 / 165.5\} + \{(406-550.5)^2 / 550.5\} \\ + \{(117-261.5)^2 / 261.5\} + \{(1014-869.5)^2 / 869.5\} = 267.96$$

「郵便報知」における「学术漢語」と、現代の文献への影響については、第5章でさらに詳細に検討することにする。

4.3. 「中央公論」用語表との対照

現代までの学術漢語の使用の変遷をみるために、『哲学字彙』の「学術漢語」と『雑誌用語の変遷』〔Kokken-1987〕の語彙表を対照させた。この語彙表（以下「中央公論」）は1906年から1976年までの雑誌『中央公論』を10年ごとに調査した、8本の標本から成る史的語彙表である。

「中央公論」〔Kokken-1987〕の語彙調査の概要は以下の通りである。

- 調査規模と方法

雑誌『中央公論』の、1906年から10年ごとに1916年、1926年、……と1976年までの8年分について、各年の延べ語数がちょうど10,000語ずつになるように抽出した、標本調査。（抽出比は不定）

- 単語分切

国研の「ながい単位」を採用。例えば、「長単位」の区切り方の例として、「国立国語研究所／言語計量部」〔Hayashi-1982〕があげられる。

- 標本全体の語数

異なり語数（助詞・助動詞、記号を除く。人名・地名を含む。）

1906年	4,483語	1946年	4,439語
1916年	4,413語	1956年	4,341語
1926年	4,536語	1966年	4,649語
1936年	4,750語	1976年	4,936語

延べ語数 各年 10,000語（助詞・助動詞、記号を除く。人名・地名を含む。）

- 語彙表所収の語

標本の語をすべて語彙表に収める。

4.3.a. 「中央公論」における学術漢語の量的構造

近代初期の「学術漢語」と「中央公論」を対照させた結果を〔表4.11. 学術漢語と「中

「中央公論」の対照表]にまとめた。

『雑誌用語の変遷』[Kokken-1987]では、「中央公論」の調査結果の分析として、次の9つの観点から「特徴的な単語」を各160語をあげている。(各指標の算出方法については『雑誌用語の変遷』を参照。)この特徴的な語群に「学術漢語」がいくつ含まれているかという語数と、指標の得点の高い5語を以下に示した。

特徴的な語群	語数	用例上位5語
度数の高いもの	9語	問題 事実 人間 現在 必要
新しいもの	18語	影響 企業 認識 純粹 基本
ふるいもの	9語	宇宙 想像 一個 法 位置
ふえたもの	15語	共産 転換 問題 決意 理解
へったもの	8語	制度 説 法 主義 想像
変動(バラツキ)大	16語	知識 資本 宇宙 立法 真実
変動(バラツキ)小	14語	自由 宗教 一般 事実 現在
集中度 大	12語	知識 資本 宇宙 立法 影響
集中度 小	14語	自由 宗教 現在 一般 事実

「ふるいもの」よりは「新しいもの」、「へったもの」よりは「ふえたもの」との一致数が多いことから、明治初期の「学術漢語」は一般化が進み、現在に至っても使用され続けていると考えられる。

「中央公論」と一致した「学術漢語」のうち、8本の標本合計使用度数上位20位までの語は、以下の通りである。また、各標本ごとの使用度数上位約20位までの語を[表4.12.

「中央公論」各標本における使用度数上位の語]にまとめた。

- | | | | |
|-------|-------|--------|--------|
| 1. 社会 | 6. 人間 | 11. 必要 | 16. 時代 |
| 2. 問題 | 6. 事実 | 12. 自然 | 16. 現実 |

3. 政治	8. 自由	13. 関係	16. 政府
4. 国民	8. 国家	14. 文学	19. 結果
5. 世界	10. 現在	14. 資本	20. 一般

各標本における「学術漢語」の一致数は以下の通りである。また、8本の標本のいずれかに出現した「学術漢語」は627語である。

1906年	270語	1946年	281語
1916年	261語	1956年	235語
1926年	261語	1966年	248語
1936年	275語	1976年	257語

このうち、60語は8本の標本のすべてに出現している。この他、それぞれの標本について「7本の標本に共通の語」「6本の標本に共通の語」……「その標本にのみ出現する語」といった、標本ごとの内訳を〔図4.13. 「中央公論」各標本に共通の語数〕に示した。どの年度も非常な偏りがなく、比較的似た分布になっている。

4.3.b. 「中央公論」における学術漢語の類似度

このように8本の標本に出現した「学術漢語」は構造的には比較的似ているが、内容的にはどの程度似ているか、連関性があるといえるか、 2×2 の分割表を作成し、 X^2 （カイ二乗）検定を使って分析した。8本の標本から2本ずつを選んで比較するので、総あたりでは $(8 \times 7 / 2 =)$ 28通りの組み合わせになる。選んだ2標本を2変数とし、帰無仮説は「2変数は独立しており無関係である」となる。両者に「存在する」語を「o」、「存在しない」語を「x」として検定を行ない、その計算と結果の値を〔表4.14. 「中央公論」8本の標本における「学術漢語」の独立性の検定 —計算過程と結果—〕にまとめた。8本の標本のいずれかと一致した「学術漢語」は627語であったので、これを総語数として検定した。

結果は、28通りの組み合わせのいずれも X^2 （カイ二乗）統計量は 3.84 を上回った。自由度 1、有意水準 5% に対応する X^2 分布のパーセント点は 3.84 であるので、 X^2 統計量がこれを上回る時は有意水準 5% で帰無仮説を棄却する。従って、8本の標本の組み合わせのいずれの場合も、出現した「学術漢語」の間には連関が認められ、各標本間における「学術漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。

さらに、その連関性の強さがどの程度であるかを相関係数 PHI（ファイ）の値を算出して比較した。PHI（ファイ）は、以下のように X^2 （カイ二乗）統計量から算出する。式中の「n」はデータの総数で、ここでは $n = 627$ となる。

$$PHI = \sqrt{(X^2 / n)}$$

以下に算出した PHI（ファイ）の値の一覧を示す。

	1906年	1916年	1926年	1936年	1946年	1956年	1966年	1976年
1906年	--	0.311	0.213	0.205	0.194	0.225	0.212	0.185
1916年		--	0.206	0.199	0.228	0.269	0.244	0.270
1926年			--	0.303	0.267	0.295	0.250	0.243
1936年				--	0.309	0.317	0.310	0.309
1946年					--	0.382	0.262	0.260
1956年						--	0.398	0.365
1966年							--	0.327
1976年								--

この一覧表を用いて「1906年と1926年」「1916年と1936年」というように、年のへだたりが同じ時の組み合わせを集めて PHI（ファイ）の平均値を求めた。下記のうち「d10」というのは「1906年と1916年」のように、年のへだたりが10年の組み合わせを示す。

年のへだたり	PHIの平均
-----	-----
d10	0.319
d20	0.271
d30	0.260
d40	0.256
d50	0.237
d60	0.241
d70	0.185

基本的に PHI (ファイ) の平均値は、年のへだたりがひらくにつれて値が小さくなっていくので、類似度とデータの年のへだたりには関連があると考えられる。

そこで、この PHI (ファイ) の平均値をグラフ化し回帰直線の方程式を算出した。得られた方程式については、係数を t 検定にかけて妥当性を検証した。グラフについては [図 4.15. 「中央公論」 標本間の年差と類似性] を参照されたい。得られた回帰直線の方程式と決定係数 (R^2) は以下の通りである。

$$Y = -0.0017 X + 0.3216$$

$$R^2 = 0.8567$$

$$t \text{ 統計量} = | -5.47 |$$

t 統計量は -5.47 で、自由度 (7-2) = 5、有意水準 5% に対応する t 分布のパーセント点は 2.02 であるので、t 統計量 = | -5.47 | > 2.02 より、有意水準 5% で帰無仮説を棄却する。従って、上記の回帰直線の方程式は「有意性あり」であって、統計的に妥当であることが証明できる。回帰直線のデータへの適合度を示す決定係数 (R^2 、0 から 1 の間の値をとる) が「0.86」であって、比較的この方程式は適合度が高いことがわかる。回帰直線の X の係数は「-0.0017」で、負の関係を示しており、「中央公論」の標本の年差が小さければ PHI (ファイ) が示す類似度が高く、年差がひらくほど類似度が低くなることがわかる。

4.4. 小説の語彙との対照

『作家用語索引』[Kindai-1984, Kindai-1985a, Kindai-1985b, Kindai-1986, Kindai-1987, Kindai-1989]を用いて、『哲学字彙』の「学術漢語」を小説における語彙と対照させた。対象作家は、森鷗外（以下「鷗外」）、夏目漱石（以下「漱石」）、志賀直哉（以下「志賀」）、芥川龍之介（以下「芥川」）、太宰治（以下「太宰」）の5人である。

『作家用語索引』[Kindai-1984, Kindai-1985a, Kindai-1985b, Kindai-1986, Kindai-1987, Kindai-1989]の語彙調査の概要は以下の通りである。また、各作家の収録作品名、出版・連載初出年（筆者調査）、作品別見出し語数、作品別総語数については[表4.16.『作家用語索引』収録作品別データ]を参照されたい。

- 収録作家と底本

森鷗外	「各社の全集及び初版復刻本等」
夏目漱石	「各社の全集及び初版復刻本等」
志賀直哉	岩波書店刊『志賀直哉全集』（1973年版）
芥川龍之介	「各社の全集及び初版復刻本等」
太宰治	筑摩書房刊『太宰治全集』（全集類聚版）

- 単語分切

「複合語や接頭・接尾語のついた派生語を全体で1語」

「一般の国語辞典が見出しとして立項しているような連語や、結合度の高いものも全体で1語」

- 見出しの扱い

助詞・助動詞を含む。

「助動詞については、終止形のもとに一括することをせず、出現形のまま」（鷗外、漱石、芥川）

「助動詞についても、原則として終止形による見出しのもとに一括」（志賀、太宰）

- 出現度数の扱い

「同一文中に複数回出現しても、1とカウントする」（鷗外、漱石、芥川）

「出現形ごとに正確な出現回数によってカウント」（志賀、太宰）

－ 作家別収録作品数と作家総語数

作家	作品数	作家総語数
森鷗外	15篇	316,231語
夏目漱石	13篇	1,115,347語
志賀直哉	18篇	268,998語
芥川龍之介	24篇	139,344語
太宰治	23篇	256,997語

4.4.a. 「小説」における学術漢語の量的構造

近代初期の「学術漢語」と5作家の「小説」を対照させた結果を〔表4.17. 学術漢語と5作家の対照表〕にまとめた。作家別作品別の対照表は〔表4.18.〕（鷗外）、〔表4.19.〕（漱石）、〔表4.20.〕（志賀）、〔表4.21.〕（芥川）、〔表4.22.〕（太宰）を参照されたい。

5作家の「小説」と一致した「学術漢語」のうち、合計使用度数上位20位までの語は以下の通りである。また、各作家ごとの使用度数上位約20位までの語を〔表4.23. 「小説」作家別の使用度数上位の語〕にまとめた。

1. 人間	6. 関係	11. 結果	16. 満足
2. 自然	7. 事実	12. 時間	17. 約束
3. 必要	8. 想像	13. 記憶	18. 世界
4. 態度	9. 世間	14. 最後	19. 機会
5. 問題	10. 注意	15. 普通	20. 大抵

「学術漢語」1,847語のうち 923語が5人の作家の計93篇にみられた。うち、157語は

5作家すべてが使用していた。また、作家別一致語数と特定の1作家のみにみられた語の数は、以下の通りである。

作家	「学術漢語」語数	各作家のみが使用した語
鷗外	572語	75語
漱石	732語	149語
志賀	337語	13語
芥川	345語	15語
太宰	456語	45語

このうち、157語は5作家すべてに出現している。この他、それぞれの作家について「5作家に共通の語」「4作家に共通の語」……「その作家にのみ出現する語」といった、作家ごとの内訳を〔図4.24. 「小説」各作家に共通の語数〕に示した。「志賀だけが用いた語」と「芥川だけが用いた語」が、「志賀」全体と「芥川」全体に比して少ないことが、わかる。この2作家の場合は「学術漢語」の採用の仕方に関して、独自に使用した語は少ないといえる。

5人の作家の作品の初出年が1889年から1948年にわたっていることから、調査標本が1906年から1976年にわたる『雑誌用語の変遷』〔Kokken-1987〕で「中央公論」の語彙調査の結果の分析に使われていた指標「増加・減少」「変動（バラツキ）」を、この小説の調査結果にも適用してその特徴をみた。『雑誌用語の変遷』では「新しさ」と「集中度」という指標についても調査を行っているがここでははずした。これは、「新しさ」の指標については、小説の作家数は「中央公論」の標本数より少なく、どうしても5人のうちの後の時代の作家が使用した語が極端に高い点数を持つことになりかねないことによる。また「集中度」の指標は「変動（バラツキ）」と「ほとんど並行する結果」〔Kokken-1987〕になることによる。

「増加・減少の傾向」の指標は、1語1語について、5人の作家の使用率を2つずつ選び、すべての組み合わせ（計10通り）で比較する。ここでは索引は比較的「長い単位」で作成されており、一方「学術漢語」は比較的「短い単位」になっているので、正確な使

用率は算出できない。そこでここでは、その語のある作家の作品に出現した合計度数を、索引に示されたその作家の総語数で除して「出現率」とでもいうべき数字を使用した。さらに索引に採用された各作家の作品のうちそれぞれ最も古い作品の初出年を基準に、暫定的に、

[鴨外] ----> [漱石] ----> [志賀] ----> [芥川] ----> [太宰]

というように作家の順番を決め、とりあげた語の「出現率」が(鴨外) < (漱石)なら「+1」、(鴨外) > (漱石)なら「-1」というように得点をあたえる。1語につき10組の作家比較をするので、1語あたりの得点の合計は最大値「+10」、最小値「-10」となる。

「変動」の指標は、各語の「出現率」の標準偏差を平均で除したものである。標準偏差(S)は、その語の各作家の「出現率」(Xi)と平均(Av)の差を二乗し、その合計をデータの数(n)(ここでは作家の数なので5)で除して平方根を求めたものである。変異係数(H)は、ある語の5作家のデータのうち、値が1個を除いてすべて「0」だった場合、データの値にかかわらず定数となるので、ここでは2人以上の作家が使用している語だけを取り上げた。

$$\text{変異係数 (H)} = \text{標準偏差 (S)} / \text{平均 (Av)}$$

$$\text{標準偏差 (S)} = \sqrt{[\{\Sigma (Xi - Av)^2\} / n]}$$

上記の指標を用いて、「増加している語」「減少している語」「変動(バラツキ)の大きい語」「変動(バラツキ)の小さい語」を上位各15語〔表4.25. 「小説」における特徴的な語〕にあげた。「増加している語」上位10位までの語は、5作家の合計度数の上位に入っているものはなかった。逆に例えば「態度」という語は合計度数の上位に入っているが、減少傾向にある。また「記憶」「自然」「理由」などは「変動(バラツキ)の小さい語」に入っていて且つ合計度数の上位にも入っている。このような語はどの作家においても安定してよく使用されている語、ということになる。「増加している語」と「減少している語」の語数分布を〔図4.26. 「小説」増加と減少の傾向の語数分布〕にまとめた。全体的には「小説」における「学術漢語」は減少傾向がやや強いといえる。

4.4.b. 「小説」における学術漢語の類似度

5作家の「小説」における、『哲学字彙』の「学術漢語」の採用の仕方がどの程度、似ているものか、連関性があるといえるものかを調べるため、2 x 2の分割表を作成し、 X^2 （カイ二乗）検定を使って分析した。5作家から2人ずつを選んで比較するので、総あたりでは（5 x 4 / 2 =）10通りの組み合わせになる。選んだ2作家の「学術漢語」の採用数を2変数とし、帰無仮説は「2変数は独立しており無関係である」となる。両者に「存在する」語を「o」、「存在しない」語を「x」として検定を行ない、その計算と結果の値を〔表4.27. 「小説」5作家における「学術漢語」の独立性の検定 ―計算過程と結果―〕にまとめた。5作家のいずれかと一致した「学術漢語」は923語であったので、これを総語数として検定した。

結果は、10通りの組み合わせのうち「鷗外―漱石」の組み合わせを除く、9組の X^2 （カイ二乗）統計量が3.84を上回った。自由度1、有意水準5%に対応する X^2 分布のパーセント点は3.84であるので、 X^2 統計量がこれを上回る時は有意水準5%で帰無仮説を棄却する。従って、5作家の組み合わせのうち「鷗外―漱石」を除く、9組では出現した「学術漢語」の間には連関が認められ、各作家間における「学術漢語」の採用の仕方は独立ではないといえる。「鷗外―漱石」の組み合わせの場合だけは、統計的に有意性のある連関性は認められず、この2作家における「学術漢語」は互いに独立である可能性が高い。

さらに、その連関性の強さがどの程度であるかをPHI（ファイ）の値を算出して比較した。PHI（ファイ）は、以下のように X^2 （カイ二乗）統計量から算出する。式中の「n」はデータの総数で、ここではn = 923となる。

$$PHI = \sqrt{(X^2 / n)}$$

以下に算出したPHI（ファイ）の値の一覧を示す。 X^2 （カイ二乗）統計量が3.84を下回った「鷗外―漱石」の組み合わせについては、参考までに括弧付きで示す。

	鷗外	漱石	志賀	芥川	太宰
鷗外	--	(0.051)	0.248	0.270	0.160
漱石	(0.051)	--	0.226	0.179	0.088
志賀	0.248	0.226	--	0.405	0.398
芥川	0.270	0.179	0.405	--	0.339
太宰	0.160	0.088	0.398	0.339	--

作品の初出年の順に、鷗外、漱石、志賀、芥川、太宰、という順にデータを並べてみると、例えば「漱石」の行は「0.226」「0.179」「0.088」と徐々に PHI (ファイ) の値が小さくなっていき、連関性が下がっていくことがわかる。それに対し、「鷗外-芥川」の「0.270」は、「鷗外」からみて対「志賀」、対「太宰」に比べてやや高く、他の2作家よりも連関性が強い。また「芥川」「志賀」「太宰」の組み合わせは全体の中では比較的値が高く、この3作家の「学術漢語」の採用の仕方が、他の2作家との組み合わせよりも似ているといえる。

4.4.c. Piotrowskiカーブによる「小説」データの分析

「小説」における「学術漢語」の採用の仕方を時系列的にみていくため、作家別の異なり語数の増加の仕方を Piotrowskiカーブにあてはめて分析した。

Piotrowskiカーブについては詳しくは第3章を参照されたいが、X軸に時間(t)を、Y軸に出現する語数の総数に対する比率(p)をとった時、時間が下るに従って獲得される異なり語数がS字型カーブをえがく、ということを示した方程式である。多くの場面で異なり語の獲得が、最初は徐々に、次第に加速して増加し、最後には減速しながら一定量に近づいていく、ということを示す以下の式(ロジスティック曲線)に表わしている。[

Altmann-1983a] [Altmann-1983b] [Best-1983]

$$p = c / \{1 + a e^{-k t}\}$$

このうち、 a 、 k 、 c は係数で、 c は最終的に近づいていく語数の比率を示す。今回は0.1きざみで「鴎外」「漱石」は0.4、「志賀」「芥川」は0.2、「太宰」は0.3を使用した。 e は自然対数、 t は時間を示す。他の曲線の回帰分析の場合と同様に、データを元に最小二乗法を用いて一番適合する係数を求め、その理論値と実数との差を検証する。

上記の式は、両辺に対数をとることにより、線形に変形できる。

$$\ln(c/p - 1) = \ln(a) - k t$$

ここで、 $\ln(c/p - 1) = Y$ 、 $\ln(a) = A$ 、とおくと、

$$Y = -k t + A$$

という Y と t の関係を示した線形関数となる。これを最小二乗法を使って解くことによりデータに最も適合した回帰直線が得られる。さらに先の代入した Y と A を元にもどすことにより、直線は回帰曲線に変換できる。

実際の計算は以下の式によって A と k を求める。

$$A = \{ \Sigma(t^2)\Sigma(Y) - \Sigma(t)\Sigma(tY) \} / \{ n \Sigma(t^2) - (\Sigma t)^2 \}$$

$$-k = \{ n \Sigma(tY) - \Sigma(t)\Sigma(Y) \} / \{ n \Sigma(t^2) - (\Sigma t)^2 \}$$

まず作家別に、初出年順に作品を並べていき、そこに出現した「学術漢語」の異なり語数の累積を求める。ただし、初出年が同じ作品は合算し、前の作品に出現している語は算入しない。次に各年の累積異なり語数を「学術漢語」の総数 1,847語で除し、その比率を p とする。また、 t は各作品の初出年をそのまま用いてもよいが、計算が煩雑になるので「鴎外」の場合は1880、他の4作家の場合は1900を減じて小さい数にした。また、同じ年に複数の作品が発表されている場合は年を一つにまとめた。この p と t を用いて、 Y 、 A 、

a、 $-k$ の順に係数を求めていくと、「 $p = c / \{ (1 + a e)^{-kt} \}$ 」という回帰曲線の方程式を得ることができる。この方程式の妥当性は、式による理論値 (p') と実測値 (p) の差 (決定係数: R^2) がどのくらいであるかを以下の式で算出する。式中の「 M 」は p の平均値である。この指標「決定係数 (R^2)」の絶対値が経験的に「0.85」を上回れば、方程式は比較的良好にデータに適合しているという [注4.1.]。

$$\text{決定係数 } R^2 = 1 - \{ \Sigma(p - p')^2 / \Sigma(p - M)^2 \}$$

5作家の計算過程と結果については [表4.28. 「小説」データの Piotrowskiカーブによる分析 - 計算過程と結果 -] にまとめた。また、各作家の実測値と理論値を比較したグラフは [図4.29.] (鷗外)、[図4.30.] (漱石)、[図4.31.] (志賀)、[図4.32.] (芥川)、[図4.33.] (太宰) を参照されたい。

以下に得られた回帰方程式とデータへの適合度を示す決定係数 (R^2) の値をあげる。

$$\text{鷗外 } p = 0.4 / \{ 1 + 43.4746 e^{-0.1279 t} \} \quad R^2 = 0.9272$$

$$\text{漱石 } p = 0.4 / \{ 1 + 3.1745 e^{-0.3290 t} \} \quad R^2 = 0.9870$$

$$\text{志賀 } p = 0.2 / \{ 1 + 8.6899 e^{-0.1293 t} \} \quad R^2 = 0.7522$$

$$\text{芥川 } p = 0.2 / \{ 1 + 174.2560 e^{-0.2654 t} \} \quad R^2 = 0.7888$$

$$\text{太宰 } p = 0.3 / \{ 1 + 197.9577 e^{-0.1398 t} \} \quad R^2 = 0.8063$$

適合度の観点からは「鷗外」「漱石」が 0.85 を上回り、回帰曲線がよくデータと適合している。特に「漱石」はグラフ [図4.30.] をみても累積異なり語数の獲得率がなめらかなカーブで上昇しており、「漱石」の作品では異なり語数が急激に増加するようなところはみられない。それに対し「鷗外」の場合は1910年の「青年」で急激な異なり語数の増加がみられ、使用語彙や文体に大きな変化があったと推定できる [図4.29.]。これは単にその作品の異なり語数が多ければこのような変化が起こる訳ではなく、それまでの作品群と大きく異なる語彙が使用された場合に起こる現象なので、異なり語数の多い「澁江抽斎」の場合はこのような変化はみられず、既に「獲得した」(作家が以前の作品で用いた) 語彙が多く使用されている傾向がみられる。逆になめらかなカーブを持つ「漱石」では使われる語彙や文体が比較的安定していると考えられる。「志賀」の場合は1921年の「暗夜

行路」にやや大きな変化が見られる〔図4.31〕。また他の作家に比べて「学術漢語」の累積異なり語数が少なく、前項でみたように他の作家が使用する語彙をよく使用していることから、作品規模に比して異なり語数を抑えた語彙が読みやすい「志賀」の文体の特徴を形成する要因になっていると考えられる。「芥川」と「太宰」は決定係数（ R^2 ）の値がやや低いが、グラフ〔図4.32.〕〔図4.33.〕をみると比較的なめらかなカーブを描いている。ただ、Piotrowskiカーブが最初徐々に増加し、次第に加速し、最後にまた減速するS字を寝かせたような曲線をめざしているのに対し、この2作家の語彙の増加は最初に急増し、やや安定期があり、最後にまた増加するという、S字を裏返したような増加形態を示しているのが特徴で、この点で適合度が下がったのではないかと考えられる。

4.5. 結果の考察

明治初期の「学術漢語」を雑誌・新聞・テレビといった現代メディアの語彙調査の結果と対照させた。その結果、特に雑誌・新聞・テレビにおいて高い頻度で使用されている学術漢語は比較的共通しており、最も高い使用率の階級にはそれほど多くはないものの、次のランクの比較的高い使用率の階級を支えている。また、同じメディアにおいての使用であっても、テレビの画面と音声といった書き言葉と話し言葉への定着は若干異なっている。「哲学字彙」で紹介された学術漢語は、出版当時は抽象性の高い専門用語として紹介されたが、この調査結果から現代の抽象概念を表現する語として一般の生活に不可欠な、語彙の中核に存在するものと考えられる。

参考として、明治初期の大新聞「郵便報知新聞」における「学術漢語」の出現傾向と、現代の「新聞」における出現傾向を比べたが、両者は連関性があるという結果が出ている。「学術漢語」の一致数は明治初期よりも減っているが、現代の新聞はその流れを受け継いだものであるといえる。

また、「学術漢語」の史的変遷を、1906年から1976年までの雑誌『中央公論』の語彙調査の結果や森鷗外・夏目漱石・志賀直哉・芥川龍之介・太宰治の小説の語彙と対照させて分析した。

「中央公論」の場合は、一致した「学術漢語」に「ふるいもの」よりは「新しいもの」、「へったもの」よりは「ふえたもの」との一致数が多いことから、20世紀に入ってから一般化が進み、現在に至っても使用され続けていると考えられる。また、構造的にはどの年度も非常な偏りがなく、比較的似た分布になっていて、 X^2 （カイ二乗）を用いた分析でも1906年から1976年までのいずれも語彙に連関性があることがわかった。しかし、その類似性は均一ではなく、標本の間年差を考慮に入れると年差が小さければ、PHI（ファイ）が示す類似度が高く、年差がひらくほど類似度が低くなるといえる。

「小説」の場合は、各作家における「学術漢語」の採用にいろいろな特徴がみられた。「志賀」と「芥川」は「学術漢語」の採用の仕方に関して、独自に使用した語は少ないと考えられる。また、増加・減少の指標を使った分析では、全体的には「学術漢語」は減少傾向がやや強くなっている。類似度の分析では、「鷗外」と「漱石」には連関性がみられなかった。また、「芥川」「志賀」「太宰」における「学術漢語」の採用の仕方は他の2作家との組み合わせよりも似ているといえる。鷗外と漱石は、後の世代の作家に比べて特に漢学の素養があったと考えられ、これが世代的な差になっている可能性があるだろう。この点は先の「学術漢語」の小説における「減少傾向」の原因でもあろう。また、作家ごとの時系列的な累積異なり語数の増加の具合をみていくと、「漱石」の場合はなめらかな増加であるが、「鷗外」にはいくつか特徴的な時期があり、題材や作風、文体の変化が現れていると考えられる。「芥川」と「太宰」も比較的なめらかな増加傾向を示すが、「志賀」の場合は作品規模に比して異なり語数を抑えた語彙が特徴と思われる。

明治10～11年（1877～1878年）の「郵便報知新聞」の調査結果と一致した「学術漢語」の語数より、1906年以降の「中央公論」における「学術漢語」の一致数が大幅に少ないことや、5作家のうち「鷗外」「漱石」と残りの作家の使用語彙に世代差が感じられることから、当時の知識人たちの漢学的知識に支えられた1900年前後までが「学術漢語」のいわば「試用期」であり、知識層の人々に多種が使用されたが、その後は使用される語が限定されていく一方で広く一般に定着し、現代語彙の中核をなすに至ったのではないかと考えられる。

 章末注

[注4.1.] 1999年10月20日付 G. Altmann教授から筆者あての私信による。

 参考文献

- [Altmann-1983a] Altmann, G. 「A Law of Change in Language」 (『Historical Linguistics (Quantitative Linguistics. Vol.18)』 1983年 Studienverlag Dr. N. Brockmeyer (Bochum) pp.104-115 所収)
- [Altmann-1983b] Altmann, G. 「Das Piotrowski-Gesetz und seine Verallgemeinerungen」 (『Exakte Sprachwandelforschung: Theoretische Beiträe, statistische Analysen und Arbeitsberichte』 1983年 Edition Herodot (Goettingen) pp.59-90 所収)
- [Best-1983] Best, K.-H.・Kohlhase, J. 「Der Wandel von ward zu wurde」 (『Exakte Sprachwandelforschung: Theoretische Beiträe, statistische Analysen und Arbeitsberichte』 1983年 Edition Herodot (Goettingen) pp.91-102 所収)
- [Hayashi-1982] 林大 監修 宮島達夫・野村雅昭・江川清・中野洋・真田信治・佐竹秀雄 編 『図説日本語』 1982年 角川書店
- [Inouet-1881] 井上哲次郎 『哲学字彙』(初版) 1980年 名著普及会 (1881年 東京大学三学部刊の復刻)
- [Kindai-1984] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 夏目漱石(第I期)』第1巻-第9巻 1984年 教育社
- [Kindai-1985a] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 芥川龍之介』第1巻-第4巻 1985年 教育社
- [Kindai-1985b] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 森鷗外』第1巻-第6巻 1985年 教育社
- [Kindai-1986] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 夏目漱石(第II期)』第1巻-第6巻 1985年 教育社

- [Kindai-1987] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 志賀直哉』
第1巻-第6巻 1987年 教育社
- [Kindai-1989] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 太宰治』第1
巻-第7巻 1989年 教育社
- [Kokken-1959] 国立国語研究所 『明治初期の新聞の用語』 1959年 秀英出版
- [Kokken-1962a] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 -総記および
語彙表-』 1962年 秀英出版
- [Kokken-1962b] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 -分析-』
1962年 秀英出版
- [Kokken-1970] 国立国語研究所 『電子計算機による新聞の語彙調査』 1970年 秀英出
版
- [Kokken-1971] 国立国語研究所 『電子計算機による新聞の語彙調査(II)』 1971年 秀
英出版
- [Kokken-1987] 国立国語研究所 『雑誌用語の変遷』 1987年 秀英出版
- [Kokken-1995] 国立国語研究所 『テレビ放送の語彙調査I』 1995年 秀英出版
- [Kokken-1997a] 国立国語研究所 『テレビ放送の語彙調査II』 1997年 大日本図書
- [Kokken-1997b] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 全語彙・表記(FD版)』
(国立国語研究所言語処理データ集7) 1997年 三省堂
- [Miyajima-1997] 宮島達夫 「雑誌九十種表記表の統計」 (『日本語科学1』 1997年
国書刊行会 pp.92-104 所収)
- [Mizutani-1977] 水谷静夫 「語彙の量的構造」 (宮島達夫他著 『語彙と意味』 (岩
波講座日本語9) 1977年 岩波書店 pp.43-86 所収)

第5章 學術漢語語彙と各種語彙表の
採録語彙との比較研究

第5章 学術漢語語彙と各種語彙表の採録語彙との比較研究

5.1. 調査の概要

『哲学字彙』[Inouet-1881]の「学術漢語」を、各種語彙表との比較結果を用いていくつかのグループに分け、各グループの語彙の性格について考察した。「学術漢語」の明治初期の大新聞の語彙調査との比較結果と、現代の雑誌・新聞・テレビといったメディアの語彙調査との比較結果を組み合わせ、グループ分けの指標とした。これは、100余年を隔てた2つの調査結果を組み合わせることで、この間の「学術漢語」の使われ方の変化を大まかにとらえるためである。

さらに、この明治初期と現代という2種類の調査の間を埋めるものとして1906年から1976年の雑誌『中央公論』の語彙調査の結果、明治から昭和にかけての鷗外・漱石・志賀・芥川・太宰の小説の語彙調査の結果を参照した。中央公論の語彙と小説の語彙が、これらをはさむ明治初期の大新聞と現代の雑誌・新聞・テレビの調査結果のどちらとより強い相関があるかを重回帰分析を使って分析することで、明治初期の語彙の様相と現代の語彙の様相のどちらにより近いかをみることができる。明治中期以降にこれらの文献に現れた「学術漢語」のうちの一部は使用されなくなり、また別な語は最初は小説などにはみられないがより一般化することによって新たに文献に出現する。このような交替を統計的に解析するため重回帰分析を用いて、いつごろまで明治初期の語彙分布の影響があったものか、また現代の語彙の様相はいつごろから出現し始めたものかを探った。

今回は「学術漢語」の中の二字漢語の考察を中心にすることにし、一字漢語や三字以上の漢語を別扱いとした。一字漢語の場合は、例えば『哲学字彙』では「laughter」に対して「笑」という訳語があげられていて、さらに『哲学字彙 訳語総索引』[Hida-1979]では、一般的な読みの他にすべての語に必ず漢音の読みを付けるという原則をたてて「わらい」と「ショウ」の二つの読みを付けている。しかし、この漢音読みがどんな語の場合であっても一般的な意味でいう「漢語」となりうるのかということについてはさらに考慮が必要と考えた。また三字以上の漢語はほとんど複合語であると考えられ、調査単位の違いから、より短い単位で調査された場合の語彙表中にはそのような語は見られないことが

予め予測できた。これらの理由からこの調査では「学術漢語」のうち、1,700語の二字漢語を考察の対象とすることにした。

5.2. 語彙表との比較、その他の調査手順

上記の手順で得られた1700語の「学術漢語」を以下の語彙調査の結果と比較した。

- (1)雑誌九十種の語彙調査 [Kokken-1962a] [Kokken-1962b] [Kokken-1997b]
[Miyajima-1997] (以下図表で「MG」と略記)
- (2)新聞の語彙調査 [Kokken-1970] [Kokken-1971] (以下図表で「NP」と略記)
- (3)テレビの語彙調査 [Kokken-1995] [Kokken-1997a] (以下図表で「TV」と略記)
- (4)中央公論の語彙調査 [Kokken-1987] (以下図表で調査年の西暦の下2桁を使って「06」～「76」と略記、「06」は1906年の調査を示す)
- (5)郵便報知新聞 [Kokken-1959] (以下図表で「YUB」と略記)
- (6)小新聞の調査 [Tsuchiya-1997] [Tsuchiya-1998] [Hara/Tsuchiya-1997]
- (7)小説(森鴎外、夏目漱石、志賀直哉、芥川龍之介、太宰治)の調査 [Kindai-1984]
[Kindai-1985a] [Kindai-1985b] [Kindai-1986] [Kindai-1987] [Kindai-1989]
(以下図表で「OGA」「SSK」「SIG」「AKT」「DZI」と略記)

細かな調査方法についてはそれぞれの文献を参照されたいが、本調査に関連のある部分を概観できるように[表5.1. 「学術漢語」と比較した各種語彙調査の概要]にまとめた。

このうち(1)の雑誌九十種の調査では異なり語数・延べ語数について[Miyajima-1997]に訂正語数が記載されているのでこれを採用した。(2)の調査とそろえるために、助詞・助動詞、記号・ローマ字、人名・地名を除いた数字を基準とした。

(2)の新聞の語彙調査については語彙表に収められている標本使用度数5以上の語を比較の対象とした。

(3)のテレビの調査では本編・CMの語彙表のうち、今回は本編のみを対象とした。これは「CMは本編とはかなり異なった語彙の量的特性を示す」[Kokken-1995]ため、両者は区分すべきであるし、さらに、放送の主体である本編を中心に調査をする方が望ましいと思われたからである。

(4)の中央公論の調査は調査単位に「長単位」が使用されているので、『哲学字彙』の二字漢語と比較すると1対多の対応となる。また1986年の語彙については[Ishii-1990]がとりあげているが、語彙表は公開されていないので調査できなかった。

(5)の郵便報知新聞の調査でも調査単位の違いから同様に1対多の対応となる。また今回の調査では「度数10以上」「度数1～9」「追加」の三つの語彙表を調べたが、「度数1～9」「追加」の語彙表は統計上の配慮から度数が明らかにされていない。そのため例えば「裁判」という語は単独の見出し語の他に「度数1～9」「追加」の表に「大坂裁判所」「陸軍裁判所」などと「裁判」という語を一部に含む50種の用例が見つかったが、各用例の度数はわからないので合計の度数は（10を越えると推測できる場合であっても）明らかではない。

(6)の小新聞の調査結果は土屋礼子氏からお借りしたものである。調査の規模が国立国語研究所のものとは違うため直接度数を比較することはできないが、小新聞で使われる漢語はある程度庶民に浸透した語であると考えられる。例えば「『布告必用漢語画字引』の漢語－明治初期の漢語の層－」[Asano-1987]にあげられているような、明治初期の一般の人々に浸透した「漢語であることを意識」しない漢語や流行語としての漢語を考えていく上で大切な調査結果であると考えて、今回参考にした。

(7)の小説の調査は比較的長い単位で索引が作成されている。また出現度数の数え方は「同一文中に複数回出現しても、1とカウントする」(嶋外、漱石、芥川)ものと「出現形式ごとに正確な出現回数によってカウント」(志賀、太宰)するものがあり、今回は索引に記載された度数に従った。

また、『哲学字彙』の「學術漢語」がどの程度一般的な現代語として認められているかという観点から『三省堂国語辞典』[Sanseido-1992]でも見出し語の調査をし、まず「採録漢語」と「非採録漢語」の2グループに分けて分析を開始した。現代の国語辞典としては例えば『岩波国語辞典』[Iwanami-1994]などは非常に規範的であるが、「明治の後半ぐらいから」の言葉を収録しており、特に「少し以前の事物」については「やや詳しく」説明されている、という点で今回の調査の目的と合致しないと考えた。『三省堂国語辞典』は「現代日本語の姿を忠実に、また、全面的に反映した」とされていて、より現代語に重きを置いており、国立国語研究所の各種語彙調査の結果を考慮していると考えられたため採用した。

5.3. 現代国語辞典における採録學術漢語

5.3.a. 使用率に基づくグループ分け

調査対象の「學術漢語」1,700語のうち、『三省堂国語辞典』[Sanseido-1992]の見出し語と一致したのは1,083語、しなかったのは617語であった。

一致した1,083語を現代の使用頻度と明治初期の使用頻度の両方の観点からみていくために、次のように分類基準を立てた。

- 明治初期の使用頻度

郵便報知新聞の「度数10以上」の語彙表にあるもの高頻度	(グループa)
郵便報知新聞の「度数1~9」「追加」の語彙表にあるもの	..中・低頻度	(グループb)
郵便報知新聞の語彙表にないものなし	(グループc)

- 現代の使用頻度

- 雑誌九十種、新聞、テレビの度数のいずれも7、5、3を越えているもの
高頻度（グループ1）
- 雑誌九十種、新聞、テレビの度数のどれかが7、5、3を越えているもの
中頻度（グループ2）
- 雑誌九十種、新聞、テレビの度数がいずれも7、5、3を下回っているもの
低頻度（グループ3）
- 雑誌九十種、新聞、テレビの語彙表にないもの
なし（グループ4）

このうち郵便報知のグループbは合計の度数が明らかに10を越えると推測できるものから度数1かもしれない語まで幅があるので「中・低頻度」とした。また雑誌九十種では当初発表された語彙表が度数7以上であったこと、新聞の語彙表で発表されているのが度数5以上であることから、これらを一つの目安とした。テレビの語彙の「度数3以上」には統計的根拠はなく、度数分布表を作成した上で筆者が目安とした数字である。また新聞の語彙表では度数5以下は記載されていないので、グループ4（語彙表にない）にグループ3（低頻度）の語が一部混じっている可能性がある。

このようにして現代に残存する1,083語の「学術漢語」を、明治初期の使用頻度の点から3つに、また現代の使用頻度の点から4つに、計 $3 \times 4 = 12$ のグループに分類した。各グループの語数は以下ようになった。

この表に仮に(c4)から(a1)までの斜めの線をひいてみると、その線の上側にあたる(a2)(a3)(a4)(b4)は明治初期では比較的高頻度であったが現代はそれほどではない語群、下側にあたる(b1)(c1)(c2)(c3)は明治初期ではほとんど使用されていないが現代は頻度が増えている語群、ということになる。

郵便 報知 新聞	(a4)	(a3)	(a2)	(a1)
	0語	5語	26語	43語
	(b4)	(b3)	(b2)	(b1)
中・低 頻度	107語	153語	162語	110語
なし	(c4)	(c3)	(c2)	(c1)
	165語	174語	100語	38語
	なし	低頻度	中頻度	高頻度
				(雑誌/新聞/テレビ)

5.3.b.各グループの特徴

(a1) から (c4) の各グループに属する「学術漢語」の語彙表は [表5.2.] から [表5.12.] を参照されたい。グループ (a4) に属する語はみられなかった。また、語彙調査で短い単位を採用していた「雑誌」「新聞」の調査の場合は、比較のため度数を延べ語数で除して使用率 (単位はパーミル) で示したが、それ以外の語彙調査では長い単位を採用しているので、度数を直接示した。また、参考のために和文献での用例の初出年代の目安を

併記した。この項目と語彙表中の略号については、後述の「6.2.c.語の古さ」と「表6.3.初出例の年代と文献」を参照されたい。

(a4)を除く11のグループのうち、主なものについて述べる。

- グループ(a1) 郵便報知新聞：高頻度 雑誌・新聞・テレビ：高頻度

語彙表を「表5.2. グループ(a1)に属する「學術漢語」」に示す。

郵便報知新聞と一致した語で最も高頻度だったのは「人民」で、「政府」「裁判」が続く。「人民」は現在では雑誌・新聞・テレビともそれほど多くなく、同じこのグループの「国民」は逆に郵便報知新聞の度数が10であったのが雑誌・新聞・テレビとも増加して交替が起こったことを示している。「貿易」「輸出」「輸入」「政府」「国家」などもこのグループに入っている。「交易」の方は郵便報知新聞が中・低頻度、雑誌・新聞・テレビが中頻度、とグループ(b2)に入っている。このグループでは43語のうち半数以上の28語に小新聞の用例が見られた。「自由」「法律」「事実」「裁判」「教育」などである。また「政府」「義務」「人民」の用例はあるが「国家」「権利」「国民」はなかった。

- グループ(a2) 郵便報知新聞：高頻度 雑誌・新聞・テレビ：中頻度

語彙表を「表5.3. グループ(a2)に属する「學術漢語」」に示す。

このグループで郵便報知新聞の度数が特に高いのは「規則」「利益」などである。また小新聞にも見られる語で明治維新以後初出かと思われる語には「資本」「制限」などがあった。

- グループ(a3) 郵便報知新聞：高頻度 雑誌・新聞・テレビ：低頻度

語彙表を「表5.4. グループ(a3)に属する「學術漢語」」に示す。

ここに含まれるのは全体的な用例数が減少傾向にある語で、「道理」「便宜」「通貨」「総計」「事物」の5語である。

- グループ (b1) 郵便報知新聞：中・低頻度 雑誌・新聞・テレビ：高頻度

語彙表を〔表5.5. グループ (b1) に属する「学術漢語」〕に示す。

郵便報知新聞に用例はみられたが、現代の雑誌・新聞・テレビによく使われるようになった語群である。「問題」「現在」「必要」「利用」などが特に高使用率である。また「証拠」「困難」などは小新聞にも見られた。また「料理」もこのグループに分類されるが、これは『哲学字彙』では「Management」の訳語で「理を料する」という意味で使われているが現在では「食事を作る」意味の方が一般的であろう。このような意味変化については今後また別の機会に考察を行いたい。

- グループ (b4) 郵便報知新聞：中・低頻度 雑誌・新聞・テレビ：なし

語彙表を〔表5.8. グループ (b4) に属する「学術漢語」〕に示す。

郵便報知新聞では用例がみられたが、現代の雑誌・新聞・テレビではほとんど使われないう語群である。他の語と交替して使われなくなったり、現代人の理解語彙ではあっても特別な文脈がないと使われなかったりするものであろう。「鬼神」「粗忽」「天帝」「民情」「奢侈」「遁辞」などが見られる。また「正鵠」「遺恨」「説論」などは小新聞にも用例が見られる。

- グループ (c1) 郵便報知新聞：なし 雑誌・新聞・テレビ：高頻度

語彙表を〔表5.9. グループ (c1) に属する「学術漢語」〕に示す。

このグループでは38語のうち24語が明治維新以後初出と思われる語で、「空間」「認識」「常識」「科学」などが見られた。小新聞の用例はなかった。

- グループ(c2) 郵便報知新聞：なし 雑誌・新聞・テレビ：中頻度

語彙表を「表5.10. グループ(c2)に属する「学術漢語」」に示す。

郵便報知新聞には用例はなかったが、現代は比較的良好に使用されている語群である。「宇宙」「才能」「根本」などがある。また明治維新後初出かという語が52語あった。「客観」「主観」「哲学」「概念」「合理」「可能」などである。

- グループ(c4) 郵便報知新聞：なし 雑誌・新聞・テレビ：なし

語彙表を「表5.12. グループ(c4)に属する「学術漢語」」に示す。

理解語彙ではあるが、使われる場面が限定される語であろう。165語のうち56語が明治維新以後初出の語である一方で、15語は『日本国語大辞典』[Nihon-1972]に「仏教語」としての意味項目が立てられていた。前者は「演繹」「単元」「派生」などで、後者は「浄土」「解脱」「輪廻」「果報」などである。

5.3.c.用語変化の統計的多重分析

1906年から1976年の中央公論の語彙調査の結果は時系列的データといえるものであり、年代的には郵便報知新聞の調査と現代の雑誌・新聞・テレビの調査のほぼ間に位置する。また、鷗外、漱石、志賀、芥川、太宰の小説群も時期的にこの二つの調査の間に位置している。そこで、中央公論の調査結果と小説の調査結果が、この二つの調査結果とどのように関係があるか、どちらの調査とより強い相関があるかを調査した。

方法は郵便報知新聞の使用頻度を1説明変数(x1)、現代の雑誌・新聞・テレビをもう一つの説明変数とし(x2)、「全体」とグループ(a1)、グループ(a2)の3つについて重回帰分析を行った。「全体」の重回帰分析では、郵便報知新聞の度数は9以下は明らかでないため、これを「ダミー変数」として扱い、用例があるものを1、ないものを0として分析した。また、グループ別調査では、語数の少ないグループ(a3)を除くグループ(a1)(a2)は郵便報知新聞の度数をそのまま変数に用いることができたが、それ以外のグ

ループは度数が明らかでないので重回帰分析はできない。現代の雑誌・新聞・テレビを1説明変数にまとめて指標とするために、雑誌・新聞の使用率に、テレビの度数（音声・画面の合算）を延べ語数で割って使用率と桁を合わせた数値を加算した〔注5.1〕。中央公論のデータは各年の延べ語数が同じなので度数のまま使用したが、小説のデータは作家により延べ語数が異なるので度数を延べ語数で割って1000をかけた値（単位パーミル）を使用した。

また、この他にグループ（b1）について「雑誌・新聞・テレビ」の単回帰分析も行なった。

結果は〔表5.13. 「郵便報知新聞」と「現代の雑誌・新聞・テレビ」を説明変数とした重回帰分析の結果〕のようになった。2つの説明変数の係数が示したが、例えば、森鷗外の場合は「郵便報知新聞」は「0.005」、「雑誌・新聞・テレビ」は「0.046」となっている。これは、森鷗外のデータの回帰方程式は $y = 0.005(x_1) + 0.046(x_2) + c$ の形で得られたということである。

このようにして得られた回帰方程式について、式そのものの95%水準でのF検定と、「郵便報知新聞」と「雑誌・新聞・テレビ」の個々の回帰係数について、95%水準でのt検定を行った。「*」は「有意性あり」、「N.S.」は「有意性なし」を示す。またF検定で「有意性あり」と出たものについては決定係数（ R^2 ）も〔表5.13〕にあわせて掲載した。決定係数は0から1の間の値をとり、1に近いほど回帰直線のあてはまりがよいとされている。

「全体」の結果をみると、得られた重回帰方程式はF検定の結果が中央公論・小説のすべての場合について「有意性あり」となっていて、有効にそれぞれの値を説明しているように見える。しかし、係数の個別のt検定の結果をみると、中央公論の1936年以降と志賀および芥川のデータでは、「有意性なし」となっていて郵便報知新聞の変数は説明変数として有効に効いていない。

特に中央公論の1956年以降は、郵便報知新聞の回帰係数がマイナスになっており、これらの年度ではある語に郵便報知新聞の用例があるとかえって中央公論の度数が低く抑えられやすいことを意味している。中央公論のデータは、1926年までは郵便報知新聞のt検定が「有意性あり」となっていて、郵便報知新聞の回帰係数が有効に働いていることから、

中央公論の語の使われ方は大正時代までは明治初期の使用頻度と何らかの連動性があったと思われる。つまり明治初期の郵便報知新聞に使われていた語は、この頃までは中央公論でもよく使われる傾向にあったということである。

小説のデータでは、それよりも少し早く志賀、芥川のデータで、既に明治初期の語の使用頻度との連動性をなくしている。志賀・芥川のデータの、郵便報知新聞の回帰係数のt検定の結果が「有意性なし」になっているところから、それが読み取れる。それに対し、太宰のデータでは説明変数は二つとも有効に効いている。郵便報知新聞の説明変数はダミー変数なので、この変数が有効に効いたということは、「郵便報知新聞に用例がある」（＝ダミー変数が1となる）語は「用例がない」語に比べて、平均的に太宰における使用頻度が0.003ポイント高くなる、ということの意味している。（太宰のデータの、郵便報知新聞の回帰係数0.003による。）明治初期の郵便報知新聞に使われていた語は、太宰でもよく使われる傾向にある、ということになるが、これは、調査した太宰の23作品のうち『右大臣実朝』の語彙が延べ語数の18%を占めるので、このあたりの語彙が影響したのではないかと考えられる。また、芥川のデータも、郵便報知新聞の回帰係数は太宰と同じく0.003であるが、芥川のデータの方は太宰のデータに比べて決定係数（ R^2 ）の値が低く、方程式全体のあてはまりがあまりよくないといえる。一方、志賀のデータは芥川のデータに比べ、決定係数（ R^2 ）の値は低くはないが郵便報知新聞の係数がやや低い。郵便報知新聞のデータが、もしダミー変数でなく度数9以下についても数値があれば、志賀のデータとどのような相関関係にあり、どの語が特に回帰直線を押上げているかがより詳しくわかるであろう。

グループ別の重回帰分析・単回帰分析は、次のようになった。

グループ(a1)は、郵便報知新聞も現代の雑誌・新聞・テレビも高頻度の語群であるが、小説のデータでは有効な重回帰方程式は得られなかった。志賀のデータについては、雑誌・新聞・テレビの説明変数だけが効いているが、「雑誌・新聞・テレビ」をx変数、志賀の使用頻度をy変数として散布図を作成して回帰直線を求めると（〔図5.14. グループ(a1)における「志賀」と「雑誌・新聞・テレビ」〕を参照）、「関係」という語が回帰直線を押上げていることがわかった。「関係」という語の用例の約半数は、『暗夜行路』に集中していた。また、中央公論のデータは、いずれの年も「雑誌・新聞・テレビ」の説

明変数だけが有効に効いていて、この語群では明治初期の使用頻度よりも現代の使用頻度の方が影響が大きいと考えられる。

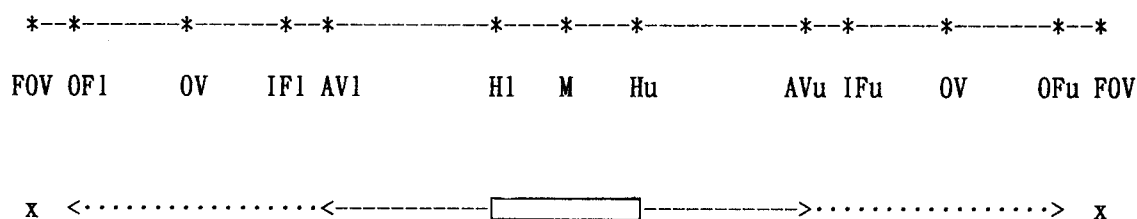
グループ (a2) は、郵便報知新聞が高頻度、現代の雑誌・新聞・テレビが中頻度の語群である、ここでは中央公論の1916年、1936年、小説のデータで有効な重回帰方程式が得られなかった。決定係数 (R^2) の値が低く、方程式のあてはまりが悪かったことがわかる。また、中央公論・小説のいずれのデータも郵便報知新聞の説明変数は有効に働いていない。中央公論の1946年以降のデータでは、F検定の結果、重回帰方程式自身は有効であった。これは、現代の雑誌・新聞・テレビでよく使用される語は、1946年以降の中央公論でも同様によく使用される傾向にあるということである。ただし、決定係数はばらつきがあって時系列的な傾向はみられない。

グループ (b1) は、郵便報知新聞が中・低頻度、現代の雑誌・新聞・テレビが高頻度の語群である。このグループでは郵便報知新聞の度数が明らかでないので、雑誌・新聞・テレビの説明変数だけを使って単回帰分析を行なったが、中央公論・小説のいずれの場合も有効な回帰直線が得られた。特に中央公論のデータでは、年が下って現代に近づくほどに決定係数 (R^2) の値が高くなり、あてはまりがよくなっていくことを示している。

小説のデータのうち、芥川と太宰は決定係数 (R^2) の値がほかの作家に比べてやや低い。この2作家について「雑誌・新聞・テレビ」を x 変数、小説の使用頻度を y 変数として散布図を作成して回帰直線を求めると ([図5.15. グループ (b1) における「芥川」と「雑誌・新聞・テレビ」] [図5.16. グループ (b1) における「太宰」と「雑誌・新聞・テレビ」] を参照)、どちらの場合も全体の分布からかなり離れたところに数個のデータがあることが確認できる。このようなデータが決定係数 (R^2) の値を下げていると考えられる。もっともはなれたデータは芥川・太宰とも「人間」という語であった。芥川の場合は『戯作三昧』『地獄変』『河童』に、太宰の場合は『斜陽』『人間失格』に「人間」という語の用例が特に多くみられる。

この語群の小説の使用頻度のデータの分布を、さらに「箱型図」を作成して確認した ([図5.17. グループ (b1) における作家別使用頻度分布] 参照)。この図は「探索的データ解析」といわれる分析手法においてデータの分布を「図によって要約する」 [Watanabe-1985] ために使われるもので、分布の全体像をとらえることが容易になり、要約値が外

れ値の影響を受けにくいとされている。箱型図では、データを順に並べ（値ではなく）その順位に基づいてデータの中央値(M)を中心に、最大値と中央値のさらに中央値（上ヒンジ(Hu:Upper Hinge)）から、最小値と中央値のさらに中央値（下ヒンジ(Hl:Lower Hinge)）までを「箱」で図示し、それぞれのヒンジから上下ヒンジ間の1.5倍の距離を上下にとった点（内境界点(Inner Fence)）の隣接値（上はAVu:Upper Adjacent Value、下はAVl:Lower Adjacent Value）までを「ヒゲ」と呼ばれる線で図示する。さらに上下の内境界点から、上下ヒンジ間の1.5倍の距離を上下にとった点（外境界点(Outer Fence)）までに含まれるデータを「外側値(OV:Outside Value)」、そのさらに外側にあるデータを「極外値(FOV:Far Out Value)」と呼んでいる。外側値、極外値はふつう白星、黒星で表示される。ここでは便宜上、極外値をxで、上下の隣接値（AV）までを実線で、さらに隣接値から外境界点（OF）までを破線で表わすことにする。



グループ(b1)の語群の小説の使用頻度のデータの分布を、このように箱型図にしてみると、「鷗外」に3点、「漱石」に7点、「志賀」に3点、「芥川」に5点、「太宰」に1点の極外値があることがわかる。特に「芥川」と「太宰」の最大値は全体の分布からやや離れていることが、散布図の場合と同様に確認できる。この最大値はどちらも「人間」という語である。

重回帰分析全体の結果としては、以下のようにまとめられる。明治初期の使用頻度は中央公論に対しては1926年ごろまで、小説に対しては「漱石」あたりまでに影響があったと考えられる。現代の雑誌・新聞・テレビでよく使用される語は、中央公論でも古くから同様によく使用される傾向にあった。「小説」の場合には5人の作家のうち「志賀」に特にそのような傾向がみられる。

5.4. 現代国語辞典非採録の学術漢語

『三省堂国語辞典』[Sanseido-1992]にない「学術漢語」617語についても、いくつかの語群に分けて分析した。これらの語群では郵便報知新聞で度数10以上の語はみられなかった。またその他の資料——現代の雑誌・新聞・テレビ、小説、1906年から1976年の中央公論、小新聞に用例があるものは非常に少なかったので、以下のようにグループ分けをした。

- 郵便報知新聞に用例があり、その他の資料にも用例があるグループ (d1) 28語
- 郵便報知新聞に用例があるが、その他の資料には用例はない....グループ (d2) 60語
- 郵便報知新聞に用例はないが、その他の資料には用例がある....グループ (e1) 48語
- 郵便報知新聞に用例はなく、その他の資料にも用例がないグループ (e2) 481語

以下、各グループの特徴をみていく。

- グループ (d1) 郵便報知新聞：あり その他の資料：あり

語彙表を[表5.18. グループ (d1) に属する「学術漢語」]に示す。

「慈恵」「侮慢」など5語については雑誌・新聞の用例があった。また「烏有」「猜忌」など4語は中央公論の1926年までに出現し、あとは出ていない。1語だけ「伝教」が1976年の中央公論に見られる。また小新聞では「章程」「協合」「狂癪」の3語がみられた。小説では志賀の用例はない。芥川も「心意」1語である。それに対して鷗外は4語、漱石は16語、太宰は4語あった。前項の全体の重回帰分析で、太宰の場合に郵便報知新聞の説明変数が有効に働いていたことと考え合わせると、太宰の作品には書かれた年代に比して多少とも現代ではあまり使われない語彙が含まれている可能性があるだろう。また明治維新後に初出と考えられる語は「協合」「衡平」「駁撃」の3語であった。「衡平」は「平衡」

と字順を逆にする語で、このような字順の交替は幕末・明治初期に多く見られた〔注5.2.〕。また「衡平」「駁撃」は『日本国語大辞典』〔Nihon-1972〕の用例からは1881年以前の初出例はみられなかったが、郵便報知新聞の1877年から1878年の語彙調査の結果に収録されているのでこちらの方が古い用例であろう。

- グループ (d2) 郵便報知新聞：あり その他の資料：なし

語彙表を〔表5.19. グループ (d2) に属する「学術漢語」〕に示す。

このグループに属す語は「不虞」「黽勉」「星学」などがある。また明治維新後初出の語は「神政」「開進」「政法」など22語であった。さらにこのうちの「産殖」「備位」「愕<目+台>」「勦解」「佻巧」「变故」の6語は『日本国語大辞典』〔Nihon-1972〕の用例よりも郵便報知新聞の用例の方が古い。また『日本国語大辞典』の見出し語にない語として「度位 (degree の訳語)」があった。

- グループ (e1) 郵便報知新聞：なし その他の資料：あり

語彙表を〔表5.20. グループ (e1) に属する「学術漢語」〕に示す。

この語群は、郵便報知新聞には用例はなかったが、その他の資料に用例がみられたものである。「永存」「作因」「反情」などは現代の雑誌にみられた。中央公論にみられる語も「誠信」「貨財」など8語あったがいずれも1926年まででそれ以後の用例はない。小説では鴉外が18語、漱石が14語、志賀が2語、芥川が5語、太宰が4語あった。小新聞の用例はなかった。また「収尾 (Sequence)」「詮表 (demonstration)」の2語は『日本国語大辞典』〔Nihon-1972〕にはみられなかった。「主我」「亮直」など13語が明治維新後初出と考えられる語である。そのうち「俱有」「作因」「主我」「反情」「預察」の5語は現代の雑誌に用例がみられた。

- グループ (e2) 郵便報知新聞：なし その他の資料：なし

語彙表を〔表5.21. グループ (e2) に属する「學術漢語」〕に示す。

この語群では 159語が明治維新以後初出かという語であった。このうち「意象」「外延」「覚性」「全称」「定言」「特称」「拝像」「理証」の8語は西周の著作に原語のルビ付きで用例がある。出典は以下の通りである。

- 意象 和装本『心理学』 [Nishi-1875]
- 外延 『致知啓蒙』 [Nishi-1874]
- 覚性 和装本『心理学』 [Nishi-1875]
- 全称 『致知啓蒙』 [Nishi-1874]
- 定言 『致知啓蒙』 [Nishi-1874]
- 特称 『致知啓蒙』 [Nishi-1874]
- 拝像 永見本『百学連環』 [Nishi-1981]
- 理証 洋装本『心理学』 [Nishi-1878] [注5.3.]

また、「極所」「不偏」「礼典」の3語は、ルビはないが1874年から1875年に発行された『明六雑誌』 [Meiroku-1976] [Takano-1998] に用例があった。出典は以下の通りである。

- 極所 (「最上極処」の形で) 38号 西周「人世三宝説一」
- 不偏 (「不偏不易」の形で) 12号 中村正直「西学一斑前号ノ続」
- 礼典 6号 西周「教門論三」

さらに「仮話」「廢老」など 93語は『哲学字彙』が初出の可能性が高いと考えられる。

『日本国語大辞典』 [Nihon-1972] の見出し語に収録されていない語は 133語あった。これらは、たとえば「化法 (reduction)」「神跡 (miracle)」「総念 (notion)」などの語である。このうち、以下の4語は西周の著作に原語のルビ付きで収録されている。

- 下題 (data)
- 渾体 (sorities)
- 分性 (divisibility)
- 命証 (predicate)

「下題」は、明治8年から9年にかけて出版された和装本『心理学』 [Nishi-1875] にあり、片仮名で「ダタ」とルビがある。「渾体」「命証」は、明治7年に出版された『致知啓蒙』 [Nishi-1874] にアルファベットのルビ付きで、記述されている。また「分性」

は、永見本『百学連環』〔Nishi-1981〕にある。『百学連環』の語彙と『哲学字彙』の訳語については『近代語の成立』〔Satot-1992〕で触れられているが、公刊された『心理学』や『致知啓蒙』とは異なり、講義筆録本である『百学連環』を井上哲次郎が閲覧したかは不明である。第2章第4節でも述べたように、井上哲次郎が『哲学字彙』の草稿を西周に送って意見をもとめているので、西周から直接指導を受けた可能性も高い。西周の稿本や講義筆録本にしかない用語までを井上哲次郎が受け継いでいるということから、西周の著作が相当の影響を与えたと考えられる。

5.5. 近代における学術漢語の生態

明治初期の「学術漢語」のうち、現代国語辞典に採録され、広く一般に使われるようになった語は、遅くとも1920年代ごろまでに明治初期の使用の様相の影響が消え、現代の使用の様相があらわれ始めたと考えられる。

また、現代国語辞典に採録されず一般にあまり定着しなかったと考えられる語の中で、明治に入って初出したと思われる語には、西周の用語の影響がかなりみられた。西周は、明治の学術用語を数多く造語したことが知られているが、『哲学字彙』〔Inouet-1881〕がそれをかなり受け継いだにもかかわらず、一方で定着しなかった語も相当数あったと考えられる。

明治時代の漢語には、このような語形の交替の問題の他に、意味変化の問題、字順の問題、呉音と漢音など音韻交替の問題など様々な問題があるが、これらの問題についても今後調査をすべきであると考えている。

章末注

〔注5.1.〕 テレビの調査は長単位の語彙表で、『哲学字彙』の「学術漢語」とは1対複数の対応になるため、この数値は使用率ではなく、出現率とでもいうべきもので

ある。また、これらを加算することは分母が異なるため数学的には意味を持たないが、一つの指標として用いた。

[注5.2.] 字順の交替に関する研究は [Hida-1973] [Matsui-1983] [Satot-1980] [Suzuki-1986] [Tajima-1998] などがある。

[注5.3.] 西周の和装本『心理学』は原書の始めの部分を訳したもので、その後完訳版である洋装本『心理学』が出版された。和装本の部分はそのまま洋装本の上巻の一部となっている。詳しくは第2章を参照されたい。

参考文献

- [Asano-1987] 浅野敏彦 「『布告必用漢語画字引』の漢語—明治初期の漢語の層—」
 (全国大学国語国文学会編 『文学・語学第114号』 1987年 桜楓社 pp.75-85 所収)
- [Hara/Tsuchiya-1997] 原俊彦・土屋礼子 「明治期小新聞の語彙変遷に関する数量的分析の試み」 1997年 (シンポジウム「人文科学における数量的分析(2)」)
- [Hida-1973] 飛田良文 「現代漢語の源流」 (『言語生活259号』 1973年 筑摩書房 pp.70-79 所収)
- [Hida-1979] 飛田良文 編 『哲学字彙 訳語総索引』 1979年 笠間書院
- [Inouet-1881] 井上哲次郎 『哲学字彙』(初版) 1980年 名著普及会 (1881年 東京大学三学部刊の復刻)
- [Ishii-1990a] 石井久雄 「『中央公論』1986年の用語」 (『国立国語研究所研究報告集11』 1990年 秀英出版 pp.1-40 所収)
- [Iwanami-1994] 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 編 『岩波国語辞典 第5版』 1994年 岩波書店
- [Kindai-1984] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 夏目漱石(第1期)』第1巻-第9巻 1984年 教育社
- [Kindai-1985a] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 芥川龍之介』第1巻-第4巻 1985年 教育社
- [Kindai-1985b] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 森鷗外』第

1巻-第6巻 1985年 教育社

[Kindai-1986] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 夏目漱石(第II期)』 第1巻-第6巻 1985年 教育社

[Kindai-1987] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 志賀直哉』 第1巻-第6巻 1987年 教育社

[Kindai-1989] 近代作家用語研究会・教育技術研究所 編 『作家用語索引 太宰治』 第1巻-第7巻 1989年 教育社

[Kokken-1959] 国立国語研究所 『明治初期の新聞の用語』 1959年 秀英出版

[Kokken-1962a] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 -総記および語彙表-』 1962年 秀英出版

[Kokken-1962b] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 -分析-』 1962年 秀英出版

[Kokken-1970] 国立国語研究所 『電子計算機による新聞の語彙調査』 1970年 秀英出版

[Kokken-1971] 国立国語研究所 『電子計算機による新聞の語彙調査(II)』 1971年 秀英出版

[Kokken-1987] 国立国語研究所 『雑誌用語の変遷』 1987年 秀英出版

[Kokken-1995] 国立国語研究所 『テレビ放送の語彙調査I』 1995年 秀英出版

[Kokken-1997a] 国立国語研究所 『テレビ放送の語彙調査II』 1997年 大日本図書

[Kokken-1997b] 国立国語研究所 『現代雑誌九十種の用語用字 全語彙・表記(FD版)』 (国立国語研究所言語処理データ集7) 1997年 三省堂

[Matsui-1983] 松井利彦 「近代日本漢語と漢訳書の漢語」 (『広島女子大学文学部紀要第18号』 1983年 pp.35-51 所収)

[Meiroku-1976] 大久保利謙監修 『復刻版明六雑誌(第1巻・第2巻・第3巻)』 1976年 立体社 (1874-1875年 報知社出版の復刻)

[Miyajima-1997] 宮島達夫 「雑誌九十種表記表の統計」 (『日本語科学1』 1997年 国書刊行会 pp.92-104 所収)

[Nihon-1972] 日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』 1972年 小学館

[Nishi-1874] 西周 『致知啓蒙 上・下』 1874年 (和装 学習院大学蔵)

[Nishi-1875] 約瑟奚般(ヘブン) 著・西周 訳 『心理学 上・中・下』 1875-1876年 文

部省版（和装 学習院大学蔵）

[Nishi-1878] 奚般 著・西周 訳 『心理学 上・下』 1878-1879年 文部省版（洋装 国立国会図書館蔵）

[Nishi-1981] 大久保利謙 編 『西周全集 第4巻・百学連環』 1981年 宗高書房

[Sanseido-1992] 見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・飛田良文 編 『三省堂国語辞典 第4版』 1992年 三省堂

[Satot-1980] 佐藤享 『近世語彙の歴史的研究』 1980年 桜楓社

[Satot-1992] 佐藤享 『近代語の成立』 1992年 桜楓社

[Suzuki-1986] 鈴木丹士郎 「二字漢語の字順についての問題」（『国語論究第1集・語彙の研究』 1986年 明治書院 pp.278-306 所収）

[Tajima-1998] 田島優 『近代漢字表記語の研究』 1998年 和泉書院

[Takano-1998] 高野繁男・日向敏彦 監修・編集 『明六雑誌語彙総索引』 1998年 大空社

[Tsuchiya-1997] 土屋礼子 「明治前期小新聞の語彙に関する数量的分析」 1997年（第3回シンポジウム「コンピューター国文学」）

[Tsuchiya-1998] 土屋礼子 「明治十年代後半の小新聞に関する語彙の数量的分析」 1998年（シンポジウム「人文科学における数量的分析(3)」）

[Watanabe-1985] 渡部洋・鈴木則夫・山田文康・大塚雄作 『探索的データ解析入門—データの構造を探る—』 1985年 朝倉書店